

アジア地域研究 第1号

2018年3月

論文

- 新・塩鉄論 新田 栄治..... 1
ベトナム中部出土の漢系遺物に関する考察：チャーキュウ遺跡の調査成果を中心に
山形真理子..... 11
Bộ Sưu Tập Trang Sức Thủy Tinh tại Bảo Tàng Lịch Sử Việt Nam, Thành Phố Hồ Chí Minh
Nguyễn Thị Hoài Hương, Yuko HIRANO, Keiichi TOKUSAWA..... 21

研究ノート

- インドネシア・ラマレラ捕鯨の四半世紀 江上 幹幸・小島廣太郎..... 35
シップソンパンナーにおける伝統的土器製作の類型と移転
—中国雲南省とミャンマー東部及びタイ北部の関係をめぐって—
徳澤啓一・秦 竹軒・持田直人..... 61

調査報告

- フィリピン・マクタン島コルドヴァにおける農産物の流通に関する調査報告
辻 貴志..... 77

岡山理科大学 経営学部経営学科

『アジア地域研究』創刊に寄せて

『アジア地域研究』を創刊いたします。

岡山理科大学では、去年 2017 年 4 月から、データサイエンスをベースとした経営学部を発足させ、それにもなつてこれまでの『社会情報研究』を衣替えして、『アジア地域研究』を発刊することになりました。

この新しい経営学部は、総合情報学部社会情報学科を前身として、それを発展拡張させた学部です。すでにその社会情報学科のときから、日本やアジア地域の歴史、考古、民俗、地理各分野の研究者を擁していましたので、この“資産”をもとに、日本の経済、政治においてこれからますます重要となってくるであろうアジア地域をより深く知ることを意識した研究誌を作ろう、ということで生まれた雑誌です。経営学部のコンセプトも、その英語表記を“Management”としたように、いわゆる会社経営に資することを学ぶというよりも、マーケティング主導による新たな経済的な付加価値を創造できるような人材育成を目指すというもので、そのためには、重要なパートナーであるアジアという地域を、その文化・伝統を含めて深く知ることが必要である、という認識に基づいた教育をしようとしています。そうした学部において研究され、発行される本誌はしたがって、経営学や経済学分野のみならず、政治、社会、そして歴史や民俗に至るまで、アジアに関わる研究を幅広く募集し掲載していくものと考えています。

岡山理科大学のみならず、日本におけるアジア研究の発展に寄与する雑誌となることを祈念いたします。

岡山理科大学 教学支援センター長・教学支援機構副機構長
経営学部 経営学科
志野敏夫

新・塩鉄論

新田 栄治*

要旨 塩鉄の専売制度は前119～117年、前漢・武帝によって始められた。前81年、少帝の命により、経済官僚と儒者による専売制をめぐる論争が行われ、その議論をまとめたものが桓寛の選による『塩鉄論』である。本論はそれとは無関係である。

本論の主題は、過酷な自然環境のもとにあった東北タイが塩鉄生産を基礎として経済的繁栄を得たことを考古学から推論するものである。

キーワード 地下の塩、ラテライト土壌、乾燥気候、フタバガキ科樹木、サバンナの景観、含塩礫層、毛管現象による塩分上昇、地表面塩華の採取、ラテライト、鉄ノジュール、小型円筒形炉、木炭、錬鉄生産、南宋、元、中国・東南アジア間貿易、中国産鉄、鉄鍋、海水煮沸製塩

1. 東北タイの生態学的環境

東北タイはコーラート高原といわれる標高100～200m程度の緩やかな起伏をもった地形からなる。この地形はプレートが移動して大陸に衝突した際に、海底が持ち上げられた結果であり、その際に大量の海水がいっしょに持ち上げられた。さらに断層が生じてカンボジア側が陥没し、現在のダンレク山脈が形成された。持ち上げられた大量の海水は地下に浸透して、コーラート高原の地下には膨大な量の塩が残された。この中生代に形成された地下50～100mの岩塩層の上、地表から2～3m地下にも含塩礫層が存在する。この含塩礫層に起因する塩は地下の水に溶け、毛管現象によって地表面上昇する。塩を含んだ水分は地表面で蒸発し、地表面には塩の結晶が残される。これが東北タイの地表に見られる塩である。

コーラート高原の土壌はラテライトである。熱帯に特有の赤色土壌で、風化によって植物のための栄養分は分解溶脱し、酸化鉄とアルミナのみが残った貧栄養土壌である。

さらに一年中乾燥気候下にある。コーラート高原で最も乾燥している地域では年間降雨量はわずか1,000～1,250mmにすぎない（ちなみに鹿児島県本土では2,500mm。屋久島では4,000mmを超える）。東北タイは西側をチャオプラヤー流域の中部タイとの境界であるペチャブン・ピエドモント山系で、東側はベトナム・ラオス国境のチュオンソン山脈（ラオスではルアン山脈）によって、ついたてのようにさえぎられている。そのため、ベンガル湾の水分を含んだ夏の南西季節風はペチャブン・ピエドモント山系の西斜面に雨を降らせ、湿気を失った風がコーラート高原に入る。冬季はその逆で、南シナ海の水分を含んだ北東季節風はチュオンソン山脈東斜面に雨を降らせ、湿気を失った風がコーラート高原に入る。そのため、コーラート高原にはレイン・シャドウ（Rain Shadow）が生じ、全体に乾燥気候になる。高原で、乾燥気候のため、植生は乾燥フタバガキ科（例えばチーク）の疎林が広がるサバンナの景観を呈していた。

コーラート高原の生態環境は農耕には不利であった（一部の小河川流域は除く）。

2. 東北タイの製塩

東北タイには多数の製塩遺跡が存在する。それらは東北タイ全域に分布しているのではなく、特定の地域に集中する。ムン川上流域、チー川上中流域、ソククラム川流域、ノンハンケンパワピー湖周辺域である。これらの製塩遺跡はいずれも居住遺跡と比べればずっと規模の小さなマウンド状の土の堆積であり、マウンドの裾には大量の土器細片が散布する特徴がある。また周囲は荒涼とした景観を呈し、地表面には塩の結晶が真っ白に現れ、植物はわずかの灌木しかない。

製塩遺跡の考古学調査はハイアムが先鞭をつけた。東北タイ中央部のロイエ県スワンナプーム郡ヤノン村のボーパンカン遺跡（Bo Phan Khan）がそれである

* 鹿児島大学名誉教授

(Higham 1977, Higham et al.1971)。ここでは煎熬のための燃料である木炭と、採鹹槽あるいは採鹹のための水を溜めておく粘土を貼った水槽と思われる円形の遺構が2基検出されている。前5世紀と推定されており、東北タイの製塩遺跡としては最古の年代である。また、タイ芸術局によりコンケン県バンパイ郡のバーノンピア遺跡 (Ban Non Phia) の調査も行われているが、詳細については明らかではない。シーサクはムン川、チー川、ソクラーム川の流域に、集落跡とは違い、小規模の低いマウンドが分布すること、それらが製塩遺跡であることを東北タイの踏査によって明らかにしている (Vallibhotama 1981, 1982)。

新田によるナコーン・ラーチャシーマー県ブアヤイ郡ノントウンピーポン (Non Tung Pie Pong) 遺跡 (以下 NTPP) の発掘は、後3世紀の製塩遺跡の実態を示すものである。NTPP 遺跡はムン川上流域に位置し、南北120 m、東西75 m、高さ5.5 m程度のマウンドである。このマウンド裾には、大量の製塩土器の破片が散乱しており、また乾季には周囲の地表面に塩の結晶が生じて、真っ白になっている。この遺跡の周囲はすべて塩の結晶が地表に現れているため、荒涼とした景観をしており、塩分と乾燥に強い、棘をもった低灌木が生えているだけである。また、周囲には NTPP 遺跡と同じような製塩マウンドが点在している。

製塩関連遺構が検出されたのは、基底部も含めて全部で10層に及び、製塩遺構を包含したのはうち9層であった。各層には全く同じ構造の遺構がみられた。作業面は上層になるとやや傾斜をなした平地に整地されている。検出した遺構は、①水槽、②採鹹槽がほとんどである。その他に、煎熬炉跡が2箇所検出された。水槽は厚さ1cmほどに粘土を貼った、高さ20cmほどの壁を作り、平面形は長方形をしている。なかには短辺の中央部が外側に少し張り出した五角形をしたものもある。採鹹槽と考えられる遺構は単独に設置されているのではなく、2～4の採鹹槽が横に連結している場合が多い。採鹹槽は平面形が長方形で、粘土で現高20cm程度の壁を築き、緩傾斜側の外側に地面を浅く円形に掘ったくぼみがあり、そのなかには、土器の破片が入っているものもある。また、採鹹槽の内部で火を焚くことによって構造の強化を図っている。採鹹槽前面に掘られたピット内に置かれた土器は、採鹹槽から流下する鹹水を受ける装置である。また、煎熬炉と考えられる遺構が2か所で検出された。ひとつは火熱で焼けた地面に多量の土器片が散乱していた。もうひとつは火熱を受けた円形のピット内に製塩土器がほぼ完全な形で残っていた。

出土遺物はすべて土器である。ほとんどが火熱を受けて真っ黒になった細片であり、また製塩土器の特徴を示すように、剥離状態の細片であった。復元できた土器は10点である。直径30cm、高さ15cm程度の丸底ボウル状の製塩土器である。そのうち1点は口縁部をつまんで片口状に加工し、注口としている。これは製塩土器ではなく、水を注ぐのに使ったものである。製塩土器はすべてタタキ技法によって作られており、消耗度が激しいことから、すべて粗製土器である。これら製塩土器の表面に残るタタキ痕である縄目には、少なくとも3種類が確認できた。これにより、製塩土器製作者あるいは製作集団が3人あるいは3グループ以上存在したと推定できる。製塩土器のほかには少数のピマイ黒色土器破片が出土している。またウシの肋骨と長骨、多数の貝殻も出土しており、これらは作業従事者の食料だろう。

C14測定値は1点のみである。1740 ± 185BCE (210 ± 185CE) であり、NTPP 遺跡の製塩活動は1～4世紀頃であったと推定できる。この年代は共伴した、コーラート南西部の土器であるピマイ黒色土器の年代とも齟齬がない。

NTPP 遺跡の遺構と製塩作業の関係は次のようであった。乾季になると、製塩作業が始まる。まず、塩が地表面に現れるような地を選び、鍬で畝状あるいは円錐形に土を盛る。土の表面積を大きくして、地中の水分の蒸発を早め、塩の結晶を早く生じさせるためである。作業地周囲の地表面に塩の結晶が形成されると、地表面の土を掻き採って集める。粘土壁をもつ水槽にはすでに水が溜められている。水槽の近所には、採鹹槽が設置され、この採鹹槽の外側には、浅いピットを設け、その内部には土器が置いてある。採鹹槽から土器に向かって竹パイプが伸びている。採鹹槽の底部には土がパイプを通して流れ落ちないように、籾殻や草などを敷いてフィルターとする。まず、集積した塩結晶のついた土を採鹹槽に入れる。水槽から水を汲んで採鹹槽に流し込む。すると土についた塩の結晶が水に溶け、塩水となって竹パイプを通して採鹹槽に流下する。このようにして得られた塩水は、塩分濃度をチェックした後、十分な塩分濃度であれば鹹水として煎熬にまわされる。鹹水は製塩土器に入れられ、炉で加熱、煎熬作業が始まる。最終的に製塩土器のなかに塩ができる。塩分濃度が不足している場合には再度採鹹を繰り返す。採鹹後、採鹹槽に残った土は採鹹場の後背地に捨てられる。その結果、製塩シーズン終了後には製塩作業場に隣接して大きな廃土の山ができる。その結果が、現在目にするようなマウンド状の製塩遺跡となる。

上記した製塩を行うには、必要条件がある。その条件とは、①塩の結晶が生じるフィールド（塩田）があること、②採鹹用の水が近くで容易に得られること、③製塩土器製作用の粘土が得られること、④鹹水煎熬のための大量の燃料が近くでとれること、である。これらのうちひとつでも要件を欠くと製塩はできない。東北タイのうち、これら諸条件を満たすのは、ムン川上流域、チー川流域とソクラーム川流域であった。ここでは塩の結晶が生じるフィールドがあり、井戸により水を得ることができ、土器製作用の粘土は水田底から採取でき、燃料となるフタバガキ科の森林があった。

これらの地域には現在でも製塩遺跡と考えられる小規模マウンドが多数点在しているが、すべて NTPP 遺跡と同様の製塩作業を行っていたはずである。

製塩遺跡がいずれもマウンドを形成している理由は、採鹹後に捨てられた廃土が堆積した結果である。また、廃土を平面的に捨てていくと、しだいに塩の結晶がついた土を採る塩田の面積が減少してくるから、同じ場所に廃土を積み上げることによって、塩田面積の減少を防止していると考えられる。翌シーズンには、前シーズンに使った製塩関連装置を修復して再使用するが、修復不可能の場合には、整地してその上に新しい装置を作って製塩を行う。この繰り返しの結果、同じ場所に高いマウンドが形成されたのである。

NTPP 遺跡の場合、製塩層は 9 層であった。製塩関連装置の耐用年数が 2～3 年と想定すれば、20～30 年程度のマウンドが形成されたことになる。井戸からの水をマウンド高所に運搬しづらくなったり、そのほかの不都合が生じるような高さになったら、放棄された。作られた塩はどのようにして運搬されたかについては、まったくわからないが、1995 年にウドンタニーからサコンナコンへ向かうときに見た光景が参考になる。それは、塩をバナナの葉で包み、それを竹で編んだ円筒形の籠の中に入れて、ひとつのパッケージとしたものである。ひとつのパッケージは直径 20cm、高さ 40cm くらいである。このような塩のパッケージが生産地から消費地へと運ばれたかもしれない。

ナコーン・ラーチャシーマー県の大型製塩マウンドであるノーン・パヤムエ遺跡では、製塩土器に混じって、クメール褐釉陶破片を収集したが、このことから少なくとも 13 世紀ころまでは、大きなマウンドを形成するような塩華製塩が行われていたと推定できる。

3. 東北タイの製鉄

東南アジアの鉱物資源については、1973 年の ECAFE

(Economic Commission for Asia and the Far East) によるメコン流域での鉱産資源調査報告書 (Workman 1973) の出版以降、国連が地下資源の探査を行い、国別にその調査結果を報告している。大陸部では、タイでは東北タイと中部タイの境界をなすプーウイアン山脈北部のルーイ県北部と中部タイ・ロブリー県、カンボジアではタイ国境に近い北部のプレアヴィハア州のほか、北部で鉄鉱石埋蔵地が確認されている。ラオスでは北東部のシェンクワン県に埋蔵地がある。またベトナムでは中部海岸地帯に小規模の埋蔵地が多数散在するほか、北部に規模の大きな鉄鉱石埋蔵地がある。これらの報告書では鉄資源としては鉄鉱石埋蔵地があげられているが、鉄鉱石のほかに、砂鉄および鉄ノジュール (iron nodule) がある (新田編 2006)。上記報告書は現代の経済開発の視点で作成されたものであるため、先史時代の鉄資源採取レベルとは異なっており、現実には相当規模の小さな鉄鉱石埋蔵地も利用されていた可能性はある。

新田が発掘及び現地踏査によって採集した鉄器と鉄滓の金属分析の結果によれば、ほとんどの例は鉄鉱石を原料とする鉄であるが、わずかに砂鉄を原料とする鉄もみられる (バーndonブロン遺跡で 1987 年に採集した炉内滓)。

また、東北タイ南部を東西に流れるムン川流域には、ラテライトに起源する鉄イオンが粘土粒に凝集して形成された、粘土粒をコアとして外周に酸化鉄の皮膜をもつ鉄ノジュールが散布しており、特異な鉄原料としてあげることができる。

バーndonブロン製鉄遺跡

紀元前の製鉄遺跡であるタイのバーndonブロン (Ban Don Phlong、以下 BDP) 遺跡の発掘調査により、製鉄の実態を見ていく (新田 1991, Nitta 1991, 1992)。BDP 遺跡はムン川中流域に位置する環濠と土塁で囲まれた、南北 1km、東西 850m の環濠遺跡である。マウンド西側斜面に大量の鉄滓と土器片等が堆積している。5×16m の発掘区内から、製鉄炉 17 基、製鉄に伴う鞆羽口や鉄滓、土器片などを廃棄したゴミ捨て穴 1 基、作業小屋と考えられる建築遺構 1 基、多数の柱穴と焼けた木柱などを検出した。

製鉄関係遺構が検出された文化層は 3 つある。最上層の第 1 文化層からは 8 基の製鉄炉を検出した。8 基の製鉄炉は A～F の 6 基と G、H の 2 基の 2 群で構成されている。炉 A は遺構上部を削平により破壊され、炉底部のみが残る。炉底に鉄滓が残る。炉 B 構築に伴う

粘土面を破壊して構築している。炉Bは平面楕円形の炉。炉壁は高熱のために溶融して硬化している。鞆羽口取り付け部は炉の東部にあり、幅2～3cm、長さ25cmの断面U字形をした送風管を据えたと推定される粘土の溝が見られた。炉内残留滓がある。炉Cは底部のみ残る。炉Dは炉Bにより破壊されている。炉東側に送風管痕跡がある。炉Eは上部を破壊された後に粘土で覆われる。炉東側に鞆羽口取り付け部と推定される幅6cmの硬化面がある。炉Fはほとんど破壊されている。炉Gは平面楕円形の炉。炉北側に鞆羽口取り付け部と推定される硬化面がある。西側には排滓口がある。炉Hは炉Gと似た構造をするが、炉Gにより破壊されている。第1文化層の製鉄炉はいずれも小さく、炉の廃棄後に清掃・整地を行って順次新しい炉を構築しており、焼土堆積も薄く、長期の使用はなかったらしい。

第2文化層からは7基の製鉄炉、ゴミ捨て穴1基、建築遺構を検出した。もっとも盛んに稼動していた時期である。炉S5は最も残りがよい。短径25cm、長径32cmの平面卵形を呈する。残存深さ25cm。炉壁は高熱のために硬化しており、送風管と鞆羽口の装着位置と反対側の炉西壁は特に著しく、ガラス化している。炉東側に鞆羽口取り付け部の粘土の台が残る。長さ23cmで、断面弧状、送風管直径は7cmと推定される。炉西側に排滓壙がある。炉の東側にはスサを含む粘土で構築された「コ」字状の囲壁が設置されており、作業者を火熱から守る装置であったかもしれない。この粘土壁を貫通して送風管が装着されていた。防護壁内部、つまり炉の周囲は粘土を貼って作業床を構築していた。炉の断面からは、少なくとも3回の炉壁の補修が行われていたので、反復使用していたことがわかる。炉S6は羽口取り付け部、炉壁、炉底の一部を残して破壊されている。炉S8AおよびBは炉S5のすぐ北側にある。2基の炉が重複する。炉S8Bは破壊されて一部のみ残る。炉S8Aは50×20cmの不整楕円形平面、深さ25cmの炉、28×30cm深さ30cmの排滓壙、および挿入された状態で残る鞆羽口で構成されている。炉底には大きな鉄滓が残る。羽口は45度の角度で炉内に挿入されており、先端部は高熱のためにガラス化している。炉の断面観察によれば1度の補修が認められ、反復使用していた。炉S9Aは炉S9Bを破壊する。直径25cm、深さ22cmの円形に近い炉だけからなり、排滓壙はない。羽口取り付け部は北東側にある。炉内残留滓と崩落した炉壁が内部より検出。炉S15は炉S5により破壊。炉と排滓壙からなる。炉の周囲には粘土を張って作業面とする。補修痕があり、反復使用された。炉のほかに、ゴミ捨て穴がある。直径

95cmの円形で底部に向かって広がる断面袋状堅穴である。内部には大量の鉄滓、羽口破片10点以上と、土器片がわずかに入っていた。清掃、整地後のゴミを一挙に処理したものであろう。

最下層の第3文化層からは製鉄炉2基を検出した。炉S3は大部分破壊されている。直径40cmほどの円形炉である。炉S16は直径25cm、深さ15cmの円筒形炉。排滓壙をもつ。炉及び排滓壙内には残留滓があった。羽口取り付け部は幅10cm、長さ20cm、深さ6cmの溝状に粘土で整形される。炉壁と炉底部は丁寧に粘土が貼られており、高熱により硬化している。炉壁の補修は見られない。

以上の結果、BDP遺跡の炉は小形の円筒形のシャフト炉であり、地上構造物として煙突状の粘土構造物と粘土を貼った地下構造物とからなる炉であった。炉には、(1)円筒形炉本体と羽口取り付け部からなるもの、(2)円筒形炉本体と羽口取り付け部、排滓壙とからなるもの、の2種類がある。両者は時期的に並存するので時期差によるものではない。鞆については全く分からないが、東南アジアに普遍的にみられる丸太を繰り抜いたピストン鞆を縦に2基置いて、1本の送風管と結び、その先に土製羽口を装着した送風装置であったであろう。

第2文化層採取の8点の木炭サンプルのC14年代測定値は前3世紀後半～前1世紀中頃であり、BDP遺跡の製鉄工房は前3～前2世紀を中心として稼動していた。

炉内残留滓の分析結果からは、鉄鉱石を原料としたことが推定されている。また、炉内残留滓のなかに、直径数ミリの粒状鉱物が未溶融状態で固着したものがある。この粒状物をCTスキャンした結果、粘土粒をコアに、その外周に酸化鉄が凝集したものであることがわかった。このような粒状物を鉄ノジュール(iron nodule)と呼ぶが、ラテライトに起因する鉄イオンが粘土粒に凝集して形成されたものであり、ムン川流域には広く存在する(新田2006)。鉄鉱石に加えて、この鉄ノジュールも鉄原料の可能性もある。燃料の木炭の出土は1987年の事前調査時に炉のそばから大量の木炭の集積が見られた(新田1988)。

以上のタイの製鉄遺跡の調査から次のようにまとめられる。ムン川流域では鉄ノジュールの可能性もあるが、鉄鉱石を一般的な原料とし、木炭を燃料とする製鉄が、小規模な円筒形シャフト炉による錬鉄生産が行われていた。小規模生産であるが、多数の炉を稼動させることによる量的確保も同時に行われていた。このような製鉄方法は遅くとも前3世紀には確立されており、その後長

く東南アジアの伝統的な製鉄として持続する。

4. 文献史料から見た東南アジアの製塩・製鉄の盛衰

南宋代に記述された『諸蕃志』と元代に記述された『島夷誌略』は13世紀から14世紀という時代の変わり目に、東南アジアで生産されていた塩と鉄に関して、どのような変動が起きたかを知ることができる貴重な史料である。ともに中国人貿易商人用に出版された東南アジア・インド方面の貿易ガイドブックである。各地の産出品と輸入品のリストが記載されており、当時の貿易品がどのようなものであったかを知ることができる。両者の記述には塩と鉄に関して大きな違いがある。『諸蕃志』では東南アジアで製塩を行っていたのは、記載された15ヶ国のうち交趾と閩婆の2ヶ国であるのに対し、『島夷誌略』では東南アジア57ヶ国のうち、37ヶ国、東南アジア大陸部の多くの地域で海水を煮て塩を作る製塩が行われていた。13世紀前半～14世紀中頃の時期に東南アジアの製塩事情に大きな変動が生じていたことを示す史料である。塩と同時に鉄も同様の変化が生じている。『島夷誌略』には素材としての鉄の輸入がほとんどの国で行われている。鉄鍋の普及が製塩を容易にさせ、海岸に接する東南アジアの広い地域で製塩が広範囲で行われるようになったと推定できる（新田2006）。この

ことが東北タイの塩華製塩の低下をもたらし、以後、東北タイにおいて、大規模な塩華製塩は行われなくなったと考えられる。ノーン・パヤムエ遺跡採集のクメール陶はその最後の時代を示すものであろう。

『諸蕃志』は、南宋の皇族の一族に遠く連なる人物である趙汝适が泉州の提挙市舶であったときに海外諸国の事情を収集して記述したものである。本書が記述されたのは南宋・理宗のとき、寶慶元年9月（1225年）である。本書は上下2巻からなるが、上巻は「志国」として東南アジア、インドさらにはアラビア、アフリカ方面の地理・風俗・産物を、下巻は「志物」としてこれらの地域の特産品解説記事である。

『島夷誌略』は元末の汪大淵による南海諸国のことを記した書物である。元代になると海外貿易はますます活発化し、泉州は最盛期を迎えて栄え、その他にも広州、温州、杭州、寧波、上海なども貿易港として繁栄し、市舶司が置かれていた。海外情報はますます入ってくるようになった。本書の序によれば、汪大淵は少なくとも2度海外に出かけて、その見聞をもとに本書を記述したようである。本書は台湾、東南アジア、インド、アラビア、アフリカ方面の諸国についての記事がある。

『諸蕃志』が国内にいながらの海外情報収集書であるならば、『島夷誌略』は著者自身の旅行体験に基づいた

表1 『諸蕃志』所載の東南アジア各国の地産品と輸入品

国名	地産品	輸入品
交趾	冗香、蓬萊香、金、銀、朱砂、珠貝、犀、象、翠羽、車渠、塩、漆、木綿、吉貝	記載なし
占城	象牙、箋香、冗香、速香、黄蠟、烏楠木、白藤、吉貝、花布、絲綾布、白氎筆、孔雀、犀角、紅鸚鵡	腦香、麝香、檀香、草蓆、涼傘、絹扇、漆器、鉛、錫、酒、糖
賓隆龍	記載なし	記載なし
真臘	象牙、暫速細香、粗熟香、黄蠟、翠毛、篤榔腦、篤榔瓢、香油、姜皮、金顔香、蘇木、生糸、綿布、	金、銀、甕器、仮錦、涼傘、皮鼓、酒、糖、醃醃（ケイカイ、塩辛）
登流眉	白荳蔻、箋香、冗香、速香、黄蠟、紫鈿	記載なし
蒲甘	記載なし	記載なし
三佛齊	瑇瑁、腦子、冗香、速香、暫香、粗熟香、降真香、丁香、檀香、荳蔻、（真珠、乳香、薔薇水、梔子花、臘臍臍、没薬、蘆薈、阿魏木香、蘇合油、象牙、珊瑚樹、猫兒睛、琥珀、番布、番劍）（カッコ内は大食より渡来品）	金、銀、甕器、錦、綾、纈絹、糖、鉄、酒、米、乾苺薑、大黃、樟腦
單馬令	黄蠟、降真香、速香、烏楠木、腦子、象牙、犀角	絹傘、雨傘、荷池の纈絹、酒、米、塩、糖、甕器、盆鉢、麤重（ソジュウ。あらもの）、金銀盤
凌牙斯	象牙、犀角、速暫香、生香、腦子	酒、米、荷池の纈絹、甕器
佛羅安	速暫香、檀香、象牙、	金、銀、甕器、鉄、漆器、酒、米、糖、麦
新拖	胡椒、東瓜、甘薯、匏豆、茄菜	記載なし
監篋	白錫、象牙、真珠	記載なし
藍無里	蘇木、象牙、白藤	記載なし
閩婆	象牙、資格、真珠、龍腦、瑇瑁、檀香、茴香、丁香、荳蔻、畢澄茄、降真香、花筆、番劍、胡椒、檳榔、硫黄、紅花、蘇木、白鸚鵡、吉貝、綾布、稻、麻、粟、豆、海水を煮沸して作った塩、魚、カメ、鶏、鴨、山羊、大瓜、椰子、バナナ、甘蔗、芋	雜金銀、金銀製の器や皿、五色の纈絹、皂綾、川芎、白芷、硃砂、緑礬、白礬、鵬砂、砒霜、漆器、鉄鼎、青磁、白磁
蘇吉丹	胡椒、米、波羅蜜、荔支、バナナ、甘蔗	記載なし
大閩婆	青塩、綿、羊、鸚鵡、檀香、丁香、荳蔻、花筆、番布、鉄劍、器械	記載なし
麻羅（大閩婆の属国）	降真香、黄蠟、細香、瑇瑁	記載なし

表2 『島夷誌略』所載の東南アジア各国の地産品、製塩と輸入品

国名	地産品	製塩	輸入品
麻逸	木綿、黄蠟、玳瑁、文郎、花布	海水煮沸塩	鼎、鉄塊、五采紅布、紅絹、牙錠
交趾	沙金、白銀、銅、錫、鉛、象牙、翠毛、肉桂、檳榔	海水煮沸塩	諸色の綾羅布、青布、牙梳、紙札、青銅、鉄
占城	紅柴、茄藍木、打布	海水煮沸塩	青磁、花碗、金銀首飾、酒卮、布、焼珠
民多朗	鳥梨木、麝檀木、棉花、牛や鹿の皮革		漆器、銅鼎、闍婆布、紅絹、青布、斗錫酒
賓隆龍	茄藍木、象牙		銀、印花布
真臘	黄蠟、犀角、孔雀、沈速香、蘇木、大風子、翠羽冠		銀、黄紅焼珠、龍緞、建寧、錦絲布
單馬令	上等の白錫、朱腦、龜筒、鶴頂降真香、黄熟香頭	海水煮沸塩	甘理布、青白花碗、鼓
日麗	龜筒、鶴頂、降真香、錫	海水煮沸塩	青磁、花布、粗碗、鉄塊、小印花
麻里嚕	玳瑁、黄蠟、降香、竹布、木綿花	海水煮沸塩	足錠、青布、磁器盤、處州磁、水壘、大甕、鉄鼎
遐來物	蘇木、玳瑁、木綿花、檳榔	海水煮沸塩	占城海南布、鉄線、銅鼎、紅絹、五色布、木梳篦子、青器、粗碗
彭坑	黄熟香、頭沈速打白香、腦子、花錫、粗降真香	海水煮沸塩	諸色絹、闍婆布、銅鉄器、漆器、磁器、鼓板
吉蘭丹	上等の沈香、速香、粗降真香、黄蠟、龜筒、鶴頂、檳榔、花錫	海水煮沸塩	塘頭市布、占城布、青盤、花碗、紅緑焼珠、琴阮鼓板
丁家廬	降真香、腦子、黄蠟、玳瑁		青磁、白磁、占城布、小紅絹、斗錫酒
戎	白荳蔻、象牙、翠毛、黄蠟、木綿紗		銅器、漆器、青白花碗、磁器の壺や瓶、花銀、紫焼珠、坐崙布
羅衛	粗降真香、玳瑁、黄蠟、綿花、	海水煮沸塩	菓子、手巾、狗跡絹、五色焼珠、花銀、青磁、白磁、鉄條
羅斛	沈香、蘇木、犀角、象牙、翠羽、黄蠟	海水煮沸塩	青器、花印布、金、錫、海南檳榔、子安貝
東冲古刺	砂金、黄蠟、粗降真香、龜筒、沈香	海水煮沸塩	花銀、塩、青磁や白磁の花碗、大小の水埕、青色の緞子、銅鼎
蘇洛隔	上等の降真香、片腦、鶴頂、沈香、速香、玳瑁	海水煮沸塩	青白花器、海坐崙布、銀、鉄、水埕、小罐、銅鼎
針路	芎蕉、子安貝	海水煮沸塩	銅條、鉄鼎、銅珠、五色焼珠、大小埕、花布、鼓、青布
八都馬	象牙、胡椒、		南北糸、花銀、赤金、銅鼎、鉄鼎、絲布草、金緞、丹山錦山、紅絹、白礬
淡邈	胡椒、	海水煮沸塩	黄硝珠、麒麟粒、西洋絲布、粗碗、青器、銅鼎
尖山	木綿花、竹花、黄蠟、粗降真香、眞沙	海水煮沸塩	牙錠、銅鼎、鉄鼎、青碗、大小埕、甕、青皮、單錦、鼓棹
八節那開	単皮、花印布、不退色木綿花、檳榔	海水煮沸塩	青器、紫鈇土粉、青絲、埕、甕、鉄器
三佛齊	梅花、片腦、中等の降真香、檳榔、木綿布、細花木、	海水煮沸塩	色絹、紅硝珠、絲布、花布、銅鍋、鉄鍋
嘯噴	蘇木、盈山		五色硝珠、磁器、銅鍋、鉄鍋、牙錠、瓦甕、粗碗
淳泥	降真香、黄蠟、玳瑁、梅花、片腦、	海水煮沸塩	白銀、赤金色緞子、牙箱、鉄器
朋家羅	記載なし	海水煮沸塩	記載なし
暹	蘇木、花錫、大楓子、象牙、翠羽		硝珠、水銀、銅、鉄
爪哇	青塩、胡椒、耐色印布半、鸚鵡、薬物（他国から）		硝珠、金、銀、青緞色絹、青磁や白磁の花碗、鉄器
重迦羅	綿、羊、鸚鵡、細花木綿、椰子木綿、花紗	海水煮沸塩	花銀、花宣絹、色々の色の布、
都督岸	片腦、粗速香、玳瑁、龜筒		海南占城布、紅緑絹、塩、鉄鼎、銅鼎、色緞
文誕	肉荳蔻、丁皮	海水煮沸塩	綾絲布、花印布、烏瓶、鼓、瑟、青磁
蘇祿	中等の降真香、黄蠟、玳瑁、珍しい珠	海水煮沸塩	赤金花銀、八都刺布、青珠、さまざまな器、鉄條
龍牙犀角	沈香、鶴頂、降真香、蜜、糖、黄熟香頭	海水煮沸塩	土地の布、八都刺布、青磁や白磁の花碗
蘇門仿	翠羽、蘇木、黄蠟、檳榔	海水煮沸塩	白糖、坐崙布、袖や絹の服、花色宣絹、塗油、大小水埕
舊港	黄熟香頭、金顔香、木綿花冠、黄蠟、粗降真香、とても高価な鶴頂、中等の沈速香	海水煮沸塩	門邦丸珠、四色焼珠、麒麟粒、さまざま磁器、銅鼎、五色布、大小水埕、甕
龍牙菩提	粗香、檳榔、椰子	海水煮沸塩	紅緑焼珠、牙箱、錠、鉄鼎、青白の地元産布
班卒	上等の鶴頂、中等の降真香、木綿花	海水煮沸塩	緑布、鉄條、地元産の印布、赤金、磁器、鉄鼎
蒲奔	記載なし	海水煮沸塩	青磁、粗碗、海南布、鉄線、大小埕、甕
假里馬打	番羊、紫玳瑁	海水煮沸塩 (塩1斤を米1斗と交換)	硫黄、珊瑚珠、闍婆布、青色焼珠、小花印布
文老古	丁香	海水煮沸塩	銀、鉄、水綾絲布、坐崙布、八節那潤布、地元産の印布、象齒焼珠、青磁、埕器
古里地悶	檀樹		銀、鉄、碗
龍牙門	粗降真香、斗錫		赤金、青緞、花布、さまざま磁器、鉄鼎
崑崙	記載なし		記載なし
靈山	籐（1本が1花斗錫と交換）		粗碗、焼珠、鉄條
東西竺	檳榔、荖葉、椰子単、木綿花、	海水煮沸塩	花錫、胡椒、鉄器、薔薇露水
花面	牛、羊、鶏、鴨、檳榔、甘蔗、荖葉、木綿		鉄條、青布、粗碗、さまざま青磁
淡洋	降真香		赤金、鉄器、粗碗
須文答刺	腦子、粗降真香、鶴頂、斗錫		西洋絲布、樟腦、薔薇水、黄油傘、青布、五色緞
勾欄山	熊・豹・鹿・麂の皮、玳瑁		穀米、米色絹、青布、銅器、青器
喃口巫哩	鶴頂、龜筒、玳瑁、降真香		金、銀、鉄器、薔薇水、紅絲、樟腦、青白花碗

書といえる。両書は13世紀前半の東南アジア貿易と、100年余り後の14世紀半ばの東南アジア貿易を知るうえで欠くことのできない情報源である。

これらの国々の特産品はそれぞれ中国商人の関心に従って列挙されているが、『諸蕃志』記載の特産品は表1のとおりである。特産品のリストを一瞥すると分かることは、挙げられた国々のほとんどに各種の香木があることである。また、塩についての記載は交趾と閩婆、大閩婆の3カ国についてしか見られないこと、特産品としての鉄についての記載が見られないことである。

東南アジア諸国が輸入している商品については磁器および各種の織物、貴金属（金銀）がみられるが、鉄は三佛齊が鉄を、佛羅安が鉄器を、閩婆が鉄鼎を輸入している。この3国はマレー半島及びインドネシア島嶼部であり、大陸部では輸入品目の中に鉄がないことに注意すべきである。

『島夷誌略』に現れた諸国のうち、東南アジア諸国は57国である。『諸蕃志』に比べて、東南アジア諸地方の情報ははるかに増えている。『島夷誌略』中の東南アジア諸国の地産品と輸入品リストは表2のとおりである。表2にあげた地産品目には『諸蕃志』と変わらず香木の類がほとんどの国にあがっており、しかも種類が豊富である。また輸入品目には金銀銅鉄の金属が増え、なかんずく鉄塊、鉄條、鉄線といった鉄素材と思われるもの、鉄鼎や鉄鍋などの鉄製容器が増える。また中国国内での磁器生産の進展を示すように、青磁・白磁を初めとする中国製磁器類が多くの国々に輸入されている。主要輸入品のうち、絹織物の類、金属特に鉄、中国製磁器の3品目が東南アジア諸国にとっての中国からの最重要輸入品であったことがわかる。同時におそらくインドからの輸入品と考えられる木綿布（花印布など）やガラス・ビーズ類も好んで輸入されていた。

さらに注目されるのは、『諸蕃志』にはほとんど登場しなかった塩が、多くの国々で生産されていることである。しかもそのほとんどが海水を煎熬して作られた塩である。14世紀には東南アジア諸国において海水煎熬塩の生産が広く行われるようになっていたことが背景にある。

13世紀前半の『諸蕃志』と14世紀中頃の『島夷誌略』は、南宋末から元に至る時期の中国と東南アジア諸国との貿易の事情を物語る。両書にあげられた地産品や輸入品は、中国人の関心と合致するものが選択されて記述されているかもしれないが、当時の東南アジア諸国の生産品（中国人側からみての商品価値あるもの）と輸入品の実態を窺うことはできる。地産品については大きな違い

はなく、漢代以来一貫して東南アジアの主要輸出品であり続けた森林産物と奢侈品である。森林産物とは、赤色染料の原料である蘇木と多種類の香木、それにナツメグとコショウを主としたスパイス、象牙、翡翠の羽毛、真珠、ベッコウ原料の玳瑁などである。一方輸入品としては、中国からの輸入品である絹織物と磁器は共通するが、『島夷誌略』になると各種の金属（金、銀、銅、鉄）が増える。金と銀は商業取引決済手段としてのものであろうが、銅と鉄は金属器製作のための素材としての金属である。

『島夷誌略』の記載で最も注意すべきなのが、鉄と塩である。輸入品があげられた49カ国のうち30カ国に鉄・鉄器の記載がある。鉄素材と考えられるもの（鉄、鉄塊、鉄線、鉄條）と、鉄製鍋類（鉄鼎、鉄鍋）、その他の鉄製品（鉄器）の3種類がある。何らかの鉄製道具類と考えられる「鉄器」と記されたものを除くと、前二者はいずれも鉄素材としての用途が想定できる。中国では宋代におきたエネルギー革命により鉄生産が急増し、大量の鉄が輸出商品として東南アジアに輸出された。鉄鍋や鉄鼎の形で輸出されたものもかなりの量に上ったことはすでに宮崎市定氏により指摘されている（宮崎1957, p.46）。東南アジアへの出入港として繁栄していた広東においては、大量の鉄鍋が生産され、東南アジアに輸出されていた。これらの鉄鍋は本来の用途を離れ、輸入先では溶解して別の鉄製品を作るための鉄素材としての用途を持っていたことも指摘されている。鑄鉄製品の場合には東南アジア産錬鉄と混ぜて鋼を作る素材とされた。『島夷誌略』にあがっている鉄及び鉄製品は、このような事情を反映している。東南アジア諸国が大量生産による良質安価な中国鉄を大量に輸入するようになっていた。鉄生産量と品質において東南アジア鉄が中国鉄に劣っていたか、あるいは東南アジア鉄の安定的供給が難しかったことが要因であろう。中国鉄の輸入は13世紀末までには始まっていた。元の使節団の一員として、1296～97年にかけて真臘を訪れた僧侶・周達観は、『真臘風土記』のなかで、真臘の中国からの輸入品目を記している。そのなかに鉄鍋と針をあげていることはその証拠となる（鑄鉄製品と鋼鉄製品）。

鉄と並んで重要な現象は製塩の活発化である。海水煮沸製塩を行っている国は32カ国に及んでおり、海岸を持つ国はほとんどすべての国で製塩が行われていたことを示している。『諸蕃志』には製塩についてほとんど触れられていないこととときわめて対照的である。中国では周知のように塩の専売制が歴代の王朝の政策であった。塩専売制によって国家が独占した利益が重要な国家

財源となっていた。したがって、中国人の塩への関心は相当に高かったと推定できる。にもかかわらず、『諸蕃志』には塩についての記載はわずかに交趾、閩婆、大閩婆の3カ国に過ぎない。『諸蕃志』が「東洋」についての記載がほとんどなく、「西洋」に限られることと合わせ考えると、13世紀前半の東南アジア大陸部において、中国人の注意を引くほどの規模での製塩は行われていなかったことを示している。

塩が東南アジアでも米に対して高価であったことは、クメール時代の記録でも(新田1989)、また『島夷誌略』中の假里馬打(ボルネオ島、カリマンタン)の記事において、「塩1斤=米1斗」の交換比率であることからも明らかである。また、11世紀前半のスールヤヴァルマン1世治下(1002-1050生)のアンコール帝国では塩は課税品であり、塩の監督官かつ塩税の徴税役人であるkamsten trvac ampyalがいた。ここでは、塩2に対し米3の交換比率、つまり塩は米の1.5倍の価値があった(Sachchidanand 1970; 新田1989)。海岸線が長く、どこでも製塩が可能に見える東南アジアであるが、商品生産としての製塩はどこでも行われていたわけではなく、製塩を行うには、塩水、煎熬のための燃料あるいは自然乾燥できるほどの乾燥気候、煎熬容器(製塩土器、塩釜など)が必要であった。その結果、生産地は限定され、ある程度高価な商品として交換の対象となっていたことが推定できる。

ではなぜ14世紀中ごろの東南アジア各地で製塩が行われるようになっていたのだろうか。それは宋～元にかけて中国から輸入が急増した安価良質な鉄に原因があった。中国輸入鉄を原料として生産された製鉄塩釜の普及が、海水があり、燃料の薪があるところであればどこでも製塩を可能にしたのである。中国輸入鉄を原料とする鉄鍋とともに、大量に輸入された中国製鉄鍋も製塩の煎熬作業を革命的に容易にした。近年、そのことを証明する中国製鉄鍋を積載した11～16世紀のジャンク5隻がフィリピン近海の海底から発見されている。パラワン島の北、レナ・ショール島(Lena Shoal)の沈没船からは、鉄インゴットの上にさまざまな大きさの鉄鍋が10個ごとに重ねられていた。これらの鉄鍋は薄い作りで、丸底をしたものである(Goddio 2002)。またパラワン島の南、サバに近いパンダナン島近くの海底で発見されたジャンクの積荷の中にも、60個を超える中国製鉄鍋があった(Loviny 1996)。これらのジャンクの積み荷に示されるように、ジャンク1隻に50～100個とすれば、大量の中国製鉄鍋が広東や福建から東南アジアへ輸出されたに違いない。ジャンクの積み荷にあった鉄鍋の形は現在

の中華鍋とよく似た円形・丸底であり、中国元代や明代の製塩の煎熬に使われた平底の大型煎熬鍋とは大きさも、形も違うが、大規模製塩でなければ、中華鍋形の鉄鍋で十分であったであろう⁽¹⁾。

製鉄と製塩が遅くとも前3世紀に始まり、クメール時代まで盛んに稼動していた東北タイ、とりわけムン川中上流域とチー川中下流域は考古学上きわめて重要な地域であるが、同時に歴史時代になっても政治的、経済的に重要な地帯であった。ムン川流域を主たる支配領域としたコーラートのマヒンダラプラ家(Mahindrapura)は11世紀にはアンコール中央政権の王を出すほどの勢力を持った(Coedès 1948; Snellgrove 2004)。この経済的背景のひとつに東北タイの塩鉄の可能性がある。

クメール時代の全盛期が終わるころ、つまり13～14世紀にかかるころ、中国で大量生産された安価良質な鉄・鉄製品の東南アジアへの大量輸入があった。この輸入中国鉄は東北タイや中部タイあるいは未発見の製鉄遺跡で生産されていた東南アジア在来鉄を駆逐した。その結果、東南アジアには広く中国鉄が普及することになった。輸入鉄はさまざまな鉄製品に加工されたが、製塩用鉄釜は従来製塩が行われていなかった地方にまで普及した。その結果、燃料と塩水があるかぎり、容易に製塩が可能になった。そのことが、東北タイに代表される内陸部の在来製塩の市場を壊滅させることになった。東北タイの経済的優位性を保つ要因であった在来の塩鉄生産はこのようにして衰退していった。その時期はまさに『諸蕃志』から『島夷誌略』への時代であった。

後世にも塩が沿岸地方各地で生産され、重要な交易品として東南アジアで広く流通していたことはさまざまな記録がある。バーキルは1436年にパハンの海岸地域で塩が海水から作られていたという記録があること、およびマレー半島東岸で海水煮沸塩が生産されていたことを述べている。

トメ・ピレスは16世紀初めにスマトラのアルカット王国(Arcat)の海岸で乾燥させた塩蔵魚を商船が積んでいることを記録している。それ以降も、大陸部のペゲー、シャムからスマトラやジャワの港あるいはムラカへ向けて塩が輸出されていたし、インドネシア島嶼部では塩の生産と交易が広範囲に行われていた。シムルンガン・バタック(Simelungan Batak)では塩を入手するために、危険な遠征を行うのがチーフの伝統的義務となっていた(Burnes 1993)。塩は貴重で高価な商品であった。

まとめ

東北タイでは、その生態学的環境をうまく利用し、適応した独特の製塩と製鉄が前5世紀ころには始まっていた。塩はその後にも長期にわたって重要な商品として、あるいは課税品として政治的、経済的に大きな意味をもつものであった。またラテライト由来の原料を使った製鉄も重要な経済基盤であった。14世紀ころから中国からの輸入鉄や輸入鉄鍋が急増した結果、海水があり、燃料があるところでは簡単に製塩を行えるようになった。在来鉄も中国からの輸入鉄との競争に敗れた。その結果、東北タイを支えた塩鉄は歴史的意義を失うこととなった。

注

1. 元代の製塩については、『熬波図』が、明代の製塩については『天工開物』が参考になる。前者については、吉田寅 1983『元代製塩技術資料『熬波図』の研究』汲古書院を、後者については、藪内清訳注 1969『天工開物』平凡社東洋文庫を参照。

参考文献

- 新田栄治 1988 タイ東北地方における考古学調査。「東南アジア - 歴史と文化 - 」17, 158.
- 新田栄治 1989 東北タイ古代内陸部製塩の史的意義に関する予察—考古学・歴史学・民族誌の接点から—。渡辺仁先生古希記念論文集編集委員会編『考古学と民族誌』173-195, 六興出版, 東京.
- 新田栄治 1991 東南アジア考古学から見た先史産業と環境。「文明と環境」No.3, 25-27.
- 新田栄治 1994 東南アジア文明の興亡と環境変動。安田善憲・川西宏幸編『文明と環境』第1巻(古代文明と環境), 149-163. 思文閣出版, 京都.
- 新田栄治 1995 東北タイに残る伝統的内陸部製塩のエスノアーケオロジー。「東南アジア考古学」No.15, 84-94.
- 新田栄治 1996 『タイの製鉄・製塩に関する民俗考古学的研究』鹿児島大学教養部考古学研究室, 鹿児島.
- 新田栄治 2006 南海貿易史料にみる南宋—元の東南アジアと塩鉄。小野正敏編『前近代の東アジア海域における唐物と南蛮物の交易とその意義』73-82, 国立歴史民俗博物館, 佐倉.
- 新田栄治 2009 タイの製塩 - コーラート高原の製塩の考古学とエスノアーケオロジー - .「東南アジア考古学会研究報告」7, 27-37.
- 新田栄治編 2006 『メコン流域における金属資源とその利用に関する考古学的研究』(科研報告書) 鹿児島大学法文学部.
- 宮崎市定 1957 シナの鉄について。「史林」40-46.
- Burnes, Robert H. 1993 Salt Production in East Flores Regency, Nusa Tenggara Timur, Indonesia. In Le Roux, Pierre et Jacques Ivanoff eds. 1993 *Le Sel de La Vie en Asie du Sud-Est*. 185-199. Prince of Songkla University.
- Coedès, Georges 1948 *Les états hindouisés d'Indochine et d'Indonesie*. Paris.
- Goddio, Franck 2002 Iron artifacts. In Danièle Naveau 2002 *Lost at Sea - The strange route of the Lena Shoal junk-*. 235-236, Periplus, London.
- Francis, Peter Jr. 2002 *Asia's Maritime Beads Trade*. University of Hawaii Press, Honolulu.
- Higham, Charles F.W. 1977 *The Prehistory of the Southern Khorat Plateau, with special reference to Roi Et Province*. *Modern Quaternary Research in Southeast Asia*, 3, 103-141.
- Higham, Charles F.W. and R.H.Parker 1971 *Prehistoric Research in Northeast of Thailand, 1969-1970 : a preliminary report*. (Typescript)
- Jimreivat, Pattiya 1993 *Production et Utilisation du Sel en Issan*. In Le Roux, Pierre et Jacques Ivanoff eds. 1993 *Le Sel de La Vie en Asie du Sud-Est*. 105-113, Prince of Songkla University.
- Lertrit, Sawang 1993 *Salt Farming in Southern Thailand*. In Le Roux, Pierre et Jacques Ivanoff eds. 1993 *Le Sel de La Vie en Asie du Sud-Est*. 139-145. Prince of Songkla University.
- Le Roux, Pierre et Jacques Ivanoff eds. 1993 *Le Sel de La Vie en Asie du Sud-Est*. Prince of Songkla University.
- Liere, W. J. van 1982 *Salt and Settlement in Northeast Thailand*. *Muang Boran Journal*, 8-2, 112-116.
- Loviny, Christophe 1996 *The Pearl Road - Tales of Treasure Ships-*. Asiatype, Makati.
- Martin, Marie-Alexandrine 1993 *La "riziere de sel" du Cambodge*. In Le Roux, Pierre et Jacques Ivanoff eds. 1993 *Le Sel de La Vie en Asie du Sud-Est*. 53-68. Prince of Songkla University.
- Nitta, Eiji 1991 *Archaeological Study on the Ancient Iron-smelting and Salt-making Industries in the Northeast of Thailand*.「東南アジア考古学会会報」11, 1-46.
- Nitta, Eiji 1992 *Ancient Industries, Ecosystem and Environment*.「鹿児島大学史学科報告」No.39, 61-80.
- Nitta, Eiji 1993 *Ancient Industries, Ecosystem and the Environment with special reference to the Northeast of Thailand*. The Siam Society ed. *Symposium on Environment and Culture with Emphasis on Urban Issues*, 149-164, The Siam Society, Bangkok.
- Nitta, Eiji 1995a *Prehistoric Industries and the Mekhong Civilization*.「鹿児島大学史学科報告」No.42, 1-17.
- Nitta, Eiji 1995b *Prehistoric Industries and the Mekhong Civilization*. Thanet Aphornsuvan ed. *Thailand and her Neighbors (II) : Laos, Vietnam and Cambodia-Civilization of the Indochina Peninsula, Maritime Trade in the South China Sea, Political and Economic Change in the Indochina States-*. Thammasat University Press, Bangkok.
- Nitta, Eiji 1997 *Iron-smelting and Salt-making Industries in Vietnam, Thailand and Laos*.「鹿児島大学史学科報告」No.43, 1-19.
- Nitta, Eiji 1999 *Iron and Salt in Isan*. Fukui Hayao ed. *The Dry Areas in Southeast Asia : Harsh or Benign Environment?*. 75-94, The Center for Southeast Asian Studies Kyoto University, Kyoto.
- Sachchindanand, Sahai 1970 *Les Institutions Politiques et l' Organization Administrative du Cambodge Ancien (VI - XIII siècles)*. PEFEO T.LXXV. EFEO, Paris.
- Snellgrove, David 2004 *Angkor before and after - A Cultural History of the Khmers-*. Orchid Press, Bangkok.
- Vallibhotama, Srisakra 1981 *Archaeologic Study of the Lower Mun - Chi Basin*. Interim Committee for Coordination of Investigation of the Lower Mekong Basin, Bangkok.
- Vallibhotama, Srisakra 1982 *Archaeologic Study of the Nam*

Songkhram Basin. Interim Committee for Coordination of Investigation of the Lower Mekong Basin, Bangkok.

Workman, D.R. 1973 Mineral Resources of the Lower Mekong Basin and Adjacent Areas of Khmer Republic, Laos, Thailand and Republic of Viet-Nam. Mineral Resources Development series No.39. United Nations. Bangkok.

ベトナム中部出土の漢系遺物に関する考察： チャーキュウ遺跡の調査成果を中心に

山形 真理子*

1. はじめに

ベトナム中部にはチャンパの遺跡が数多く残されている。最もよく知られているのは「ミーソン聖域」という名称で世界遺産に登録されているクアンナム省ミーソン遺跡である。現在も約 70 棟ものヒンドゥー寺院建築が残り、それらは 8 世紀から 14 世紀にかけて建立されたとみられる。ただし寺院の創建はさらに古い。ミーソン寺院で最も古いサンスクリット碑文は、バードラヴァルマンというインド的な名前を持つ王がこの地でシヴァ神に捧げる寺院を建立したことを記し、その碑文の年代は専門家によって 4 世紀後半あるいは 5 世紀に比定されている。このようにミーソンがチャンパの宗教的なセンターと目される一方、政治的なセンターすなわちチャンパ王都に比定されてきたのがチャーキュウ遺跡である（図 1）。ミーソンから北東に直線距離で約 14km の位置にある。地上の建築物は失われてしまったが、王都を

取り囲んだ城壁（土塁）が残っている。チャーキュウとミーソンはいずれもトゥーボン川の流域に位置している。トゥーボン川の河口から 5km ほどさかのぼったところにはホイアンがある。ホイアンもまた世界遺産に登録されており、その美しい町並みが観光客を惹きつけている。

ベトナムの考古学者チャン・クオック・ヴォン教授は、チャンパは河川流域ごとに成長した複数の川筋権力からなる連合体であると考えた（Trần, Q.V. 1995; 山形・桃木 2001）。聖地（ミーソン）・王都（チャーキュウ）・港市（ホイアン）という三つの重要な地点を擁するトゥーボン水系は、チャンパを構成した地域政体の中でも重要な位置を占めた。考古学的見地からは、トゥーボン水系に初期の政体が出現する前の時代も注目される。河口近くから内陸山間部まで、鉄器時代サーフィン文化の遺跡が川沿いに集中している（図 1）（Yamagata 2006）。サーフィン文化は前 400 年ころから後 100 年く

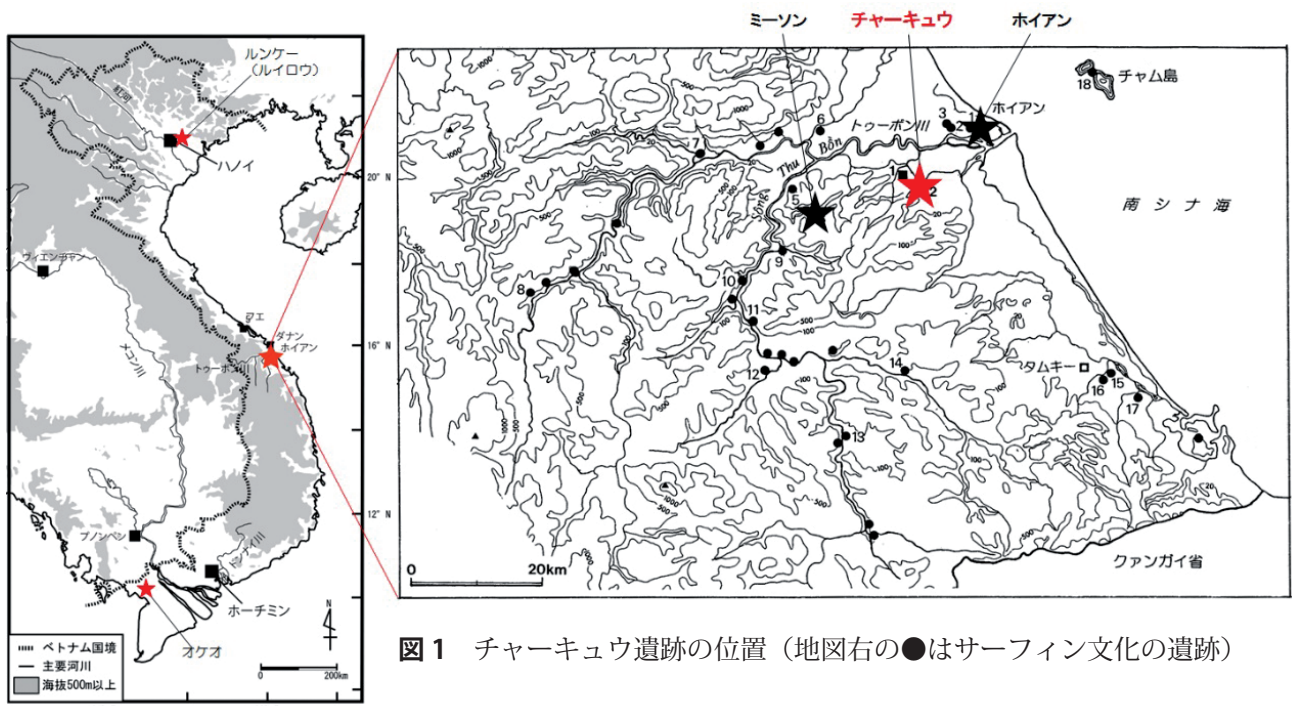


図 1 チャーキュウ遺跡の位置（地図右の●はサーフィン文化の遺跡）

* 岡山理科大学経営学部経営学科

らいまで続いた鉄器時代文化であり、甕棺墓とその内部・外部から出土する副葬遺物を特徴とする。筆者の研究によれば、サーフィン文化衰退の直後といえる後2世紀に、チャーキュウの地に初めて人が住み始めた。彼らの物質文化はサーフィン文化の要素をほとんど残さない一方、明らかに中国の影響を示す(Yamagata 2007, 2011)。ミーソン寺院の開創に象徴的に示されるような「インド化」が始まる前の時代、後2～3世紀のトゥーボン川水系には中国の文物や観念が入り込み、それらは在地化された姿で考古遺物として残された。

中国史書の記録によれば後192年ころ、後漢の南端にあたる日南郡象林県で叛乱が起こり、その結果として「林邑」が独立した(『晋書』『水経注』)。一般に、林邑はチャンパと同一の政体と理解される。チャンパの中国名称は8世紀中ごろから「環王」、9世紀中ごろから「占城」へと変化している。林邑の王都に比定されるチャーキュウ遺跡では1920年代に行われたフランス極東学院による調査を嚆矢として、1990年から現在まで、ベトナムと外国の考古学者によって断続的に発掘調査が実施されてきた。それによって都城の出現と形成の過程が明らかになりつつある(Claeys 1931; Nguyễn, C. et al. 1991; Nguyen, K. D. et al. 2006; Yamagata ed. 2014; Lâm, T.M.D. 2017; Yamagata 2017)。

本稿ではチャーキュウ遺跡の発掘調査成果を踏まえて、チャーキュウを含むベトナム中部の遺跡から出土する漢系(中国系)遺物について論じる。そして考古学的な証拠に立脚しながら、鉄器時代から初期の地域政体が出現する時代にかけて、南下してきた中国と在地社会とのかわりについて若干の考察を行いたい。それと関連して、近年行われたチャーキュウ遺跡東城壁の発掘調査について紹介する(山形 2014; 山形他 2017; Yamagata 2017)。

2. ベトナム中部まで南下した漢系遺物

図2の年表はベトナムを大きく北部・中部・南部に分け、それぞれの地域で何世紀にどのような漢系遺物が出土しているか、現時点での知見をまとめたものである。幾つかの重要な歴史的イベントや画期を含む略年表も付している。ベトナム中部における漢系遺物について、おおまかに三つの段階に分けて以下に解説する。

2-1. サーフィン文化の漢系遺物：前1世紀～後1世紀

ベトナム中部の鉄器時代・サーフィン文化の甕棺の中から前漢鏡、銅銭(王莽銭、五銖銭)、環頭刀子(鉄器)が出土する。これらがベトナム中部まで南下した漢系遺物として最も古い種類である。鏡はトゥーボン川流域の甕棺墓から出土しており(Yamagata et al. 2001)、内陸

	歴史的イベント・画期	ベトナム北部	ベトナム中部	ベトナム南部
前三世紀 3rd century	late 3rd century - 南越による支配	Dong Sonドンソン文化 戦国式銅剣 Co Loaコーロア城	Sa Huynhサーフィン文化	
前二世紀 2nd century BC	111BC- 南越滅亡、前漢郡県設置	Co Loa 瓦、青銅鏡、漢系土器・陶器 Viet Kheヴィエトケ木棺墓、Dong Sonドンソン遺跡、Thieu Duong ティウズオン遺跡、Lang Vacランヴァク遺跡 漢系(南越系)青銅容器、前漢鏡、青銅戈、銅帶鉤、鉄長剣、半面鏡、etc.	Go Ma Voiゴーマーヴォイ遺跡、Thach Bich タックビック遺跡 Beadsビーズ	Giong Ca Voソンカーヴォ、Hang Gonハンゴン巨石墓 ビーズ
前一世紀 1st century BC		Dong Son, Thieu Duong 漢系青銅容器、前漢鏡、漢系土器・陶器、玉璧、印章、etc.	Binh Yen遺跡、Go Duaゴーズア遺跡、Hau Xa/ハウサー遺跡、An Bangアンバン遺跡、Lai Nghiライギ遺跡 前漢鏡、五銖銭、環頭刀子、ビーズ	Phu Chanhフーチャイン、Giong Ca Vo, Hang Gon 前漢鏡、ビーズ
後一世紀 1st century AD	AD 40-43 徵姉妹の蜂起 後漢馬援将軍遠征	Ngoc Lacゴックラク漢墓、初期の漢系磚室墓 印紋陶、王莽銭、漢系青銅容器、前漢鏡、etc. ↓ ドンソン文化の衰退	Binh Yen, Go Dua, Hau Xa, An Bang, Lai Nghi 前漢鏡、五銖銭、環頭刀子、ビーズ ↓ サーフィン文化の衰退	Phu Chanh, Giong Ca Vo, Giong Lonソロン Oc Eoオケオ遺跡 Phase I
後二世紀 2nd century AD	166 大秦国遣使 184 黄巾の乱 ca.184 士變交趾郡太守となる ca.192 林邑の独立(水経注、晋書)	Luy Lauレイロウ(Lung Kheルンケー)遺跡、漢系磚室墓、Tam Thoタムト案址 瓦(布目有・布目無)、漢系土器・陶器(含印紋陶)、磚、漢系青銅容器、後漢鏡、etc.	Tra Kieuチャーキュウ遺跡、Go Cam ゴーカム遺跡、Lai Nghi Indian rouletted wareインド系回転紋土器 布目瓦、封泥、漢系土器・陶器(含印紋陶)、青銅容器、石硯、青銅鏡、青銅鐙、耳当 Hoa Diemホアジエム遺跡甕棺墓 五銖銭	Oc Eo Phase I 後漢鏡、ビーズ
後三世紀 3rd century AD	220 後漢滅亡 222-280 三国呉 229 孫権による建業(南京)遷都 呉の使節、扶南訪問 265-316 西晋	Luy Lau (Lung Khe)、漢系磚室墓、Tam Tho 瓦(布目有・布目無)、漢系土器・陶器(含印紋陶)、磚、漢系青銅容器、Kendésクンディ	Tra Kieu, Co Luyコーレイ、Thanh Hoタインホー、Thanh Chaタインチャー遺跡 人面紋瓦当、瓦(布目無)、印紋陶、クンディ チャーキュウ城壁建設	Oc Eo Phase I
後四世紀 4th century	336-349 林邑王范文の治世 380-413 林邑王范胡達の治世 317-420 東晋	Luy Lau (Lung Khe)、漢系磚室墓、Tam Tho	チャーキュウ城壁建設 人面紋瓦当、瓦(布目無)、印紋陶、クンディ パードラヴァルマン王がミーソンに寺院建立	

図2 ベトナムにおける漢系遺物の出現に関する年表

(表中の赤字は漢系遺物、青字はインド系遺物(本来の起源をインドにたどることができる遺物)、緑字は林邑に関連する事項を示す。ベトナム南部のオケオ遺跡の年代観は Manguin 2004 による)

のビンイェン遺跡から日光鏡、ゴーズア遺跡から獣帯鏡、下流のホイアン近郊に位置するライギ遺跡から日光鏡を含む数個体分の破片が確認されている。いずれも製作年代が前1世紀とされる小型鏡であり、前1世紀から後1世紀にかけて漢との接触が始まったことがうかがえる。『漢書』地理志に記述されたように、この時代には中国南部とインド南部東海岸を結ぶ南海交易の航路がすでに確立しており（藤田1943; 桜井2001）、サーフィン文化を担った人々も交易に関わりながら外部世界と交渉したことであろう。甕棺墓に入れられたメノウ・カーネリアン・ガラスなどのビーズの中には、西方インドからマレー半島を経てベトナム中部にもたらされたものも含まれる（Lam, T.M.D. 2011）。

2-2. チャーキュウ遺跡ホアンチャウ地点最下層・下層とゴーカム遺跡の漢系遺物：後2世紀

後100年ころまでにサーフィン文化は終焉を迎え、甕棺墓がみられなくなる。その直後、おそらく後2世紀のいずれかの時期あるいは後1世紀末にさかのぼる時期に、チャーキュウと、チャーキュウから南東に約4kmの位置にあるゴーカム遺跡の地に、あらたに定着した人々がいた。チャーキュウ遺跡ホアンチャウ地点の最下層と下層からは中国式の本瓦葺の瓦が出土し、ゴーカムでも同種の瓦を葺いた焼失木造建築の遺構が出現した。それらがベトナム中部では最古の瓦である（山形2012）。ゴーカムで検出されたのは13m×7.5mという規模の焼失した建物であり、炭化した柱痕や並べられた床板などが確認された（Nguyễn, K. D. 2005; Nguyen, K.D. et al. 2006; Glover et al. 2011）。ベトナム中部で最古の瓦は丸瓦・平瓦ともに凹面に布目圧痕を残し、凸面は叩き板を利用した縄縞もしくは方角紋・刻線紋である。つまり「模骨法」を用いて製作された瓦である。平瓦には模骨すなわち桶型を形作っていた短冊状の側板、それらを縛り付けていた紐の痕跡も明瞭に残っている。瓦当の存在は確認されていない（Yamagata and Nguyen K.D. 2010; 山形2012）。

同じ種類の瓦はホイアンとダナン市の間に位置するヴォンディンクエバック遺跡でも確認されている（Lâm, T.M.D. 2017）。一方、現在までのところクアンナム省より南の各省では発見されていない。中国式本瓦葺の屋根をもつ木造建築は、まずはクアンナム省のトゥーボン川流域に出現したと考えられ、この地域の重要性が浮かび上がる。

ゴーカム遺跡では瓦のほかにも多様な漢系遺物が出土しており、印紋陶、耳當、青銅製鐺、断面三角形青銅鏃、そして最も注目すべき遺物として封泥がある（図3）

（Yamagata 2001; 山形・桃木2001）。封泥の印面は「黄神使者章」と解釈され、ゴーカムの地に道教の神を知る人がいたことを示唆する。五銖銭の圧痕を文様としてつけられた土器破片もあった。

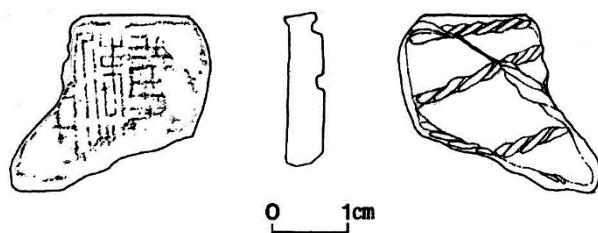


図3 ゴーカム遺跡出土封泥

おそらくこのゴーカムと時期的に平行すると思われるのが、多くの甕棺墓を出したライギ遺跡の中で37号墓から出土した漢の青銅容器群である（Reinecke 2009; Lâm, T.M.D. 2017）。三足釜、鍋、盆、碗、鏝壺が含まれる。37号墓は甕棺墓ではなく、土壙墓に青銅容器がまとまって副葬されていた。なおライギからは石黛硯と磨石（「磨」という漢字が線刻されている）がセットで出土しており、青銅帯鉤もあるので、漢人あるいは漢の地方官僚となった地元有力者の墓があった可能性がある。

これらの漢系遺物は後1世紀末から2世紀にかけて、漢人の南下に伴ってトゥーボン川流域に出現したものと考えられる。チャーキュウやゴーカムの地に建てられた瓦葺木造建築は、在地のサーフィン文化に由来するものでは決してなく、明らかに漢人もしくは漢の文化を身につけた人々がなんらかの目的のために北からこの地に渡来・移住し、建てたものである。想像であるが、彼らの目的は在地の人々を支配する、あるいはトゥーボン川の河川交通によって運ばれた物産を管理する、といったことではなかっただろうか（Yamagata 2007, 2011）。

中国史書によると後2世紀には、後漢の南境で何度か大規模な叛乱が起きていた（後藤1975）。そしてついに192年ころ、日南郡象林県の功曹の息子が率いた叛乱の結果として林邑が独立したと記録される。日南郡や象林県の位置と範囲については様々な意見があるが、トゥーボン川流域に北から南下した人々が入り込み、瓦葺木造建築を建てることによって拠点を築いたことは確かであろう。彼らの流入と定着が後1世紀から2世紀の在地社会に急激な変化を引き起こしたことは、考古学的に把握される物質文化のギャップに表されている。その変化は考古学的に、サーフィン文化の消滅と、その後にチャーキュウやゴーカムに現れた瓦葺木造建築や、多様な漢系遺物の存在に示されている。

2-3. チャーキュウ遺跡ホアンチャウ地点上層の漢系遺物：

後3世紀

チャーキュウ遺跡ホアンチャウ地点上層の遺物群は、最下層・下層から出土する遺物群とは様相を異にする。筆者は後者の遺物群にもとづいてチャーキュウI段階(Tra Kieu Phase I)、前者の遺物群にもとづいてチャーキュウII段階(Tra Kieu Phase II)という時期区分を行っている。チャーキュウではII段階になると瓦が大量に出土するようになり、それらの凹面は無紋で、布目圧痕を持たない。凸面には集合条線が引かれる。つまり、模骨法ではなく「粘土紐巻き上げ法」によって製作された瓦であり、凹面に調整痕と思われる凹凸がみられる場合もある。そして、II段階には人面紋瓦当が伴う(図4)(山形2012)。

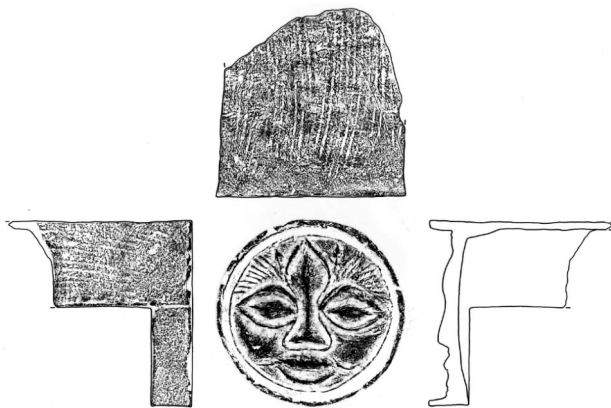


図4 チャーキュウ遺跡ホアンチャウ地点出土人面紋瓦当(瓦当直径15.0cm)

すでに指摘した通り、チャーキュウの人面紋は中国江蘇省南京市や湖北省鄂州市から出土する瓦当の人面紋と酷似する。中国の研究者によって南京から出土する六朝瓦の分析と考察が進み、それによると人面紋瓦当はおおむね三国呉において出現したものと理解される(賀2003, 2005, 2013; 王・馬2007; 王2015)。呉の瓦であるならば後3世紀の瓦とみなすことができ、チャーキュウの人面紋瓦当についても同様の年代を考えている。

チャーキュウII段階の瓦と共伴する漢系遺物として、印紋陶がある。チャーキュウI段階に属するホアンチャウ地点最下層・下層と、ゴーカム遺跡からも印紋をもつ土器が出ているが、それらと比べると器形や紋様施紋が明らかに異なる。チャーキュウI段階の印紋は雷紋が多く、しかも無紋の口縁が外反する器形をもつ。おそらく平底ではなかったであろう。一方、II段階の印紋陶は器形・紋様ともに、ベトナム北部の漢墓に副葬される印紋陶と同型式としてよい(宮本・俵2002)(図5)。ただし、チャーキュウの印紋陶のほうが新しい特徴を持つ。たとえば、最大径が胴部上半にあり、底部に向けてすぼまる

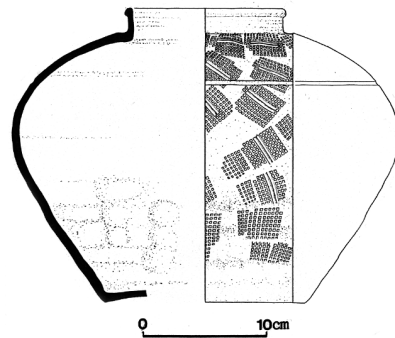


図5 チャーキュウ遺跡ブウチャウ丘東北麓出土印紋陶

器形となること、方角紋などの叩き紋様がまばらになること、などである。

一方、インド起源とされるクンディ(注口付瓶)がこの時期からチャーキュウに出現する。クンディはメコンデルタを中心に広がるオケオ文化の遺跡からしばしば出土する。オケオ文化は一般に、初期国家「扶南」の考古文化と考えられている(Malleret 1959-1963; 山本1966; 岡崎1973; Lê, X.D. et al. 1995)。チャーキュウにおけるクンディの出現は、南からの影響によるものと考えられる。

布目圧痕を持たない瓦、人面紋瓦当、印紋陶そしてクンディという遺物の組み合わせは、トゥーボン流域という範囲には限定されず、ベトナム中部の複数の地域で確認されている。すなわちクアンガイ省チャークック川流域コールイ遺跡、ビンディン省コン川流域タインチャー遺跡、フーエン省ダーラン川流域タインチャー遺跡である(山形2005; Lâm, T.M.D. 2017)。いずれも城壁を伴う都城であり、これらは3世紀に各河川の流域に成長した地域政体の中心としての役割を果たしたであろう。そして同種遺物の共有が示すように、それらは相互に結びついていた。

人面紋瓦当について言えば、都城だけではなく寺院遺跡からも発見されており、ミーソン遺跡からも出土している。現在までのところ最も南で確認されている人面紋瓦当は、カインホア省ニャチャン市にあるチャンパの寺院遺跡ポーナガールにて、フランス植民地時代に撮影された出土遺物の写真に写っているものである(Parmentier 1918, pp.241のFig.45)。

中国史書の記述によれば、2世紀末に区連が自立して王となったあと、3世紀に何代かの林邑王が立ったはずであるが名前は明らかではない。3世紀の林邑は248年に呉の交州と戦い、一方で226年から231年の間に呉に遣使し(『三国志』呉書)、268年と280年には西晋に朝貢している(『晋書』)。文献史料からは林邑が中国の複雑な形勢に対応して、軍事的侵攻と外交を行っていたことがうかがわれる。

3. チャーキュウにおける城壁の発掘調査

3-1. 城壁発掘の目的

チャーキュウ遺跡はトゥーボン川の一支流の南岸に広がっており、東西が長く南北が狭い長方形、厳密に言えばやや台形を呈するプランをもち、その範囲が城壁で囲まれている（図6）。東城壁と南城壁がよく残っており、現状で東城壁が長さ約330m、基底部の幅約33m、周囲の水田面からの比高差約2m、南城壁が長さ約1400m、基底部の幅約33m、周囲の水田面からの比高差約3mである。

筆者はこの東城壁において、2013年2月22日～3月10日、同じく8月7日～8月21日の二次にわたって発掘調査を実施した。発掘地点は東城壁の北端部である（図6）。発掘の目的は、王都を取り囲んだ城壁の建設年代と構築方法を明らかにすることであった（山形2014; 山形他2017）。

漢系遺物の問題と関連づけて前章までに述べてきたように、チャーキュウにおいて後3世紀までの遺構と遺物については具体的に論じられる資料が得られている。しかし4世紀以降の考古学的様相が明らかにされたとは言えない。ミーソンに残された碑文を含め、古いサンスクリット碑文の年代が4世紀後半から5世紀にさかのぼるならば、4世紀は林邑の「インド化」が始まる重要な時代ということになる。そのため4世紀以降の遺構と遺

物を把握することを、城壁の発掘に期待したという目的もあった。

チャーキュウ城壁に関しては、その建設に言及しているとみられる中国史料がある。『晋書』林邑伝によれば、4世紀の林邑王范文（在位336もしくは337～349年）が王位を篡奪する前、「宮室、城邑及器械」を作ること林邑王范逸に教えたという一文がある。北魏の地理書『水経注』にも同じような内容の記事があり、もともと日南郡西捲県で范椎という有力者の奴隷であった范文が313年から316年ころに南の林邑に到り、范逸に「制造城池、繕治戎甲、経始郭略」を教え、王に気に入られた（駒井1941）。

文献史料の記述が史実の一端を伝えているとするならば、林邑王范逸の時代に王都の城壁が築かれた。林邑王都が通説の通りチャーキュウ遺跡であるならば、チャーキュウの城壁は4世紀、しかもその前半に建設されたことになる。

3-2. 出土した遺構と遺物

発掘調査によって、東城壁の中心を縦走する二列のレンガ壁が検出された。このうち東側つまり城内からみて外側の壁をレンガ壁I、西側つまり内側の壁をレンガ壁IIと呼んでいる。レンガ壁I・IIともに現地表面を40～50cm掘り下げるとその上面に達した。レンガ壁上面の幅が160～170cm、二つのレンガ壁の間の幅が



図6 チャーキュウ遺跡の衛星画像（© Digital Globe, Inc. All Rights Reserved）

星印は調査地点：1. ブウチャウ丘東北麓（1990,1993 発掘）2. ブウチャウ丘東麓（1996 試掘）3. ホアンチャウ（1997-2000 発掘）4. ゴーゾーゼー（1996 試掘）5. 南城壁（1990, 2003 発掘）6. 東城壁（2013 発掘）7. 仏極東学院 A, B 地点（1927-28 年発掘）

測定番号	サンプルの内容(注記番号)	Libby Age (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
IAAA-123983	A4グリッド瓦集中地点出土炭化木材(13TDTKH1A4)	1,730±20	256calAD - 299calAD (36.5%) 318calAD - 349calAD (25.6%) 369calAD - 378calAD (6.1%)	250calAD - 385calAD (95.4%)
IAAA-130343	A4グリッド瓦集中地点出土炭化木材(13TDTKH1A4)	1,690±20	342calAD - 392calAD (68.2%)	260calAD - 280calAD (7.2%) 325calAD - 412calAD (88.2%)
IAAA-132077	A8グリッドサブトレンチ出土炭化物(13TDTK(2)H1A8)	1,950±20	26calAD - 75calAD (68.2%)	3calAD - 87calAD (91.9%) 105calAD - 120calAD (3.5%)
IAAA-132078	A10グリッド瓦・礫集中地点出土炭化物(13TDTK(2)H1A10)	1,760±20	248calAD - 260calAD (14.4%) 280calAD - 326calAD (53.8%)	230calAD - 346calAD (95.4%)
IAAA-132079	A13グリッド出土焼成粘土塊(壁体破片)付着炭化物(13TDTK(2)TS5A13L8)	1,620±20	400calAD - 430calAD (42.4%) 493calAD - 511calAD (16.4%) 518calAD - 529calAD (9.4%)	391calAD - 475calAD (58.7%) 485calAD - 535calAD (36.7%)
IAAA-143172	F7グリッド瓦・土器破片集中地点出土炭化物(13TDTK(2)TS2F7)	1,760±20	243calAD - 260calAD (18.5%) 280calAD - 325calAD (49.7%)	217calAD - 351calAD (94.5%) 369calAD - 378calAD (0.9%)

OxCal v4.2.4 Bronk Ramsey (2013); r5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)

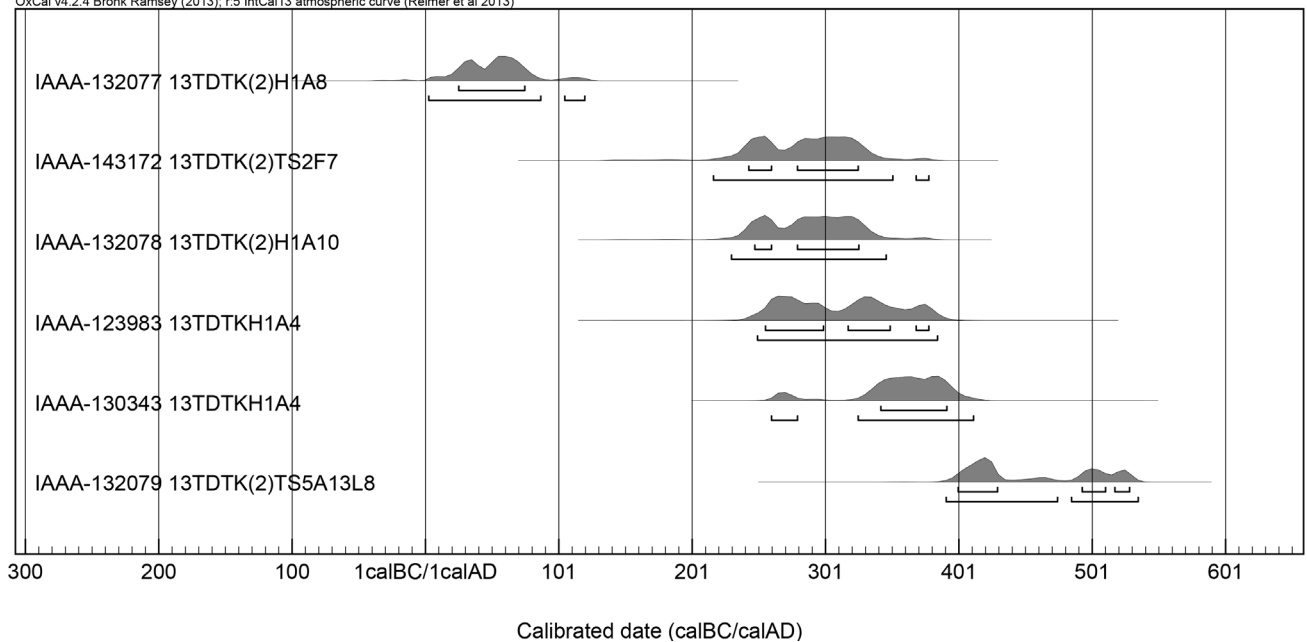


図7 チャーキュウ遺跡東城壁の放射性炭素年代とそのマルチプロット図 (株加速器分析研究所測定)

200～210cm、レンガ壁の間は粘土を積み上げた盛土層である。レンガ壁Ⅰ・Ⅱと中央の盛土層を一体のものとすると全体の幅が約550cmとなる。これは現存する城壁の「芯」と言うべき構造であり、おそらく最初に構築された城壁の遺構であるが、レンガ壁の外表面が当時どの程度露出していたのか判断しかねている。レンガ壁の高さは残りのよい箇所では195cmを測り、そこではレンガが19段積まれているのが観察された。城壁の上面と基底面はともに北に向かって徐々に下がっている。その先には小川が東流しており、この小川が城内と城外を結ぶ通路の役割を果たしたかもしれない。レンガ壁の上面にはレンガが切り取られて小石が集中する遺構が数ヶ所あり、柱礎の痕跡とみられる。レンガ壁の上に建造物が存在した可能性が高い。

上述の「芯」構造の両側に堆積する層序の多くは、城壁の裾に向かって緩やかに傾斜していた。大小のレンガ破片が集中する層、大量の瓦破片と石が混じる層などもあり、人為的に造成されたものである。この造成は最初に築かれた城壁を増築（補強あるいは拡張）する目的で行われたと考えられる。

出土遺物はレンガ、瓦、建築装飾、土器、壁体に由来すると思われる焼成粘土塊などである。このうちレンガはレンガ壁Ⅰ・Ⅱに積み重ねられていたものと、壁の両側に堆積する層から出土するものに分けられる。原形を保つレンガは多くはないが、典型的なサイズを挙げるとすれば37×18×9cmである。瓦は破片総数9123点が出土し、総重量は305.2kgであった。そのほとんどは城壁建設あるいは増築に伴って故意に盛土に混ぜられたものと解釈される。瓦の種類はホアンチャウ地点上層から出土する瓦と同じであり、中国式本瓦葺の屋根に葺かれていた軒丸瓦・丸瓦・平瓦である。瓦当紋様は人面紋のみが確認されている。城内で出土した瓦と比べると玉縁の作り方が簡略化されている点など、城壁出土瓦のほうが新しい特徴を示すことが注目される。土器の種類も城内とほぼ同じであり、漢系印紋陶とクンディも出土している。印紋陶の中には器壁が非常に薄いものがあり、これも新しい特徴と見なされる。

3-3. 城壁の構築とその年代

城内出土遺物との比較によれば、瓦と印紋陶には比較的新しい特徴があると認められたものの、詳しい分析には至っていない。そこで、東城壁のサンプルから得られた放射性炭素年代6件の較正年代を考え合わせると（図7）、城壁の建設は後3世紀後半から4世紀にかけての時間幅の中で始められたと考えるのが妥当である。

上記の年代のなかで、後1世紀を中心とする古い年

代を出したサンプル（IAAA-132077）は、二列のレンガ壁の間のサブトレンチから採取された炭化物であり、盛り土に入り込んだものであるため城壁の構築年代とは関わりないと解釈している。さらに、後4世紀末から6世紀前半という年代を出したサンプル（IAAA-1320079）は城壁裾部に近いグリッドから出土した焼成粘土塊に付着していた竹由来と思われる炭化物であり、城壁の増築（補強あるいは拡張工事）の年代を示すものと解釈できる。

構築方法に関して、中国式の版築が行われていないことは明らかである。2つのレンガ壁とその間の盛土層は最初に建設された城壁の遺構である。城壁裾部で出土した焼成粘土塊に付着していた炭化物が4世紀末から6世紀前半という年代を示したことに示唆されるように、4世紀末以降に城壁の増築（補強あるいは拡張工事）が行われた可能性が高い。発掘区のセクションの解釈は難しいが、少なくとも一度の増築工事が実施されたと考えている。

4. ベトナム北部との関係

本稿はベトナム中部に焦点をしばっているが、中国との関係についていえば北部の遺跡と遺物が重要であることは言うまでもない。

ベトナム中部のサーフィン文化と並行する時代、ベトナム北部では銅鼓を中心とする青銅器群を特徴とするドンソン文化が栄えていた。ドンソン文化の遺跡からは、標式遺跡であるタインホア省ドンソン遺跡から出土した戦国式銅剣（桃氏剣）のように、前3世紀にさかのぼる中国系の遺物が認められている。ただし、副葬された墓の年代よりも遺物の年代が古い可能性がある（表2014）。前203年に現在の広州で自立した趙佗が建てた南越国は、前2世紀にはすでにベトナム北部に影響を及ぼしていたことが明らかにされている（吉開1998, 1999, 2000）。南越によって攻められて落城したとされるハノイ北郊のコーロア城は、三重の土塁と濠に囲まれた大規模な城郭である。この遺跡からはベトナムで最も古い瓦と漢系の陶器が出土し、青銅鋸を铸造した遺構も検出されている（ファン2010）。筆者はコーロアの瓦を広州の南越宮署遺跡の瓦と比較し、コーロアでは南越の瓦を模して前2世紀から瓦の製作が開始されたと考えている（山形2012）。前111年、南越が前漢の遠征軍に敗れて滅亡し、旧南越の地は漢の郡県支配に取り込まれた。ベトナム北部の紅河流域には交趾郡、ドンソン遺跡が含まれるタインホア省地域には九真郡、さらに南に日南郡が設置された。日南郡の南端がどこまで伸びていた

か意見が分かれているが、いずれにせよベトナム中部に広がっていたサーフィン文化の担い手たちが日南郡と直接隣り合うことになった（あるいは、一部は漢の支配に取り込まれた）可能性がある。

サーフィン文化とドンソン文化が接触を持ったことは明らかであるが、物質文化としてはお互いかなり異質であった。しかし両文化はともに、後100年ころまでには衰退したとみられる。在地文化の衰退には、ベトナム北部を席卷した趙姉妹の叛乱（起義）と、後漢の將軍馬援による鎮圧という事件が影響したであろう。交趾郡や九真郡では後1世紀後半には磚室墓が築かれるようになり、土器、陶器、陶製明器、青銅器（銅鏡、容器、印章、銅銭など）が副葬された（Janse1947,1951; 宮本・俵 2002; 俵 2014）。チャーキュウ遺跡などから出土する印紋陶については、タインホア省で調査されている漢墓から出土する陶器との比較研究が必要となる。

3世紀について、チャーキュウの人面紋瓦当を呉の瓦当紋様と結びつけて考えているが、人面紋瓦当はベトナム北部からも出土している。交趾郡の郡治と目されるバックニン省ルイロウ遺跡（レンケー遺跡）と（Trình C. T. et al. 1986; 西村 2011）、九真郡の窯であったタインホア省タムト窯址（Janse1947,1951）である。とくにルイロウ城の人面紋瓦当については2世紀後半にさかのぼるという説があり（西村 2011; Dǎng H.S. et al. 2016）、よって人面紋瓦当の最古例はルイロウにあり、北部ベトナムから南京やチャーキュウへ伝播したという方向性が想定されている。レンケーでは近年、日本の東亜大学とベトナム歴史博物館、さらにはベトナム国家大学による発掘調査が進行しており（黄 2014; Dǎng H.S. et al. 2016）、人面紋瓦当の出土層位や共伴関係などの考古学情報に裏打ちされた議論が深まることが期待される。

5. まとめ

ベトナム中部における漢系遺物は、サーフィン文化の甕棺墓に副葬された前漢鏡や環頭刀子、銅銭を始まりとする。これらは在地社会が漢の南下にともなって漢文化と接触したことによって入手したか、あるいは南海交易を通してもたらされたものと理解される。後2世紀もしくはさらに古く1世紀末には、トゥーボン川流域に中国式の瓦を葺いた木造建築が出現した。その建築に伴って、印紋陶や封泥を含む多様な漢系遺物が遺跡に残されたのである。瓦葺建物の出現は北から渡来あるいは移住した人々の存在を意味し、それは在地社会を大きく変容させる要因となったであろう。中国史書が伝える林邑の独立を経て、3世紀以降、呉と同じモチーフを採用した

人面紋瓦当が林邑の複数の都城で建物の屋根を飾った。それらは宮殿や寺院などの特別な建物であった。ベトナム中部の複数の川筋に地域的な権力が成長し、それらのセンターが互いに結びつく形で林邑を構成したと考えられる。なお、チャーキュウ遺跡出土瓦と土器の胎土分析によると、それらが遺跡近辺の粘土を利用して生産された可能性が高い（Beveridge 2014; 山形他 2017）。さらに、チャーキュウ、タインホー、タインチャーの出土瓦については、製作手法や紋様の面から、各遺跡それぞれの独自性が看取される。漢系遺物が早くから土着化していた点は重要であると考えられ、今後はその土着化の過程と実態の解明に取り組む必要がある。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、以下の皆様からご協力とご教示を賜った。ここに記して感謝申し上げます（順不同、敬称略）。

Ian C. Glover, Nguyễn Kim Dung, Bùi Chí Hoàng, Lâm Thị Mỹ Dung, Trần Kỳ Phương, Nguyễn Khánh Trung Kiên, Đặng Ngọc Kính, Nguyễn Hoàng Bách Linh, Nguyễn Thị Tuyết, Nguyễn Hữu Mạnh, 深見純生, 俵寛司, 徳澤啓一

付記

本研究は科学研究費補助金基盤研究(B)（課題番号23401031, 17H02413）ならびに平成24年度三菱財団人文科学研究助成による成果の一部である。

本稿では、引用参考文献を除き、ベトナム語独特の符号を省略している。

図の出典

図1～図5 筆者作図、図6 衛星画像（© Digital Globe, Inc. All Rights Reserved）を筆者改変、図7 表は筆者作成、マルチプロット図は(株)加速器分析研究所作成

引用参考文献

（日本語）

岡崎敬 1973 「南海を通ずる初期の東西交渉—タイマイを通じて見た古代南海交易—」『東西交渉の考古学』平凡社：354-384.

黄曉芬（編）2014 『交趾郡治・ルイロウ遺跡Ⅰ』科学研究費補助金研究成果報告書

後藤均平 1975 『ベトナム救国抗争史』新人物往来社

駒井義明 1941 『南部アジア上代史論』彙文堂書店

桜井由躬雄 2001 「南海交易ネットワークの成立」山本達郎・桜井由躬雄編『岩波講座東南アジア史1 原史東南アジア世界』:113-146.

俵寛司 2014 『脱植民地主義のベトナム考古学 「ベトナムモデル」 「中国モデル」を超えて』風響社

藤田豊八 1943 「前漢に於ける西南海上交通の記録」『東西交渉史の研究』荻原星文館：95-135.

西村昌也 2011 『ベトナムの考古・古代学』同成社

- ファン・ミン・フエン著、西野範子・西村昌也編訳 2010 「ハノイ郊外コーロア城における鋳造炉遺構」今村啓爾編『南海を巡る考古学』同成社：53-75.
- 宮本一夫・俵寛司 2002 「ベトナム漢墓ヤンセ資料の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』97:123-92.
- 山形真理子 2005 「林邑の都城」『東南アジアの都市と都城』東南アジア考古学会研究報告第3号：33-52.
- 山形真理子 2012 「南境の漢・六朝系瓦ーベトナム北部・中部における瓦の出現と展開ー」『古代』第129・130合併号：241-270.
- 山形真理子 2014 「ベトナム中部・チャーキュウ遺跡の城壁に関する基礎的所見」『新田栄治先生退職記念東南アジア考古学論集』：57 - 66.
- 山形真理子・桃木至朗 2001 「林邑と環王」山本達郎・桜井由躬雄編『岩波講座東南アジア史1 原史東南アジア世界』：227-254.
- 山形真理子、Nguyễn Khánh Trung Kiên、鐘ヶ江賢二、深山絵実梨、鈴木朋美、俵寛司 2017 「ベトナム中部・チャーキュウ遺跡の発掘調査成果ー林邑都城における城壁の構築方法と年代に関する考察ー」日本考古学協会第83回総会研究発表、2017年5月28日、於大正大学
- 山本達郎 1966 「古代の南海交通と扶南の文化」『古代史講座』第13巻、学生社：124-144.
- 吉開将人 1998, 1999, 2000 「印からみた南越世界ー嶺南古璽印考ー（前・中・後篇）」『東洋文化研究所紀要』136（前篇）：89-135, 137（中篇）：1-45, 139（後篇）：1-38.
(中国語)
- 賀雲翱 2003 「南京出土的六朝人面紋與獸面紋瓦当」『文物』2003(7)：37-44.
- 賀雲翱 2005 『六朝瓦当與六朝都城』文物出版社、北京
- 賀雲翱 2013 『六朝文化：考古與發現』三聯書店、北京
- 王志高・馬濤 2007 「論南京大行宮出土的孫吳雲紋瓦当和人面紋瓦当」『文物』2007(1)：78-93.
- 王志高 2015 『六朝健康城發掘與研究』江蘇人民出版社、南京
(ベトナム語、英語、仏語)
- Beveridge (Prior), Ruth. 2014 The analysis and identification of the ceramic fabric groups of Tra Kieu. In Yamagata, M. (ed) 2014 *The Ancient Citadel of Tra Kieu in Central Vietnam: The Site and the Pottery*. Kanazawa Cultural Resource Studies 14. Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University: 111-141.
- Claeys, Jean-Yves. 1931. Simhapura. *Revue des Arts Asiatiques* 2(7): 93-104.
- Đặng Hồng Sơn, Nguyễn Văn Anh, Nguyễn Minh Hùng 2016 Đầu Ngói ống mặt người Luy Lâu (Việt Nam) (Human face-shaped tile ends at Luy Lau site, Vietnam). *Khảo Cổ Học (Archaeology)* 2016(6): 49-70.
- Glover, Ian, C. and Nguyễn Kim Dung. 2011. Excavations at Gò Cẩm, Quảng Nam, 2000-3: Linyi and the emergence of the Cham Kingdoms. In Trần Kỳ Phương and Lockhart, B.M. (eds) *The Cham of Vietnam: History, Society and Art*, 54-80. Singapore: National University of Singapore Press.
- Janse, O.R.T. 1947, 1951 *Archaeological Research in Indo-China*, vols. I & II. Harvard University Press, Cambridge.
- Nguyen Kim Dung, Glover, I.C. and Yamagata, M. 2006 Excavations at Tra Kieu and Go Cam, Quang Nam Province, Central Viet Nam. Bacus, E., Glover, I. and Piggott, V. (eds) *Uncovering Southeast Asia's Past*. National University of Singapore Press, Singapore: 216-231.
- Lam Thi My Dzung 2011 Central Vietnam during the Period from 500 BCE to CE 500. In Manguin, P.-Y., Mani, A. and Wade, G. (eds.) *Early Interactions between South and Southeast Asia*. Institute of Southeast Asian Studies, Singapore, and Manohar, India: 3-15.
- Lâm Thị Mỹ Dung 2017 *Sa Huỳnh – Lâm Ấp – Champa, thế kỷ trước Công nguyên đến thế kỷ sau Công nguyên* (Sa Huynh – Linyi – Champa, The 5th century BC to AD the 5th century). Nhà Xuất Bản Thế Giới, Hà Nội.
- Lê Xuân Diễm, Đào Linh Côn, Võ Sĩ Khải 1995 *Văn Hóa Óc Eo – những khám phá mới* (Oc Eo Culture – Recent Discoveries). Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội, Hà Nội
- Malleret, Louis. 1959-1963. *L'archéologie du Delta du Mékong*. (7 vols.) Paris: École Française d'Extrême-Orient.
- Manguin, Pierre-Yves 2004 The archaeology of early maritime polities of Southeast Asia. In Glover, I.C. and Bellwood, P. (eds.) *Southeast Asia: from prehistory to history*. Routledge Curzon, London and New York: 282-213.
- Nguyễn Chiêu, Lâm Mỹ Dung, Vũ Thị Ninh 1991 Đồ gốm trong cuộc khai quật di chỉ Cham cổ ở Trà Kiệu năm 1990 (Ceramics in the excavation of ancient Cham site in Tra Kieu in 1990). *Khảo Cổ Học (Archaeology)* 1990(4): 19-29.
- Nguyễn, Kim Dung 2005. Di chỉ Gò Cẩm và con đường tiếp biến văn hoá sau Sa Huỳnh khu vực Trà Kiệu [Go Cam site and post-Sa Huynh acculturation at Tra Kieu area]. *Khảo Cổ Học [Archaeology]* 2005(6): 17-50.
- Parmentier, H. 1918 *Inventaire descriptif des monuments cam de l'Annam*, Tomes II. Ernest Leroux, Paris.
- Reinecke, A. 2009 Early Cultures (first millennium B.C. to second century A.D.) In Tingley, N. (ed.) *Arts of Ancient Viet Nam, From River Plain to Open Sea*, Asia Society and The Museum of Fine Arts, Houston. Yale University Press, New Haven and London: 23-53.
- Trình Cao Tường, Tống Trung Tín, Lê Đình Phụng 1989 Luy Lâu – mua khai quật năm 1986 (Luy Lau - Results of excavation made in 1986). *Khảo Cổ Học (Archaeology)* 1989(4): 74-86.
- Trần Quốc Vượng 1995 Miền Trung Việt Nam và văn hóa Champa (Central Vietnam and Champa culture). *Nghiên Cứu Đông Nam Á (Southeast Asian Studies)* 1995(4): 8-24.
- Yamagata, M. 2001 Phong nề của di tích Gò Cẩm (Fengni of the Go Cam site). *Những phát hiện mới về khảo cổ học năm 2000* (New discoveries of archaeology in 2000): 414-416.
- Yamagata, M. 2006 Inland Sa Huynh Culture along the Thu Bon River Valley in central Vietnam. In Bacus, E.A., Glover, I.C. and Piggott, V.C. (eds) *Uncovering Southeast Asia's Past*, National University of Singapore Press, Singapore: 168-183.
- Yamagata, M. 2007 The early history of Lin-i viewed from archeology. *ACTA ASIATICA* 92: 1-30.
- Yamagata, M. 2011 Trà Kiệu during the second and third centuries CE: the formation of Linyi from archaeological perspective. In Trần Kỳ Phương and B. M. Lockhart (eds.) *The Cham of Vietnam: History, Society and Art*. National University of Singapore Press, Singapore: 81-101.
- Yamagata, M. (ed) 2014 *The Ancient Citadel of Tra Kieu in Central Vietnam: The Site and the Pottery*. Kanazawa Cultural Resource Studies 14. Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University.

- Yamagata, M. 2017 Construction of Linyi Citadels: The Rise of Early Polity in Vietnam. In Karashima Noboru and Hirose Masashi (eds.) *State Formation and Social Integration in Pre-modern South and Southeast Asia: A Comparative Study of Asian Society*. Toyo Bunko Research Library 16. The Toyo Bunko, Tokyo: 27-54.
- Yamagata, M., Pham Duc Manh and Bui Chi Hoang 2001 Western Han Bronze Mirrors recently found in Central and Southern Vietnam. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association* 21: 99-106.
- Yamagata, M. and Nguyen Kim Dung 2010 Ancient roof tiles found in Central Vietnam In Bellina, B., E. A. Bacus, T. O. Pryce, and J. Wisseman Christie (eds.) *50 Years of Archaeology in Southeast Asia: Essays in Honour of Ian Glover*. River Books, Bangkok: 194-205.

BỘ SƯU TẬP TRANG SỨC THỦY TINH TẠI BẢO TÀNG LỊCH SỬ VIỆT NAM THÀNH PHỐ HỒ CHÍ MINH

Nguyễn Thị Hoài Hương*, Yuko Hirano**, Tokusawa Keiichi***

Bộ sưu tập trang sức thủy tinh hiện đang lưu giữ tại Bảo tàng Lịch sử Việt Nam Thành phố Hồ Chí Minh (BTLSVN TPHCM) tổng cộng có 2.190 hiện vật, gồm các loại như: vòng tay, khuyên tai, hạt chuỗi với nhiều kích cỡ đa dạng và màu sắc phong phú. Đặc biệt chúng được chế tạo với những kỹ thuật khác nhau. Bộ sưu tập trang sức của Bảo tàng chiếm số lượng không nhỏ trong các bộ sưu tập hiện vật quý hiếm của Bảo tàng nói riêng và cả Nam Bộ nói chung. Trong bài viết này, chúng tôi giới thiệu kết quả nghiên cứu kỹ thuật chế tạo của các trang sức bằng phương pháp nghiên cứu loại hình và kết hợp quan sát dấu vết kỹ thuật dưới kính hiển vi tần suất phóng đại gấp 160 lần, đã ghi nhận được những thông tin lý thú từ bộ sưu tập trang sức này.

Dựa trên dữ liệu hiện vật do Bảo tàng cung cấp, cơ bản chúng tôi chia thành ba sưu tập: sưu tập thứ nhất chiếm số lượng lớn được Louis Malleret sưu tầm và thu thập từ nền văn hóa Óc Eo ở miền Tây Nam Bộ¹, gồm 1.698 hiện vật. Sưu tập thứ hai thu được từ những đợt khai quật và đào thám sát từ các di tích khảo cổ học Giồng Phệt và Giồng Cá Vồ (huyện Cần Giờ, TPHCM), gồm 247 hiện vật và sưu tập thứ ba gồm, 245 hạt chuỗi thủy tinh của thu thập từ di tích Phú Hòa (tỉnh Đồng Nai).

Đặc điểm chung của ba bộ sưu tập trên là loại hạt chuỗi đơn sắc loại hạt chuỗi mà Peter Francis gọi là hạt chuỗi Indo-Pacific, kích cỡ đa dạng và có nhiều loại màu sắc khác nhau, chiếm số lượng lớn, được làm bằng kỹ thuật kéo và ép các mặt một cách đơn giản. Tuy nhiên, ở mỗi bộ sưu tập có những đặc điểm riêng mà chúng tôi sẽ trình bày ở phần dưới đây theo loại hình và kỹ thuật chế tạo.

I. Giới thiệu về các sưu tập trang sức:

I.1. Vòng đeo tay: (Bảng 1) tổng cộng có 6 tiêu bản, gồm 5 chiếc nguyên và 1 mảnh vỡ, có các màu sắc như coban, xanh dương và tím. 05 chiếc được thu thập từ đợt khai quật ở Cần Giờ, 01 mảnh vòng (kí hiệu BTLS.1860) trong sưu tập thủy tinh văn hóa Óc Eo. Chúng có 2 loại:

- *Vòng đeo tay có mặt cắt hình ngũ giác:* 5 tiêu bản. Trong đó 2 tiêu bản màu xanh dương, 1 tiêu bản màu tím và 1 mảnh vỡ màu coban. Quan sát bằng mắt thường những vòng tay này bề mặt khá phẳng, các bọt khí thủy tinh chạy thành vệt dài theo trục của vòng tay, không có dấu vết nối giáp vòng. Quan sát dưới kính hiển vi, có thể thấy rõ hơn vết kéo và chạy dài của bọt khí đồng thời cũng quan sát rõ dấu vết ép khuôn từ 2 rìa cạnh, mặt ngoài và mặt trong vòng tay. Mặt trong của loại vòng có mặt cắt hình ngũ giác có những ngấn dài tiếp nối nhau do quá trình ép từng đoạn ngắn

* TS. Viện Nghiên cứu Phát triển Thành phố Hồ Chí Minh, Việt Nam.

** TS. Trường Đại học Sophia, Nhật Bản.

***PGS.TS. Trường Đại học Khoa học Okayama, Nhật Bản.

¹ Kí hiệu Bảo tàng ghi: Sưu tập trang sức Văn hóa Óc Eo? Chúng tôi tạm sử dụng cụm từ “sưu tập văn hóa Óc Eo” để phân biệt với “sưu tập trang sức Cần Giờ” gồm các trang sức thu thập được từ di tích Giồng Cá Vồ và các hiện vật sưu tầm từ khu vực huyện Cần Giờ.

tạo cho chiếc vòng có hình dáng hơi méo. Trọng lượng mỗi chiếc dao động từ 7.16gr đến 12.14gr. Đường kính của những chiếc vòng này khá lớn từ 11.61mm đến 18.17mm, chỉ có một chiếc màu tím trong suốt, đường kính nhỏ 8.47mm. Những chiếc vòng này được làm bằng kỹ thuật Rotation tech kết hợp dùng khuôn một mặt.

- *Vòng đeo tay có mặt cắt hình chữ D*: 1 tiêu bản nguyên vẹn, kí hiệu BTLS.13626. Vòng khá tròn, hình dáng bản vòng cân đối. Bề mặt vòng có những vết đất bám chặt, không nhìn rõ các bọt khí. Vòng có màu xanh đen, được tạo dáng bằng kỹ thuật Rotation tech. Trọng lượng 18.17gr, nặng hơn so với các vòng tay mặt cắt hình ngũ giác. Đường kính rộng 89.3mm, rộng bản vòng 6.45-6.83mm và dày bản vòng 5.17-5.54mm. Chiếc vòng này có khả năng là hàng nhập khẩu.

I.2. Khuyên tai: tổng cộng 10 chiếc, khuyên tai hai đầu thú, 03 khuyên tai hình vành khăn có khe hở và 03 khuyên tai hình thoi. Chúng được chế tạo bằng các kỹ thuật sau:

I.2.1. Khuyên tai chế tạo bằng kỹ thuật đổ khuôn, nén ép các mặt:

a) *Khuyên tai hai đầu thú*: 04 chiếc, được thu thập trong di tích Giồng Cá Vồ.

1/ Khuyên tai kí hiệu: BTLS. 13649.

Khuyên tai bị canxi hóa có màu xám trắng, 2 đầu sừng bị gãy đầu nhọn, có thể quan sát vết thủy tinh bên trong có màu xanh rêu nhạt, trong suốt. Trọng lượng: 6.99gr.

Kích thước (milimet):

Tổng thể: cao: 32.08, ngang rộng: 42.32, dày lưng: 7.83, rộng bụng: 11.54, dày bụng: 8.78.

Móc đeo: cao 12.26, chiều ngang chân móc đeo bằng chiều dày lưng. Rộng ngang móc đeo: 9.28, rộng giữa móc đeo 5.28, dày giữa móc đeo: 2.74, rộng đầu móc đeo: 3.42, dày đầu móc đeo: 2.46.

Đầu thú 1: Cao còn lại: 23.14; khoảng cách hai đầu thú: 8.36, dày: 4.81; cổ thú: 8.47; Miệng thú cao: 6.89.

Đầu thú 2: Cao còn lại: 21.67; khoảng cách hai đầu thú: 7.85, dày: 5.28; cổ thú: 8.91; Miệng thú cao: 6.51.

Hai mắt thú ở mỗi đầu hơi mờ, mắt rộng trung bình 2.18, dài 3.5.

Cao rốn: 5.09.

2/ Khuyên tai: kí hiệu: BTLS. 13618.

Màu xanh rêu, trong suốt, bị gãy 1 sừng. Trọng lượng: 19.13gr.

Kích thước (milimet):

Tổng thể: cao: 42.24, ngang rộng: 47.59, dày lưng: 10.43, rộng bụng: 34.87, dày bụng: 11.33.

Móc đeo: cao 21.82, rộng 13.88, chiều ngang thân móc đeo phía trên 7.27 x dày 9.53- phía dưới ngang 9.77 x dày 7.04, đầu nhọn móc đeo: 3.31. Chiều ngang hẹp nhất ở chân móc đeo liền với lưng: 4.23.

Sừng ở hai đầu:

Đầu thú 1: Cao: 35.70; khoảng cách 2 đầu sừng : 15.97; dày đầu sừng: 6.6, cao sừng 16.16; miệng thú: bị vỡ, dài miệng 13.89, dày phía trên miệng 6.45; mắt 5.55 x 1.13-1.14; Cổ 11.12.

Đầu thú 2: cao: 37.02; khoảng cách 2 đầu sừng không đo được vì một sừng bị gãy, dày đầu sừng: 5.94, cao sừng 17.89; rộng miệng thú: 7.49 x dày 2.98, dài miệng thú 14.89, dày phía trên miệng 5.94; mắt 6.04 - 5.88 x 2.22; Cổ 10.29.

Cao rốn: 5.28, rộng phía trên gắn với bụng 5.43, rộng phía dưới nhô ra ngoài 7.86, dày 5.28.

3/ Khuyên tai: kí hiệu: BTLS. 13617.

Màu xanh rêu đậm, trong suốt. Dáng mập mạp, bị gãy 2 sừng đầu 1. Trọng lượng: 25.77gr.

Kích thước (milimet):

Tổng thể: cao: 40.13, ngang rộng: 48.49, dày lưng: 11.48, rộng bụng: 35.18, dày bụng: 15.35.

Móc đeo: cao 17.15, rộng 12.72, chiều ngang thân móc đeo dày nhất 8.38 x dày 8.63, đầu nhọn móc đeo: 3.15.

Sừng ở hai đầu:

Đầu thú 1: Cao: 30.49; 2 đầu sừng vỡ; dày đầu sừng: 5.5 x 4.87, miệng thú: dài 10.28, dày phía trên miệng 6.5, dày phía dưới miệng 5.34; mắt 5.0 x 2.47; Cổ 14.47.

Đầu thú 2: cao: 37.02; khoảng cách 2 đầu sừng 12.14, dày đầu sừng: 5.72 x 4.56, cao sừng 16.10 - 16.04; rộng miệng thú phía trên: 6.84, rộng miệng thú phía dưới 5.77, dài miệng thú: 10.20; mắt 7.0 x 1.86; Cổ 14.37.

Cao rốn: 5.4, rộng phía dưới nhô ra ngoài 5.77.

4/ Khuyên tai: kí hiệu: BTLS. 13653.

Màu xanh dương nhạt, trong suốt, một đầu thú bị gãy mất phần miệng, một sừng (đầu 2) bị gãy, ghép dính lại. Rốn cũng bị vỡ. Trọng lượng: 12.56gr.

Kích thước (milimet):

Tổng thể: cao: 39.66, ngang rộng: 40.33, dày lưng: 9.63, rộng bụng: 12.89, dày bụng: 10.89.

Móc đeo: cao: 20.92, rộng 13.14, chiều ngang thân móc đeo phía trên 5.69, nơi rộng nhất 9.91 x dày 7.67.

Sừng ở hai đầu:

Đầu thú 1: Cao: 34.36; khoảng cách 2 đầu sừng: 13.79; dày đầu sừng: 2.65, miệng thú: dài 11.55, rộng phía trên miệng 6.6, dày phía dưới miệng 6.73; mắt 5.57 x 2.94;

Đầu thú 2: dày đầu sừng: 6.43, cao sừng: 16.43; miệng thú vỡ.

b) *Khuyên tai hai hình vành khăn có khe hở*: có 2 chiếc, kí hiệu: BTLS. 13655a & b; màu xanh rêu, có mặt cắt bản vòng hình tam giác. Trên cả 2 chiếc, trên hai mặt lỗ khoan giữa khuyên tai đều có kích thước khác nhau, mặt dưới có một đường phẳng, mỏng, ngay sát lỗ khoan. Mặt trên lỗ khoan rộng hơn lỗ khoan bên dưới trong khoảng 1.5-2.00mm.

Chiếc thứ nhất: có trọng lượng 2.39gr. Kích thước (milimét): dài 21.65, rộng 22.12, dày 5.09; 5.64, chiều cao lọt lòng 8.58; 10.52, chiều ngang lọt lòng 9.17; 11.32.

Chiếc thứ 2: có trọng lượng 2.46gr. Kích thước (milimét): dài 20.49, rộng 21.85, dày 6.07; 6.12, chiều cao lọt lòng 9.49; 10.04, chiều ngang lọt lòng 10.09; 11.02.

c) *Khuyên tai hình thoi*: 03 chiếc. Thân khuyên tai là khối hình thoi 8 mặt, màu xanh dương, mặt cắt dọc hình thoi, mặt cắt ngang giữa thân hình vuông. Móc đeo dày, có hình móc. Trong đó, 01 chiếc kí hiệu BTLS. 13616 thu được trong đợt khai quật Giồng Cá Vồ năm 1994. 02 chiếc còn lại (không có kí hiệu) do cán bộ Bảo tàng sưu tầm trong cư dân ở khu vực huyện Cần Giờ. Các khuyên tai này được làm bằng kỹ thuật ép khuôn.

- Chiếc 1: BTLS. 13616, trọng lượng 12.11gr; dài 31.85mm; rộng 23.44 x 23.85mm

- Chiếc 2: Không số, trọng lượng 12.31gr; dài 34.55mm; rộng 23.3 x 24.42mm

- Chiếc 3: Không số, trọng lượng 11.66gr; dài 33.68mm; rộng 23.35 x ?

I.2.1. Khuyên tai chế tạo bằng kỹ thuật kéo dài, uốn vòng và ép khuôn:

Khuyên tai hai hình vành khăn có khe hở: 01 chiếc, kí hiệu BTLS. 13615: màu xanh dương, vỡ một ít ở đầu khe hở, mặt cắt bản vòng khuyên tai hình tam giác, có trọng lượng 3.91gr. Kích thước (milimét): dài 22.15, rộng 23.87, dày 6.47; 6.72, chiều cao lọt lòng 10.56; 10.91, chiều ngang lọt lòng 11.12; 11.78.

I.3. Hạt chuỗi:

Hạt chuỗi chiếm số lượng lớn, có 2.174 hạt trong sưu tập trang sức thủy tinh tại Bảo tàng.

Bộ sưu tập hạt chuỗi văn hóa Óc Eo có tổng cộng: 1.696 hạt với nhiều hình dáng khác nhau. Trong đó có hai nhóm màu sắc chính:

1.3.1. Nhóm hạt chuỗi đơn sắc: chiếm số lượng lớn, phong phú về kiểu dáng và màu sắc.

a) *Hình thoi đa giác:* hầu hết hạt chuỗi có các góc cạnh không cân xứng, kích cỡ đa dạng: kích thước nhỏ có hình thoi 8 mặt, mặt cắt ngang thân hình tứ giác đến hình thoi 13,14 mặt, mặt cắt ngang thân hình ngũ giác, lục giác. Kích thước hạt nhỏ nhất dài 6.32mm, rộng 7.42mm (1 hạt), các hạt khác khá đều nhau, chiều dài từ 8.94mm đến 13.45mm; rộng giữa thân từ 9.5mm đến 13.05mm.

b) *Hình thoi tròn:* có 2 kiểu: Kiểu thứ nhất, kiểu hạt chuỗi dạng như 2 hình nón cụt có đáy gắn liền nhau. Hầu hết là các hạt chuỗi hình thoi đơn sắc có các hình dáng dẹt và tròn, có các màu vàng, xanh dương, coban và 3 hạt đa sắc (kí hiệu BTLS.1779). Kích thước chiều dài từ 4.54mm đến 9.8mm và đường kính ngang thân từ 5.5mm đến 10.77mm. Kiểu thứ hai, hạt chuỗi hình thoi bụng tròn, thuôn nhỏ về hai đầu. Kiểu này duy nhất có 01 hạt đa sắc eye beads (kí hiệu BTLS.1781), hạt chuỗi thon dài, cân đối. Toàn bộ bề mặt có trang trí hình những mắt tròn màu xanh ở giữa, vòng ngoài màu trắng, màu đỏ và các tia ngoài cùng màu nâu đen. Kích thước dài 21.21mm, rộng 9.44mm.

c) *Hình trụ tròn:* chúng tôi chia thành 2 kiểu:

- *Kiểu hình trụ tròn đơn sắc:* được chia thành hai nhóm nhỏ theo kích thước dài và ngắn khác nhau.

+ *Nhóm hạt dài (hạt chuỗi đốt trúc dài):* dáng hình ống dài, mặt cắt hình tròn hoặc hơi méo, màu xanh rêu nhạt. Hai đầu được cắt bằng hoặc vát xéo. Chiều dài trung bình từ 5.13-10.67mm, đường kính rộng từ 4.02-5.91mm.

+ *Nhóm hạt vừa, nhỏ và cườm tằm (hạt chuỗi đốt trúc ngắn):* có dạng hình ống đốt trúc ngắn và loại hạt cườm tằm kích thước rất nhỏ, có những hạt bé như đầu que tằm. Mặt cắt nhóm hạt chuỗi này có hình tròn hoặc gần tròn. Chúng là loại đơn sắc với các màu như: vàng, vàng chanh, xanh dương, xanh rêu, xanh lá, coban, đỏ chu, nâu vàng, vàng nâu, trắng đục. Kích thước hạt loại trung bình dài từ 5.00mm đến 8.65mm, đường kính dao động từ 3.5mm -10.86mm; Loại hạt nhỏ và cườm tằm: có chiều dài dưới 5.00mm đến dưới 2.00mm, thậm chí hạt bé nhất chỉ dài 1.17mm, đường kính dao động trong khoảng 2.34-3.87mm.

- *Kiểu hình trụ tròn đa sắc:* hạt chuỗi có hình trụ tròn cân đối, có vân nhiều màu được chế tạo bằng kỹ thuật kéo thẳng, kéo xoắn kết hợp nhiều màu (từ 2 màu đến 5 màu) như: xanh lá và vàng; đỏ nâu, đen và vàng; đỏ nâu nhạt, vàng và xanh lá; xanh lá, đen, trắng đục, vàng và đỏ nâu; xanh rêu và vàng; trắng đục, xanh lá vàng và đỏ nâu. Có 2 hạt được trang trí những hình mắt eye beads giống hạt chuỗi kí hiệu BTLS.1781. Kích thước dài từ 4.43mm-13.21mm, rộng từ 5.84-14.62mm.

II. Kỹ thuật chế tạo và nguồn gốc xuất xứ:

Qua kết quả nghiên cứu, chúng tôi nhận thấy kỹ thuật chế tác ở sưu tập trang sức tại BTL SVN TPHCM có những kỹ thuật sau:

II.1. Kỹ thuật chế tạo:

II.1.1. Về kỹ thuật chế tạo khuyên tai:

- ***Khuyên tai làm bằng kỹ thuật đổ khuôn và nén ép các mặt:***

Khuyên tai hai đầu thú và khuyên tai hình thoi đều được làm bằng khuôn đúc với kỹ thuật nén ép thủ công. Các dấu vết khuôn ép còn lại ở các bề mặt, các phần phẳng, dẹt ở móc đeo, các mặt lưng, hai bên bụng thú và vết lõm chỗ do bọt khí bị nén ép hiện rõ ở các mặt khối hình thoi (hiện vật kí hiệu BTLS.không số và BTLS.13616).

Khuyên tai vành khăn có khe hở được làm bằng kỹ thuật đồ khuôn tương tự như cách làm khuyên tai hai đầu thú và khuyên tai hình thoi. Điều này dễ dàng thấy ở hai mặt lỗ khoan ở giữa có kích thước khác nhau, mặt dưới có một đường phẳng, mỏng, sát lỗ khoan. Mặt trên lỗ khoan rộng hơn. Mặt khác, ở hai khuyên tai này trong suốt, vết bọt khí không có hướng di chuyển hoặc bị kéo thành hàng dài như các hiện vật được chế tạo bằng kỹ thuật kéo (hiện vật BTLS. 13655a và BTLS. 13655b).

- Khuyên tai làm bằng kỹ thuật kéo dài, cuộn và ép khuôn:

Chỉ có 01 *khuyên tai vành khăn có khe hở* (kí hiệu BTLS. 13615) màu xanh dương, được làm bằng kỹ thuật kéo dài, sau đó cuộn lại theo dáng hình vòng và ép khuôn. Soi dưới kính hiển vi cho thấy các bọt khí chạy vòng theo hướng tròn của khuyên tai, đồng thời dấu vết ép để tạo mặt cắt tam giác cũng được nhìn thấy rõ trên hai mặt trên, dưới của khuyên tai.

II.1.2. Về kỹ thuật chế tạo vòng đeo tay:

So sánh với kỹ thuật chế tạo thủy tinh cổ của làng Mekera miền bắc (Ấn Độ)² có thể những chiếc vòng tay ở Cần Giờ và Óc Eo được làm bằng kỹ thuật Rotation tech. Do đó ở trên các vòng đeo tay không tìm thấy dấu vết nối giáp vòng. Kỹ thuật này khá đơn giản, vòng được tạo hình bằng một chiếc que xoay tròn bằng lực ly tâm, sau đó dùng những dụng cụ có mặt cắt hình bán nguyệt, hình tam giác hay ngũ giác... để chỉnh sửa bề mặt chiếc vòng tạo mặt cắt hình chữ D, hình tam giác hay ngũ giác. Tiếp đó, người ta dùng một dụng cụ bằng gỗ hình chóp để tạo đường kính cho chiếc vòng, lớn hay bé tùy vào kích thước mong muốn.

Tuy nhiên, ở chiếc vòng có mặt cắt ngũ giác trong sưu tập Cần Giờ, dấu vết mặt ngoài vòng được ép đều, phẳng có hình mặt cắt ngũ giác. Mặt trong lòng – nơi tiếp giáp với tay người đeo có những đoạn ngắn ngắt quãng, làm cho chiếc vòng không được tròn. Chúng tôi cho rằng, có thể người thợ đã dùng kỹ thuật vừa ấn, vừa lăn để hoàn chỉnh sản phẩm khi thủy tinh còn dẻo. Những chiếc vòng tìm thấy ở Gò Hàng, Gò Dung tỉnh Long An cũng được làm với kỹ thuật tương tự. Số liệu về số đo kích thước của những chiếc vòng cũng cho biết tất cả chúng được làm thủ công, từng chiếc một.

II.1.3. Kỹ thuật chế tạo hạt chuỗi:

Các hạt chuỗi hình thoi được chế tạo bằng phương pháp kéo và ép khuôn. Khuôn ở đây dùng là loại khuôn 1 mặt. Kết quả nghiên cứu cho thấy hạt chuỗi hình thoi có một nửa bên dưới được làm cân đối, đường kính lỗ xiên nhỏ, chúng tôi cho rằng đây là phần được đặt trong khuôn hình nón cụt (đặt giữa) và một nửa bên trên thường bị méo mó, đường kính lỗ xiên lớn hơn và có một ít thủy tinh bị chảy tràn ra phía ngoài do vết lỗ xiên được đặt từ trên xuống. Trong quá trình tạo lỗ xiên, lực ấn của que xiên làm cho vết lỗ xiên bên trên lớn hơn bên dưới, đồng thời lực tác động của que xiên làm cho thủy tinh ở xung quanh chân lỗ xiên tràn ra phía ngoài.

Trong bộ sưu tập tại Bảo tàng, chỉ tìm thấy một hạt chuỗi màu coban được làm bằng kỹ thuật cuộn (kí hiệu BTLS.1786). Kỹ thuật này tiến hành từ một khối thủy tinh nóng được kéo dài ra. Người thợ dùng một chiếc que cuộn tròn thủy tinh thành những hạt chuỗi liên tiếp và sau đó cắt chúng ra. Ở hạt chuỗi trên, dễ dàng nhận biết bằng mắt thường các vết cuộn xoắn, đặc biệt ở hai đầu hơi nhô ra do hướng cuộn và vết cắt, kích thước hai đầu lỗ xiên tương đương nhau, bề mặt hạt chuỗi nhẵn, không có vết ép.

Riêng hạt chuỗi đa sắc trang trí những hình dạng giống con mắt, hay còn gọi là Eye beads có kỹ thuật chế tạo nhiều

¹ công đoạn phức tạp hơn chúng tôi sẽ trình bày ở một dịp khác.

² Tokusawa Keiichi, Yuko Hirano. 2008. Tài liệu khảo sát kỹ thuật chế tạo thủy tinh ở miền bắc Ấn Độ. Xem thêm: Jan Kock and Torben Soth, 1994. Glass, glass beads and glass sakers in Northern India. Denmark: The Silk

thuật kéo dài và chỉnh sửa bề mặt một cách đơn giản.

II.2. Nguồn gốc xuất xứ của sưu tập thủy tinh:

Nghiên cứu loại hình học quan sát dấu vết kỹ thuật chế tạo trang sức dưới kính hiển vi và so sánh đối chiếu với các phương pháp làm thủy tinh cổ cho biết, các loại vòng tay, khuyên tai, hạt chuỗi hầu hết được chế tạo tại chỗ theo phương pháp chế tạo thủy tinh truyền thống Ấn Độ. Một số hạt chuỗi Eye beads và những hạt chuỗi hình trụ tròn, hình thoi tròn đa sắc là những sản phẩm ngoại nhập.

Từ kết quả nghiên cứu trên, cùng với niên đại đã được xác định của các di tích Phú Hòa $2400 \pm 140\text{BP}$ và $2590 \pm 240\text{BP}$, Giồng Cá Vồ ($2480 \pm 50\text{BP}$) và các di tích văn hóa Óc Eo có tìm thấy trang sức thế kỷ (từ thế kỷ II-IV sau công nguyên) một lần nữa khẳng định nền sự phát triển về kinh tế đặc biệt là nghề chế tạo thủy tinh đã tồn tại địa phương. Các kết quả nghiên cứu khác từ Cần Giờ cũng cho biết tại đây có dấu vết của việc chế tạo trang sức (Đặng Văn Thắng, Nguyễn Kim Dung, 1991). Ngoài ra, khi nghiên cứu sưu tập ở di tích Gò Ô Chùa (Long An) chúng tôi cũng phát hiện dấu vết của giọt thủy tinh nóng chảy và cả những mẫu thủy tinh nguyên liệu, chứng tỏ việc sản xuất thủy tinh đã tồn tại ở đây. Đồng thời, việc phát hiện những kỹ thuật chế tạo thủy tinh mang phương pháp truyền thống Ấn Độ và các hạt chuỗi ngoại nhập cũng cho biết ở Nam Bộ sự giao lưu, tiếp xúc với bên ngoài đã diễn ra khá mạnh mẽ từ những năm trước và sau Công nguyên.

TÀI LIỆU THAM KHẢO

1. Đặng Văn Thắng, Nguyễn Kim Dung. 1995. *Về những bằng chứng của nghề chế tạo thủy tinh Địa phương ở Cần Giờ*. NPHMVKCH 1995, pp.242-243.
2. Jan Kock and Torben Sode 1994. *Glass, glassbeads and makers in Northern Asia*. Denmark:THOD Print.
3. Yuko Hirano. 2008. *Buôn bán và sự phát triển của nó trong thời đại đồ sắt Việt Nam qua nghiên cứu trang sức bằng thủy tinh*. Tạp chí Khảo cổ học, số 4, pp.39-44.

Bảng 1: THỐNG KÊ VÒNG ĐEO TAY

STT	Sưu tập	Kí hiệu	Tình trạng	màu	Mặt cắt	Trọng	Kích thước (Milimet)		
						lượng (gr)	Dài/p	Rộng	Dày
1	GCV	BTLS.13626	nguyên	coban	chữ D	18.17	89.3	6.45-6.83	5.17-5.54
2	GCV	BTLS.13657/2	nguyên	xanh dương	ngũ giác	12.14	59.62	8.17-9.82	5.07-5.94
3	GCV	BTLS.13657/1	nguyên	xanh dương	ngũ giác	11.61	57.26	8.8-10.18	5.42-6.64
4	GCV	BTLS.13625	nguyên	tím	ngũ giác	7.16	60.04 - 60.77	7.02-7.84	3.79-4.08
5	GCV	Không có kí hiệu	mảnh	coban	ngũ giác	11.71	80.33	12.48-12.6	6.34-6.63
6	Óc Eo	BTLS.1860	mảnh	xanh dương	ngũ giác	8.47	62.21	10	6.63

Bảng 2: THỐNG KÊ HẠT CHUỖI THỦY TINH (loại lớn)

STT	Sưu tập	Kí hiệu	Loại hình	Màu sắc	Mặt cắt	Số lượng
I Hạt chuỗi hình thoi đa giác						49
1	GCV	BTLS. 13682	Hạt chuỗi hình thoi 8 mặt	Coban	vuông	1
2	Óc Eo	BTLS. 1766 (4153)	Hạt chuỗi hình thoi	xanh rêu nhạt	tứ giác	1
3	Óc Eo	BTLS. 1766 (4153)	Hạt chuỗi hình thoi 13 mặt	xanh rêu nhạt	lục giác	6
4	Óc Eo	BTLS. 1766 (4153)	Hạt chuỗi hình thoi 14 mặt	xanh rêu nhạt	ngũ giác	1
5	Óc Eo	BTLS. 1766 (4153)	Hạt chuỗi hình thoi 14 mặt	xanh rêu nhạt	lục giác	40
II Hạt chuỗi hình thoi tròn						40
1	Óc Eo	BTLS. 1779 (3539)	Hạt chuỗi hình thoi tròn	5 màu: xanh lá, đen, trắng đục, vàng, đỏ nâu	tròn	1
2	Óc Eo	BTLS. 1779 (3539)	Hạt chuỗi hình thoi tròn	sọc thẳng 3 màu: vàng, xanh lá, đỏ nâu	tròn	1
3	Óc Eo	BTLS. 1781 (3262)	Hạt chuỗi hình thoi tròn	eye beads	tròn	1
4	Óc Eo	BTLS. 1767 (4569)	Hạt chuỗi hình thoi tròn	vàng	tròn	15
5	Óc Eo	BTLS. 1775	Hạt chuỗi hình thoi, tròn dẹt	vàng chanh	tròn	1
6	Óc Eo	BTLS. 1786	Hạt chuỗi hình thoi tròn	coban	tròn	1
7	Óc Eo	BTLS. 1775	Hạt chuỗi hình thoi tròn	vàng chanh	tròn	1
8	Óc Eo	BTLS. 1786	Hạt chuỗi hình thoi tròn, nhỏ	xanh dương nhạt	tròn	1
9	Óc Eo	BTLS. 1786	Hạt chuỗi hình thoi tròn, nhỏ	coban	tròn	17
10	Phú Hòa	BTLS.4797	Hạt chuỗi hình thoi tròn	Coban	tròn	1
III Hạt chuỗi hình trụ tròn						27
1	Óc Eo	BTLS. 1767 (4569)	Hạt chuỗi hình trụ tròn, nhô một đầu	vàng	tròn	11
2	Óc Eo	BTLS. 1779 (3539)	Hạt chuỗi hình trụ tròn, nhô một đầu	2 màu: xanh rêu và vàng	tròn	2
3	Óc Eo	BTLS. 1782 (409)	Hạt chuỗi đốt trúc hình trụ tròn	xanh dương, vân trắng và eye beads	tròn	1
4	Óc Eo	BTLS. 1782 (409)	Hạt chuỗi đốt trúc hình trụ tròn	xanh lá, vân và 2 chấm tròn màu vàng	tròn	2
5	Óc Eo	BTLS. 1779 (3539)	Hạt chuỗi đốt trúc hình trụ tròn	xoắn 3 màu: đỏ nâu, đen, vàng	tròn	1
6	Óc Eo	BTLS. 1779 (3539)	Hạt chuỗi đốt trúc hình trụ tròn	xoắn 3 màu: đỏ nâu nhạt, vàng, xanh lá	tròn	3
7	Óc Eo	BTLS. 1779 (3539)	Hạt chuỗi đốt trúc hình trụ tròn	3 màu theo chiều dọc: vàng, đen, đỏ.	tròn	1
8	Óc Eo	BTLS. 1779 (3539)	Hạt chuỗi đốt trúc hình trụ tròn	4 màu dọc: trắng đục, xanh lá, vàng, đỏ nâu	tròn	6
Tổng cộng						116

Bảng 3. HẠT CHUỖI THỦY TINH ĐƠN SẮC (loại trung bình và nhỏ)

Stt	Kí hiệu	Loại hình	Màu sắc	Mặt cắt	Số lượng
I Sưu tập văn hóa Óc Eo: Hạt chuỗi đốt trúc trung bình, nhỏ và tằm					1582
1	BTLS. 1786	Hạt chuỗi đốt trúc tròn, lớn	xanh dương	tròn	2
2	BTLS. 1786	Hạt chuỗi đốt trúc tròn, lớn	coban	tròn	35
3	BTLS. 1786	Hạt chuỗi đốt trúc tròn, lớn	xanh rêu	tròn	1
4	BTLS. 1769	Hạt chuỗi đốt trúc tròn, lớn	xanh dương nhạt	tròn	19
5	BTLS. 1775	Hạt chuỗi đốt trúc tròn, lớn	vàng	tròn	65
6	BTLS. 1775	Hạt chuỗi tròn dẹt	vàng	tròn	1
7	BTLS. 1774	Hạt chuỗi đốt trúc, tròn	đỏ chu	tròn	84
8	BTLS. 1767 (4569)	Hạt chuỗi đốt trúc tròn	vàng	tròn	2
9	BTLS. 1786	Hạt chuỗi đốt trúc tròn, nhỏ	xanh rêu	tròn	3
10	BTLS. 1786	Hạt chuỗi đốt trúc tròn, nhỏ	xanh dương	tròn	2
11	BTLS. 1777	Hạt chuỗi đốt trúc tròn, nhỏ	xanh dương	tròn	228
12	BTLS. 1769	Hạt chuỗi đốt trúc tròn, nhỏ	xanh dương nhạt	tròn	146
13	BTLS. 1775	Hạt chuỗi đốt trúc tròn, nhỏ	coban	tròn	2
14	BTLS. 1775	Hạt chuỗi đốt trúc tròn, nhỏ	vàng	tròn	250
15	BTLS. 1777	Hạt chuỗi đốt trúc tròn, tằm	xanh dương	tròn	163
16	BTLS. 1769	Hạt chuỗi đốt trúc tròn, tằm	xanh dương nhạt	tròn	200
17	BTLS. 1775	Hạt chuỗi đốt trúc tròn, tằm	vàng	tròn	379
II Sưu tập Giồng Cá Vồ					
II.1 Hạt chuỗi đốt trúc trung bình, nhỏ và tằm					146
1	BTLS. 13665	Hạt chuỗi đốt trúc tròn	Coban	tròn	28
2	BTLS. 13681	Hạt chuỗi đốt trúc tròn	đỏ chu	tròn	24
3	BTLS. 13682	Hạt chuỗi đốt trúc tròn	xanh lá	tròn	1
4	BTLS. 13666	Hạt chuỗi đốt trúc tròn	xanh dương	tròn	76
5	BTLS. 13665	Hạt chuỗi đốt trúc tròn	xanh dương	tròn	1
6	BTLS. 13682	Hạt chuỗi đốt trúc tròn	xanh dương	tròn	2
7	BTLS. 13682	Hạt chuỗi đốt trúc tròn	trắng đục	tròn	5
8	BTLS. 13681	Hạt chuỗi đốt trúc tròn	nâu vàng	tròn	8
9	BTLS. 13682	Hạt chuỗi đốt trúc tròn, tằm - dính chặt vào nhau	vàng nâu	tròn	1
II.2 Hạt chuỗi đốt trúc dài					85
1	BTLS. 13668	Hạt chuỗi đốt trúc dài	xanh rêu nhạt	tròn	82
2	BTLS. 16313	Hạt chuỗi đốt trúc dài	xanh rêu nhạt	tròn	2
3	BTLS. 13680	Hạt chuỗi đốt trúc dài	xanh rêu nhạt	tròn	1
III Sưu tập Phú Hòa					244
1	BTLS.4797	Hạt chuỗi đốt trúc tròn	coban	tròn	7
2	BTLS.4797	Hạt chuỗi đốt trúc tròn	đỏ chu	tròn	111
3	BTLS.4797	Hạt chuỗi đốt trúc tròn	tím	tròn	10
4	BTLS.4797	Hạt chuỗi đốt trúc tròn	xanh lá nhạt	tròn	6
5	BTLS.4797	Hạt chuỗi đốt trúc tròn	xanh dương	tròn	1
6	BTLS.4797	Hạt chuỗi đốt trúc tròn	nâu vàng	tròn	109
Tổng cộng					2057

Bảng 4: BỘ SƯU TẬP TRANG SỨC THỦY TINH TẠI BTL SVN TPHCM

Stt	Loại hình	Sưu tập	Văn hóa Óc Eo	Cần Giờ	Phú Hòa	Tổng cộng
			(Tây Nam Bộ)	(TPHCM)	(Đồng Nai)	
1	Vòng tay	chữ D		1		1
2	Vòng tay	ngũ giác	1	4		5
3	Khuyên tai	2 đầu thú		4		4
4	Khuyên tai	vành khăn có khe hở		3		3
5	Khuyên tai	hình thoi		3		3
6	Hạt chuỗi	Hình thoi tròn đơn sắc	37		1	38
7	Hạt chuỗi	Hình thoi đa giác đơn sắc	48	1		49
8	Hạt chuỗi	Hình thoi tròn đa sắc	3			3
9	Hạt chuỗi	Hình trụ tròn đơn sắc	11			11
10	Hạt chuỗi	Hình trụ tròn đa sắc	16			16
11	Hạt chuỗi	Đốt trúc dài		85		85
12	Hạt chuỗi	Đốt trúc ngắn, nhỏ, tằm	1582	146	244	1972
Tổng cộng			1698	247	245	2190



Pl. 1

Vòng đeo tay có mặt cắt hình chữ
D,

BTLS.13626



Pl. 2

Khuyên tai hai đầu thú,
BTLS. 13649



Pl.3

Khuyên tai hai đầu thú,
BTLS. 13618



Pl.4
Khuyên tai hai đầu thú,
BTLS. 13617



Pl.5
Khuyên tai hai đầu thú,
BTLS. 13653



Pl.6
Khuyên tai hai hình vành
khăn có khe hở,
BTLS. 13655a & b



Pl.7
Khuyên tai hình thoi,
BTLS. 13616



Pl.8
Khuyên tai hình thoi,
Không số



Pl.9
Khuyên tai hai hình vành
khăn có khe hở,
BTLS. 13615



Pl.10
Hình thoi tròn,
BTLS.1779



Pl.11
Hình thoi tròn,
BTLS.1781



Pl.12
Hạt chuối,
BTLS.1786

インドネシア・ラマレラ捕鯨文化の四半世紀

江上 幹幸*・小島 曠太郎**

はじめに

ラマレラは、インドネシア・バリ島から連なる小スンダ列島の東部に位置する小島、レンバタ島にある一村である。レンバタ島は農業を主に零細漁業を加えた経済で成り立っている。その中で、島の南海岸に位置するラマレラ村は伝統木造船プレダン (peledang) による手投げ鉞漁でマッコウクジラを対象とした捕鯨のほかにもイトマキエイなどを捕獲し、それを山民の農作物と物々交換するというインドネシアの他地域では見られない独自の文化を400年以上前から現在に至るまで継続させている(写真1)。江上と小島は毎年当該地に赴いてラマレラ文化の研究を25年近く継続してきたうえで、マッコウクジラ捕鯨を核としてクジラ肉などの物々交換による地域社会との共生関係を含めたものを《ラマレラ捕鯨文化》と定義した(江上・小島2012, Egami Tomoko and Koutaro Kojima 2013, 図1)。

そうした研究のなかで、21世紀に入りインドネシア政治・経済・社会の発展が地方の近代化を促し、当該地域の文化に大きな影響を与えてきたことを解明してきた。ことに2009年以降は、社会の急速な変化に伴って新たな漁法が導入されることで、漁業形態や村社会にも変化が見られ、伝統捕鯨文化の一部が失われてしまう可能性が見え始めてきた。さらに、2013年から2017年の数年間には歴史的事件や革新的出来事が相ついだ。それと同時に世代交代がほぼ完了し、新世代における価値観や生活意識の変化、さらには経済活性化優先の国内社会情勢といった影響も相まって、今後のラマレラ社会が劇的な変容を遂げることも考えられる。

私たちは世界で唯一おこなわれているラマレラのマッコウクジラ捕鯨を、人間と鯨との関わりを知る上で極めて貴重な「人類共通の生きている無形文化遺産」と捉えている。その歴史を記録しておくことはきわめて重要だ

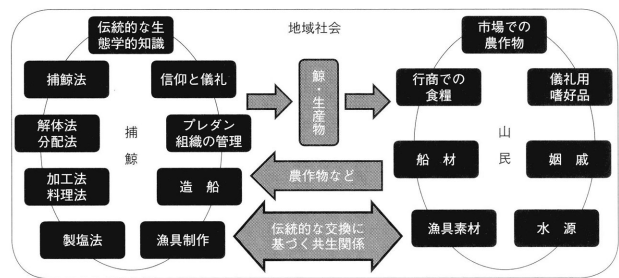


図1 ラマレラ捕鯨文化概念図

と考え、継続研究することを使命として課している。本稿ではまず村と捕鯨文化の概要を紹介し、次に調査を開始した1994年から2017年までのおよそ四半世紀にわたる捕鯨記録を参照してラマレラ捕鯨の特徴を見る。最後に、ラマレラ社会の転換点となった1999年以降の漁の変遷と村の変化の歴史を通して、現在の問題点を考える。現在に至るまでのラマレラの変化をたどることで今後のテーマを探り、引き続き研究を継続したい。

1. ラマレラ村概略

インドネシア共和国は1万3500の島に2億4000万人が暮らす島嶼国家である。行政上34の州があり、ラマレラ村のあるレンバタ島は東ヌサトゥンガラ州に属する。東ヌサトゥンガラ州(略称NTT)は面積47,349.90km²、人口4,899,260人、1市21県から構成されている。レンバタ島は1999年にひとつの島だけでレンバタ県として東フローレス県から分立した。島は南緯8度の熱帯に属し、島民のおもな生業は農業で焼畑耕作によりトウモロコシ・陸稲栽培をおこなう。捕鯨はラマレラ村と隣のソロール島ラマケラ村だけの独自の文化である。

レンバタ県は面積1,266.39 km²で沖縄本島(1,201km²)とほぼ同じ面積で州の面積の2.6%、人口123,141人で州の人口2.5%を占めるに過ぎない行政区である。レ

* 元沖縄国際大学教授

** 文筆家・ラマレラ捕鯨文化研究者

ンバタ県は県都をレウォレバに置き、9郡151村の行政区画から構成され（BPS 2014a）、ラマレラは島の南岸ウランドニ郡に属している。

ウランドニ郡は面積121.44km²、人口8,485人、15村からなり、厳密に言えばラマレラは1970年の行政区画改編以来二つの村、Lamalera Atas村（上村/通称：ラマレラA）とLamalere Bawah村（下村/通称：ラマレラB）から構成されている。通常、当該地では行政村を区別せずに、ラマレラA村・ラマレラB村を合わせてラマレラあるいはラマレラ村と呼称するのが一般的である（小島・江上1999）。他方、ラマレラ語の伝統地名ではA村はTeti Lefo（上の村）、B村はLali Fata（下の浜）と言い、これは現在も日常的に呼称している。

レンバタ県の2014年国勢調査（BPS 2014b）によると、浜の西側の丘陵に位置するA村は面積5.33km²に4集落があり255世帯899人が居住している。村の中心にテティレフォ集落、丘陵地にフン集落とフカレレ集落、そして北側の丘陵を約800m登った標高約210mに位置し、島の先住民族である農耕民の居住するラマヌ集落が含まれている。

いっぽう、浜に面した斜面および浜から東側海沿いの丘陵に広がるB村は面積6.53km²に5集落があり243世帯935人が居住している。浜の周囲にレフォベラとフスゴロの2集落、そこから東に約800mにフトウンロロ集落、さらに東に約900mにクロコフォロ集落、オガオナ集落が点在している（図2）。

2014年現在、A村とB村を合わせたラマレラ全体では約12km²の土地に498世帯1,834人が暮らしていることになる。世帯別職業では漁民世帯がおおよそ7割を占め、農民世帯2割、公務員世帯など1割となっている。参考までに公教育を見ると、小学校児童249人・同教員22人、中学校生徒154人・同教員12人、水産高校生35人・同教員12人となり、教員総数は48人で児童生徒総数438人に達する（BPS 2009）。

ラマレラ捕鯨をおこなう人々はこの地の先住民ではない。伝承によると最初の祖先は16世紀ごろにインドネシア東部諸島からこの地に移住してきた、もともとサメ・ウミガメ・イトマキエイなどの銆漁をしていた海民である。その後、西部諸島からのグループと島内山間部からのグループが段階的にこの地に移住し、現在三つのグループ18氏族が存在する。また、前述した焼畑農耕民である先住民が現在も居住している。宗教は住民のすべてがカトリックの信徒である（写真2）。イエズス会宣教師が1886年にレンバタ島で初めての洗礼をラマレラの地でさづけ、それ以来の伝統で教育水準はとても高い。



図2 ラマレラ

男女の分業が確立しており、男は海に・女は山にという暮らしを守っている。男性は木造帆船プレダン銆漁でマッコウクジラのほかイトマキエイ、イルカ類などを捕獲し、小舟による流し網漁でトビウオなどの魚を得ている。また、造船大工、建築大工としても長けている（小島・えがみ2004）。女性は行商「プネタン」（penatang）や定期市（fula）でクジラ肉などを主食であるトウモロコシなどの穀物と物々交換し、塩作り、石灰作りなどのほか機織りをおこない、絣織物は世界的に名高い（小島・江上1999）。

2. マッコウクジラ捕鯨と銆漁

世界でも稀な熱帯捕鯨をおこなうラマレラ村の伝統捕鯨は、全長10mのプレダンに10～13人ほどの漁師が乗り、手漕ぎで10m以上ある巨大なマッコウクジラに挑み、銆打ち手ラマファ（lama fa）が手投げの離頭銆を打ち込んで仕留める突取捕鯨法で、筆者たちは《プレダン捕鯨》と呼称している（写真3）。

年間20頭ほどを捕獲しているマッコウクジラ以外にも大型魚を捕獲するが、生死をかけて捕獲するマッコウクジラはラマレラ語で「コテクラマ」（koteklema）と呼称し、他の獲物とは異なってさまざまなタブーがあり、漁法をはじめ、部位の分配も捕鯨慣習法に則り厳密に定められている（小島・江上1997, 1999）。

何よりも重要な獲物は、その大きさゆえに村中に肉の配分がいきわたるマッコウクジラであるが、プレダンの銆漁ではそれ以外にも多くの種類の獲物を捕獲している。おもな捕獲対象はゴンドウクジラ類・シャチ・アカボウクジラ・イルカ類の鯨類、魚類ではマンタ・イトマキエイのエイ類とジンベエザメ・シュモクザメなどサメ類やマンボウ、カジキ、マグロ、シイラなどの硬骨魚類、そのほかにアカウミガメ・タイマイ・オサガメなどのウミガメ類も捕獲している。銆漁では、海上で目視のできるほとんどすべての生物を捕獲対象としているが、ヒゲ

クジラ類は捕獲対象から除かれている。現在ではプレダンのほかに、船外機搭載の動力船がマッコウクジラを除いてプレダンと同種の獲物を対象に鈎漁をおこなっている。

捕獲されたマッコウクジラの分配法は厳しく定められ、捕獲に関与したすべての者に何らかの分配がある。捨てる部位のないクジラは余すところなく利用され、その巨体は村中にくまなくいきわたっていく。クジラは自家消費用の食料ではなく、物々交換で経済が成り立っているここでは、重要な資本であり、貨幣に代わるものである。またクジラについて貴重な獲物であるイトマキエイ類の分配法なども定められている。

分配されたクジラ肉は女性や子どもなどの家族が海水で洗い、各家庭に運ばれていく。男性が切り分けたクジラ肉は女性が竿にかけて干し、一週間位で日干し肉に加工されて物々交換の貴重な資本になる。自家消費用の赤身は塩をしてから干して保存し、脂身から滴り落ちる油は集められてランプの油に利用する。干した脂身も食用となり交換される。こうして加工したクジラ肉は、女性の手により山の民のもとへ運ばれていく（小島・江上 1999, 江上・小島 2000, 小島・えがみ 2002）。

3. 物々交換による共生的関係

女性がおこなう物々交換の方法には行商と定期市の二つがある。定期市は山の民と海の民が出会う場所で、週に一度決まった曜日に開催される市であり、ウランドニ (Wulandoni) とレバラ (Lebala) の市が知られている (写真 4)。行商は歩いて山の村に向かい物々交換をする方法で、「ブネタン」と称する。真夜中の 3 時頃出発して、クジラ肉などと交換した 50 キロほどの重い穀物を頭上運搬して、午後に村に戻るのが一般的で、行商は男たちの捕鯨と同じくらい命を賭けた過酷な仕事である (写真 5, 6)。

定期市場や行商で物々交換される産物のうち重要な農産物は主食のトウモロコシ、そしてバナナである。農産物は 6 本が交換の基準単位で、この単位を「モガ」(monga) と称する。クジラ肉一切れは 2 モガの価値が決められ、トウモロコシやバナナ 12 本と交換される (小島・江上 1999, 写真 7)。

ラマレラの人々はクジラや鯨油という特殊な交易産物を持ちながらも、17 世紀から歴史的に島外との交易をまったく行っていない (Barnes, R.H. 1996)。それは移住民であるラマレラの人々が先住民との共生的関係を構築するための戦術であったと推定される。

クジラを原始貨幣として機能するように島内のみに流

通させ、その価値を維持させることがラマレラの民にとって重要だったと考えられる。そのことにより物々交換経済を継続させ、それに支えられて緊密な共生社会を構築していくということが、主食を生産できない海民が、移住地での生き残りをかけた生計戦略であったと私たちは考えている。クジラ・塩・石灰・土器などの重要産物をすべて押さえて島内に流通させ、やがて 1886 年のカトリック改宗以後は、島の南部地域を管轄する中心的な位置を占めるようにさえなっていた。

クジラの価値は安定しており、社会・経済情勢が変化してもクジラとトウモロコシの交換率に変動がないことが、長い歴史的信頼関係を物語っている。捕鯨の近代化と貨幣経済に移行しつつあるラマレラ村が、主食であるトウモロコシの獲得だけは、現在も山の民との物々交換経済によっている事実は、共生関係継続の重要性を表している (江上 2000a, 2000b)。

4. 村内物々交換などの互助システム

クジラなどの獲物の分配は基本的には捕獲に係わった特定メンバーになされ、特に動力船漁では船所有者・船所有者・船外機所有者・(網所有者)・漁夫で配分されるので少人数に渡るのみだが、ラマレラ共同体内では村外での物々交換とは別に村内特有の交換システムが機能している。これは交換率が非常によく、共同体内部の社会的弱者 (ラマレラ語でキデ・クヌケ kide kenuke= 寡婦・孤児) に対する互助システムとなっている。

そのひとつは、クジラ解体中に肉の所有者と直接交換する方法でドウ・スス (du susu パンを売る) と言う。寡婦などが揚げパンを作って持参し、浜に座ってクジラ肉との交換を待つ。揚げパン二枚でクジラ赤身肉一切れを得ることができる。

いまひとつは、クジラ肉獲得者の家を訪問する方法で「パファ・ラマ」(pafā lama 皿を置く) と言う。トウモロコシ粒を満たした皿を手にも所有者家を訪問し、加工し終わったクジラ肉との交換を待つ。一皿で赤身肉二切れと脂身肉一切れを得ることができる。

どちらの物々交換あるいは再分配も生産者のいない女性が親族からの分配以外でクジラ肉を得る数少ない機会として重要である。こうして得たクジラ肉は山民との物々交換用であり、食糧を得る資本となる。これらの交換はクジラ以外の獲物でも、よい交換率で行われている。

ラマレラ共同体にはそのほかにもさまざまな互助システムがある。クジラには特別な分配部位ベファナ (befānā 贈与) が用意されており、捕鯨に関わる何らかの手伝いをした老人などに分配される。また、プレダンや動力船、

表2 58年間の年別マッコウクジラ捕獲統計（1960～2017/9月末）

年	捕獲頭数	年	捕獲頭数	年	捕獲頭数	年	捕獲頭数	年	捕獲頭数	年	捕獲頭数	総頭数
1960	26	1970	37	1980	—	1990	12	2000	10	2010	22	1,014
1961	31	1971	43	1981	—	1991	15	2001	35	2011	14	
1962	—	1972	36	1982	8	1992	10	2002	28	2012	3	
1963	—	1973	23	1983	2	1993	8	2003	18	2013	18	
1964	—	1974	23	1984	7	1994	10	2004	14	2014	31	
1965	34	1975	21	1985	11	1995	40	2005	5	2015	7	
1966	15	1976	—	1986	9	1996	18	2006	4	2016	12	
1967	25	1977	21	1987	7	1997	22	2007	43	2017	(9月末) 20	
1968	43	1978	15	1988	7	1998	31	2008	34	2018	—	
1969	56	1979	15	1989	4	1999	6	2009	5	2019	—	
小計	230	小計	234	小計	55	小計	172	小計	196	小計	127	

トビウオ網漁小舟の海への出し入れを手伝った者にはベラク (belaku 報酬) を得ることができ、とくに生産者ではない老人や子供に与えられた数匹のトビウオなどは家庭の食卓を助けている。

こうした相互扶助が機能し、助け合うことで生きていく。なかでも巨大な資源であるマッコウクジラは、共同体全体でその恩恵に与るという考えを前提としており、捕獲したクジラを村に曳いてくるときにだけ歌われる船唄に明確に表現されている。

“sora taran bala, tala lefo rai tai, pau ribu boi ratu”「象牙の角をもつ水牛（クジラ）よ、一緒に村に帰ろう、村のみんなを食べさせよう」

5. 漁船と漁法

ラムレラで生業のために使用している船には、伝統帆船のプレダン (Peledang)、動力船 (村ではサパ Spāあるいはジョンソン Johnson と呼称する)、小舟 (Spā) の3種類がある。2015年現在で存在するプレダンは20隻、動力船は30隻を数える。漁期は5月から9月であるが、現在の漁は、捕鯨を含め船種ならびに漁獲対象を異にする操業が行われており、以下簡単に説明を加える。

《プレダン捕鯨》

マッコウクジラを対象とした銚漁 (写真8, 9)。漁期は5月から9月であるが、クジラを発見した場合は条件が整えば季節を問わずに出漁する。

プレダン捕鯨は2001年に動力船がプレダンを曳航してクジラを追尾する「動力船参加式プレダン捕鯨」を導入した。2008年以降はプレダンの稼働隻数が減少し、早朝から通常操業する《レファ出漁》から、主にクジラが出現した時に緊急出漁して捕鯨をする《バレオ捕鯨》に移行した。調査開始の1994年以来24年間に捕獲したマッコウクジラの総頭数は450頭で、これを捕鯨回数204回で捕獲している。

《プレダン銚漁》

マッコウクジラ以外の鯨類とイトマキエイ類などの魚類を対象とした銚漁。漁期は5月から8月頃まで。プレダン銚漁では2002年に「動力プレダン」を導入したが、2012年にはプレダンの《レファ出漁》は終焉を迎えつつある (写真10)。

《動力船銚漁》

マッコウクジラ以外の小型鯨類とイトマキエイ類などの魚類を対象とした銚漁 (写真16)。漁の最盛期は5月から10月頃まで、その後12月から4月までは小型鯨類の出現があれば出漁する。動力船銚漁は1隻に5~6人が乗船し、早朝から午後までの昼間に出漁する《レファ出漁》で、主に小型鯨類・イルカ類 (写真11) とイトマキエイ類 (写真12) を漁獲対象としている。

《動力船網漁》

イトマキエイ類を主要漁獲対象にし、その他の魚類・小型鯨類も漁獲する夜間操業の流し網漁 (写真13)。漁期は8月から11月まで。動力船網漁は2009年4月から新たに導入され操業を始めた。これには網目5インチで大型の網が刺網漁の一種である流し網漁として導入され、夜間操業で主にイトマキエイ類を漁獲対象としている。動力船1隻に3~4人が乗り組んで日没前の17時ごろ出漁し、各船が東西いずれかのそれぞれの漁場へ向かう。

漁場では各船それぞれが一カ統の流し刺網を下ろして沖停泊し、深夜から未明にかけて通常は一回の網揚げ操業をおこなう。帰漁は早朝6時頃で水揚げした漁獲は浜で処理して分配される。これは従来小舟でおこなっていた夜間流し網漁の網具の規模を大きくした漁で、漁獲効率がよく、現在では昼間銚漁と並んではラムレラの主要漁法になっている。ラムレラ社会にとって、動力船夜間網漁導入以前とそれ以降の2010年代とは明確に時代を画することができる。2012年からは慣習協議で銚漁優先のため8月解禁と規制された。

表3 24年間のマッコウクジラ捕獲統計

年	捕獲頭数	捕獲回数	年	捕獲頭数	捕獲回数	年	捕獲頭数	捕獲回数	総頭数	総回数
1994	10	7	2004	14	8	2014	31	11	450	204
1995	40	18	2005	5	2	2015	7	6		
1996	18	7	2006	4	4	2016	12	5		
1997	22	8	2007	43	14	2017	(9月末) 20	(9月末) 6		
1998	31	13	2008	34	10	2018	—	—		
1999	6	6	2009	5	2	2019	—	—		
2000	10	5	2010	22	8	2020	—	—		
2001	35	22	2011	14	7	2021	—	—		
2002	28	14	2012	3	2	2022	—	—		
2003	18	10	2013	18	9	2023	—	—		
小計	218	110	小計	162	66	小計	70	28		

《小舟網漁》

小舟サンパンの所有者が個人でおこなう漁であり、2008年には62艘があり、多くの若者たちが操業している。小舟による網漁は昼間操業で網目1.5インチのナイロン網を用いて主にトビウオを対象とした漁（小舟トビウオ流し網漁）と、夜間操業で網目5インチの大型網を用いて主にイトマキエイ類を対象とした漁（小舟夜間流し網漁）が行われている。どちらも1人ないし2人で操業する。こうした個人による零細な漁獲記録は集計されていないが、家族の食料と家計にとって重要な漁獲となっている（写真14）。

6. マッコウクジラ捕獲記録

6-1. 58年間のマッコウクジラ捕獲記録

ラマレラ村でのマッコウクジラの捕獲記録が残されているのは1960年以降である。1960年から2017年までの58年間の年別捕獲頭数を示した（表2）。記録のない年が6回ありデータとしては不十分であるが、現在までに1,014頭のマッコウクジラが捕獲されている。記録のない6年を考慮しても半世紀余でわずか1,100頭余りである。これだけの頭数で2,000人近い村人の生活が50年以上にわたって成り立ってきた事実は、イトマキエイ類、イルカ類なども捕獲して生きる糧になっているとはいえ、おおよその計算ではクジラ1頭で村人100人を1年間賄っていたことになり、クジラの持つ重要性は際立っている。

年代別にみると、1960年代は7年間のデータしかないが230頭の捕獲であるから年平均捕獲頭数は32.9頭、1970年代は9年間のデータで234頭の捕獲であるから年平均捕獲頭数は26頭となる。1980年代は、1979年の海底火山の噴火と地震という自然災害の影響からか凶漁が続き、8年間のデータでわずか55頭、年平均捕獲頭数は6.9頭である。

1990年代半ばにはプレダンの改造・新造が相次ぎ、クジラ漁が復活したことから172頭を捕獲して年平均

捕獲頭数は17.2頭になる。2000年代は年ごとの豊漁と凶漁の差が大きいという特徴がみられるが196頭を捕獲し、年平均19.6頭の捕獲というデータを得ている。さらに、2010年代は本年2017年9月末までのデータで127頭を捕獲し、暫定年平均捕獲頭数は18.1頭である。

また、記録に残されている最多捕獲頭数は1969年の56頭、次いで1968年と1971年の43頭であるから、43頭の捕獲頭数を数えた2007年は半世紀余で4回しかない歴史に残る豊漁の年となった。いっぽう5頭以下という極端な凶漁の年も半世紀余で6回であり、豊漁に先立つ2005年と2006年の凶漁は捕鯨史のなかでも深刻であった。その後も2009年、2012年、2015年と極端な凶漁の年がたびたび出現することが21世紀に入ってからラマレラ捕鯨の特徴だといえる。

6-2. 24年間のマッコウクジラ捕獲記録

捕鯨統計調査を開始して以来の24年間の全捕獲記録に基づいて、年別捕獲回数と捕獲頭数を示した（表3）。1994年から24年間におけるマッコウクジラの捕獲頭数は450頭、捕獲回数は204回である。年平均捕獲頭数は18.8頭、年平均捕獲回数は8.5回であるから、捕鯨機会1回あたりの捕獲頭数は2.2頭となる。

この統計からみると、マッコウクジラ捕鯨は年ごとに捕獲頭数の変動が大きく、安定したものではないことが分かる。しかしながら、24年間にわたり統計を取った成果から、ある現象が見えてきた。それは、豊漁と凶漁の明らかな傾向として6年周期のパターンが見られるということである。

その6年周期のパターン内容は、豊漁の年の後3年間はおおむね平均的な漁獲量であり、5年目と6年目には凶漁になるというものである。初めて調査を開始した年から見てみると、1993・1994年は凶漁であったが、1995年に豊漁となりその後3年間を経て5・6年目の1999・2000年には凶漁となった。このパターンを1995年から2000年までの6年間で周期とみなし、第一周期目とする。

表4 23年間の繁殖周期別マッコウクジラ捕獲統計（1995～2017）

繁殖生活史	周期年	第一周期		第二周期		第三周期		第四周期		総頭数	総回数				
		年	捕獲頭数	捕獲回数	年	捕獲頭数	捕獲回数	年	捕獲頭数			捕獲回数			
交尾・妊娠期間	1	1995	40	18	2001	35	22	2007	43	14	2013	18	9	136	63
妊娠・出産期間	2	1996	18	7	2002	28	14	2008	34	10	2014	31	11	111	42
授乳期間	3	1997	22	8	2003	18	10	2009	5	2	2015	7	6	52	26
授乳期間	4	1998	31	13	2004	14	8	2010	22	8	2016	12	5	79	34
育児休止期間	5	1999	6	6	2005	5	2	2011	14	7	2017	(9月末)20	(9月末)6	45	21
育児休止期間	6	2000	10	5	2006	4	4	2012	3	2	2018	—	—	17	11
周年小計		小計	127	57	小計	104	60	小計	121	43	小計	88	37	440	197
周期平均		平均	21.2	9.5	平均	17.3	10	平均	20.2	7.2	平均	17.6	7.4	19.1	8.6

その後2001年の豊漁と5・6年目に当たる2005・2006年の凶漁で第二周期目が終わり、その翌年の第三周期目は2007年の豊漁とやはり5・6年目の2011・2012年の凶漁というパターンが繰り返されている。ただし2007年の豊漁2年後に当たる2009年は異例な凶漁となっている。

この6年周期パターンからみて、2007年から7年目の2013年には第四周期の豊漁年になると予測されたが捕鯨失敗が異例の10回を数え、1年後の2014年に31頭の豊漁となった。翌2015年は2009年と同様に凶漁となっていることから、豊漁2年後の凶漁は新たな特徴となる可能性がある。凶漁年である2017年は9月現在ですでに20頭が捕獲されているが、パターンからいえば2018年は凶漁年で第四周期が終わり、2019年は第五周期に入り豊漁年と考えられる。

6-3. 6年周期の繁殖サイクル

およそ6年周期のこのような傾向は、マッコウクジラの同じ系群がラマレラ近海に回遊してくると仮定した場合、ほぼ5年に1回の出産というサイクル（加藤1995：193）と関連すると考えられる。

24年間の統計結果から、繁殖サイクルを6年間と想定し、交尾・妊娠・出産までの約2年間、授乳期の2年間、次の交尾期まで休止期の2年間として作成した（表4）。表にしてみると、ラマレラ近海に回遊してくるマッコウクジラ群は、同一パターンで周期的に出現していると言えそうである。

2001年の動力船時代幕開けから6年間漸減し続けていた捕獲頭数は、2007年の豊漁を経てやはり同じパターンで漸減している。マッコウクジラ資源の再生産から考えるとこの傾向は継続していく可能性がある。今後の継続調査により2019年の第五周期1年目、2025年の第六周期1年目の漁獲結果が得られれば、ラマレラ周辺海域のマッコウクジラは同系群が定期的に回遊している可能性に、ある程度の信憑性が得られるデータとなるかもしれない。

7. 社会の変化と捕鯨・漁の変遷

ラマレラ村に変化の兆しが見え始めた1999年から2017年まで19年間にわたるおもな事項を年表に示した（表1）。以下、表を参照して社会と村の変化およびインフラの整備を概観し、次に捕鯨と漁法にまつわる出来事をみる。

7-1. 社会の変化とインフラ整備

1998年にスハルト体制が崩壊して1999年10月にワヒド新政権に代わり、地方分権化が推進されたことが変化の大きな要因となっている。新政権の政策として中央から地方への分権と地方自治強化（地方行政法と中央・地方財政均衡法の法律制定）が推進され、県・市主体の地方自治政府が多数成立した。

1999年10月15日にレンバタ島が東フローレス県から分離してレンバタ県が発足した。任期2001年までの県知事臨時代行にはラマレラ上村出身のペテル・ボリオナ・ケラフ（Petrus Boliona Keraf）氏が就任した。その後ペテル氏は2009年まで県議会議長に就任している。ワヒド新政権内閣の環境大臣にはペテル氏の実弟ソニー・ケラフ（Sony Keraf）氏が就任して村の大きな話題となった。レンバタ県政府の最重要課題は道路整備であり、地方自治政府によるインフラ整備が急ピッチでなされ、ラマレラ村にも自動車道路ができることになり経済的にも村は活況を呈した。

2000年5月6日に上村と下村を繋ぐ1918年造成の伝統的な階段「グリペ」（gripe）が道路拡張工事で崩壊したことは、村の変化と近代化を象徴している。先人たちが崖を穿って築いた階段はラマレラ村の歴史そのものを刻んでいる。あらゆる伝統文化が爆音とともに崩れ落ちるような思いがするほど、グリペの破壊は衝撃的であった（写真15）。

2001年には動力船6隻が新造されて5隻が稼働し、計10隻が操業することで、プレダン鉛漁から動力船鉛漁への移行と同時に動力船の捕鯨への参加が正式承認されるエポックメイキングな年となった。

2002年5月にはラマレラ捕鯨史初となる動力プレダ

表1 マッコウクジラ捕獲頭数とラマレラ関連年表

年	マッコウクジラ捕獲頭数	ラマレラ村の漁に関する出来事	レンバタ県とラマレラ村の出来事	インドネシア国内の出来事
1999	6頭	11・12月 動力船3隻でゴンドウクジラを21頭捕獲「動力船鮫漁」	10月15日 レンバタ県発足 *ラマレラ上村出身のビテル・ケラフ氏が県知事代行	10月 ワヒド新政権発足 *地方行政法および中央・地方財政均衡法の法律制定 ラマレラ上村出身ソニー・ケラフ氏が環境大臣就任
2000	10頭	1月～3月 動力船3隻でゴンドウクジラを26頭捕獲	地方自治政府によるインフラ整備(ラマレラ上村まで自動車道路工事) 5月6日 上村と下村を繋ぐ伝統的階段グリベが道路拡張工事で崩壊 グリベの崩壊	
2001	35頭	1995年以降の豊漁 4月 動力船10隻に増加「動力船鮫漁」へ移行 4月29日 動力船の捕鯨参加が村の掟として承認され「動力船参加式ブレダン捕鯨」導入	8月4日 県知事にアンドレアス氏就任 ビテル・ケラフ氏敗れる	8月 メガワティ新政権発足
2002	28頭	5月8日 村史上初、ブレダン「ジャワテナ」船外機を搭載して初出漁 「動力ブレダン」導入	8月25日 県都レウォレバ町からラマレラ上村までトラックバス路線開通	10月12日 バリ島爆弾テロ事件
2003	18頭	漁期の不漁が顕著 動力船とベアを組むブレダンがマッコウクジラ捕鯨で優位に	定期船航路の廃止、陸路での輸送に移行 往復定期トラックバス2台に増加 8月20日 ウラウンドニ郡発足	
2004	14頭	5月 動力船21隻に増加 「動力船鮫漁」普及 5月 ブレダン出漁が減少 5月 「動力ブレダン」船外機搭載用木枠が固定式に 5月 3頭捕獲以後捕獲なく漁期の不漁	3月30日 レウォレバ町中央市場全焼 ラマレラ村までの往復定期トラックバス4台に増加	10月21日 ユドヨノ新政権発足 *地方行政法、中央・地方財政均衡法が改正 12月26日 スマトラ島沖大地震津波
2005	5頭	5月 ブレダンの出漁激減 7月12日 ラマレラ史上初動力船4隻でザトウクジラ捕獲 8月11日 15ヶ月ぶりにクジラ捕獲	1月 石油燃料不足による高騰 県都地域で携帯電話が利用可能になる 3月 レンバタ島干ばつが凶作になる 6月3日 国営電力会社PLNによる電力供給ラマレラ村に初めて電気が入る	6月から地方首長直接選挙が開始 10月21日 石油燃料126.6%大幅値上げ
2006	4頭	「動力ブレダン」は4隻に増加 漁期にクジラ捕獲なし 1989年以降の深刻な凶漁	6月2日 直接首長選挙でアンドレアス氏 レンバタ県知事再選(2011年まで) 8月26日 県政府が金・銅鉱床の探鉱を許可 12月 ラマレラ村で携帯電話が利用可能に	5月27日 ジャワ島中部地震死者約6,000人
2007	43頭	1月28日 初の日曜日捕鯨 5月2日 ラマレラ史上最大18mの白い巨鯨捕獲 36年ぶりの豊漁 「動力船参加式ブレダン捕鯨」普及	アメリカの環境団体Photovoicesが村民にデジタルカメラ50台を6ヶ月間貸与 写真展後ラマレラ村の記録保存のプログラム開始(WWF、フォード基金、ナショナルジオグラフィック共催) 4月30日 WWFインドネシアがソロール諸島海域環境保護船「コテクラマ」号の進水式 7月 ラマレラに水産高校開校 11月20日 Photovoicesがラマレラで村にて写真展開催	3月6日 西スマトラ地震死者73人以上 NTT州知事選挙フランス州知事2007～2012
2008	34頭	動力船26隻に増加、動力ブレダン8隻に増加 捕鯨は「パレオ捕鯨」へ移行	ラマレラ村までの往復定期トラックバス6台に増加	1月27日 鳥インフルエンザ感染死者100人に 5月24日 石油燃料平均28.7%値上げ
2009	5頭	3月 地方政府網漁船2隻を村に援助 4月 夜間操業「動力船流し網漁」導入 8月 「動力船流し網漁」本格化 ブレダンは「パレオ捕鯨」で稼働	5月14日 マナド国際海洋会議にて「サウ海海洋保護」制定、レンバタ島海域は除外される 7月 ラマレラ沿岸で他地域船による爆弾漁が活発化 10月29・30日 第1回「FestivalBaleo」を村で開催	5月11日 マナドで国際海洋会議開催 7月8日 直接大統領選挙 10月20日 第二次ユドヨノ政権発足
2010	22頭	5月 夜間操業「動力船流し網漁」本格化 8月 一週間でマッコウクジラ13頭の多頭数捕獲	11月29日 ラマレラ村男女106名が伝統捕鯨保護を県議会に訴える直接行動	10月25日 スマトラ島沖地震死者500名 10月26日 ジャワ島ムラビ山噴火死者200名以上
2011	14頭	5月 操業ブレダン7隻のみ(4隻は5月で中止)	5月19日 レンバタ県知事選挙 6月 EliaserYentjiSunur新知事就任(2016年まで) 9月8日 ラマレラカトリック宣教125周年記念式典	12月4日 テルナテ島ガマラマ山噴火
2012	3頭	2月29日 捕鯨時に事故、シカテナ船のG.クラケSLOが3月3日に捕鯨事故死 5月 夜間流し網漁は8月解禁に決定 5月 操業ブレダン2隻のみレファ捕鯨の終焉 深刻な凶漁と豊漁との差が顕著になる	レウォレバ～ラマレラ道路の大規模拡張工事 12月 ウラウンドニ市場に販売市場施設開設	6月29日 バリ島の棚田が世界遺産に登録
2013	18頭	2月5日 捕鯨時にドルテナ船のY.スガジSLOが事故で右足首切断 5月6日 3年ぶりの漁期開けにクジラの捕獲 7月13日 捕鯨時BT船のY.クプロTFO事故 右肋骨骨折 8月15日 動力船ペロ消失事故―シャチ捕獲時に転覆し消失、漁師12人は泳いで上陸し無事生還	5月 ラマレラ村に通信基地局タワー完成 インターネット環境整備され7月通信開始 6月23日 観光・創設経済大臣がラマレラを訪問 10月27日 ラマレラ村に24時間電力供給準備完了	5月23日 NTT州知事選挙 7月17日 フランス州知事2期目～2018 6月22日 石油燃料ガソリン44%値上げ 8月 国家行事セイル・コモド開催 10月4日 バリ島でAPEC開催
2014	31頭	6月～8月に4回の多頭数捕獲で18頭のクジラを捕獲 動力船鮫漁と動力船網漁の漁期を変えることで、ほぼ通年操業が可能になる	5月14日 日本の旅行会社主催による初の団体観光客 8月17日 ウラウンドニで村の境界問題で紛争 以後歴史のある伝統市ウラウンドニ市場は閉鎖	1月～スマトラ島シナブアン山噴火と溶岩流 10月20日 ジョコ・ウィド政権発足 12月28日 エアアジア機墜落死者行方不明162名
2015	7頭	動力船3隻が新造されて30隻に増加 5月～9月の漁期にクジラ捕獲2頭のみで凶漁に	5月 新礼拝堂が完成して初の海明けミサラマレラ村の山側に新道路が開通 観光省・地方政府がツーリズムを推進し、団体客の増加 ウラウンドニ市場の代替えとしてラマレラ村の郊外に市場を開設して交換市を継続開催	7月9日 ジャワ島ラウン山噴火でバリなど空港閉鎖 11月4日 ロンボク島リンジャンニ山噴火 12月9日 インドネシア初の地方統一首長選挙
2016	12頭	2月と4月にそれぞれ単独オスの巨鯨捕獲 5月にブレダン操業なし 8月17日 独立記念日に5頭の高頭数捕鯨	4月26日 ブレダン船ケナプカ進水式(破損により解体し、1991年以来25年ぶりの新造)	1月14日 インドネシアの首都ジャカルタの中心部で爆弾テロ事件 11月4日 アホック、ジャカルタ特別州知事がイスラムの聖典「コーラン」を引用し、イスラム教を冒とくした問題になり首都で大規模デモ
2017	20頭(9月末)	5月村の協議で5～6月はブレダン操業活発化を推進 漁期にクジラ群の回避、5月に3回で9頭、6月1日に5頭、7月20日に5頭の高頭数捕鯨	1月17日 ラマレラにNTT銀行・預金融資部が開業 2月15日 レンバタ県知事選挙 5月22日 EliaserYentjiSunur再選され県知事就任(2021年まで) 6月15日 州観光庁が2018年からホエールウォッチング観光推進を目指すと発表 8月2日 A村でラマレラ史上初の井戸の掘削成功で生活水供給可能に B村でも掘削開始	2月15日 101自治体統一地方選挙 4月19日 ジャカルタ州知事選挙の決選投票アス氏 5月9日 インドネシアの地方裁判所は、イスラム教の聖典「コーラン」を侮辱する発言をしたとして、バスキ・ジャカルタ州知事に禁錮2年の実刑判決 9月22日バリ島の最高峰アグン山が火山活動活発化で住民避難開始

ンが初漁に出ている。8月には2000年からのプロジェクトである道路建設が完成した。念願であった県都レウォレバ町から毎日一往復する定期トラックバス路線が、25日にラマレラA村まで開通して町への日帰りが可能になった(写真23)。これにより、翌2003年には長年親しんできた定期船航路は廃止された。

2003年8月20日に新しい郡、ウランドニ(Wulandoni)郡が発足し、ラマレラA村・B村ともにこれまでのナガウトウン(Nagawutung)郡から編入した。郡都は定期市の開催されるウランドニ(Wulan Doni)に置かれた。

2004年に4台に増加した定期トラックバスの普及は伝統的な女性の行商にも大きく影響した。定期的に出かける山間の行商もトラックバスを利用して行くようになった。何時間もかけて歩いて行った村はわずか30分ほどで到着する。トモロコシやバナナが入った荷物を頭上に載せて山道を歩く姿はこの年以降しだいに消えてゆく(写真17, 18)。便利になった反面、現金を必要とする行商へと変化した。同年は動力船釣漁が普及した年でもあり、軌を一にして動力化により男女のライフスタイルが一変した年として記録される。

2005年6月3日には、夜間18時から翌朝6時までの12時間のみではあるが国営電力会社PLNによる電力の供給が開始され、昔ながらの鯨油ランプの夜は消えた。

2006年12月には携帯電話の利用が可能となり、道路・交通・電力・通信のインフラがほぼ整い、貨幣が必要とされる経済システムへと移行していくことになる。

2007年は環境保護団体の活動が村で活発におこなわれた。アメリカの環境団体である「Photovoices」が村民にデジタルカメラ50台を6ヶ月間貸して、村で写真展とセミナーを開催した。同時にWWF(World Wildlife Fund) Indonesiaがソロール諸島海域の環境保護活動のための船「コテクラマ=マッコウクジラ」号を活動させた。これ以降、反捕鯨団体を含めた国際的な環境保護団体による活動は2010年まで断続的ではあるが継続してゆく。村では従来からある幼稚園、小学校2校、中学校について、新たに公立水産高校SMKNが開校して義務教育以上の中等教育が村内で受けられるようになった。

2008年にはトラックバス6台に増加した。B村村長もバスを所有して運送経営に参加している。環境団体「Photovoices」がジャカルタで写真展とセミナーを開催している。

2009年はインドネシア政府・NGOの環境保護活動

も活発化し、マナドの「国際海洋会議」(World Ocean Conference)において「サウ海海洋保護区」(Kawasan Konservasi Perairan Laut Sawu)が政府によって制定された。しかしながら、ラマレラ捕鯨を否定しかねないレンバタ島を含むZone IIは、国際海洋会議前のラマレラ村民と関係者の強い反対と調整により、サウ海海洋保護区の対象から除外された。また、漁期終了後に村の宣伝活動として第一回「フェスティバル・バレオ」が政府主導で開催され、以後インドネシア人の報道関係者やカメラマンなどが毎年訪問するようになる。

2010年にはラマレラ村の男女106名がプレダンと動力船に分乗して県都レウォレバに向かい、海岸にキャンプして伝統捕鯨保護を県議会に訴えるデモを行った。この年以降、ラマレラ捕鯨規制・クジラ保護活動はラマレラ捕鯨を観光資源とする流れにシフトしていく。水産高校の第一期生が全員国家試験に合格して卒業する。

2011年に県知事選挙が行われ新知事が誕生した。地方政府・州政府指導のラマレラ観光化とそのためのインフラ整備が始まる

2012年に県都レウォレバ-ラマレラ幹線道路の拡張舗装工事が開始される。ウランドニ市場には、物々交換市に隣接して、日用品を販売する商人のために販売市場が開設された。

インドネシアの省庁の改編で文化・観光省が観光・創造経済省になる。中央・地方政府が観光業振興、地方活性化を図り、レンバタ県ではラマレラが観光振興政策の中心と位置づけられ、以後インフラ整備が加速する。

2013年には通信基地局タワーが完成してインターネット環境が整備され、電力会社は24時間電力供給用の工事を完了させた(写真19)。また、観光・創造経済大臣が村を視察訪問している。

2014年には団体観光客の増加がみられるようになった。日本の旅行会社主催による初の団体観光客が訪れ、プレダンに乗船しての体験型観光を敢行した。8月には伝統の物々交換市であるウランドニ市場が村同士の紛争により閉鎖に追い込まれるという、歴史的な事件が発生した。将来的にラマレラ捕鯨文化の画期的な変容がある

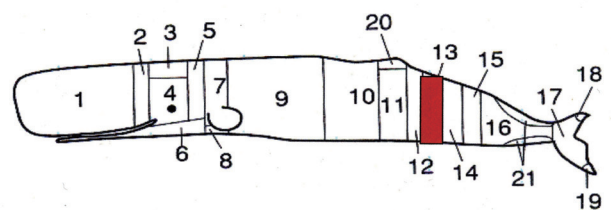


図3 分配部位

ことが想定される。

2015年にラマレラ村の山側を通る新たな道路が開通した。将来的には島南岸縦貫道路の建設が予定されている。ウランドニ市場の閉鎖に伴い、ラマレラ村の郊外に物々交換市場が開設されたが、暫定的な市場として数年間継続してウランドニ市場再開となるのか、あるいは新たな市場の歴史となるかは、今後の政府ならびに地域住民との協議が重要になる。

2016年は11月に海事資源調整省による「クジラセミナー」がレンバタ島の県都で開催され、政府の観光振興の対象にクジラ資源が注目されていることが明確になる。

2017年は1月17日村内にNTT銀行の預金融資部門が開業した。

6月15日にはNTT州観光庁が州都でワークショップを開催し、2018年から自然保護団体The Nature Conservancyと協力して州観光振興一環としてホエールウォッチング観光を開発すると発表した。

8月にはA村においてラマレラ歴史上初となる井戸掘削が成功し、恒常的な生活水の供給が可能となる予定が立った。引き続きB村での井戸掘削が開始され、長年の給水苦から解放される新たな歴史の始まりである。同時に、観光客受け入れのネックとされていた水問題の解決は観光市場を拡大させることにもなる。

7-2. 捕鯨と漁の変遷

漁法に変化の兆しが見られたのは、やはり2000年頃からである。1999年末から2000年初めの休漁期に、船外機搭載の動力船3隻が突取式による《動力船鉆漁》でゴンドウクジラ47頭を捕獲する豊漁となった。これが契機となり、1996年以来6隻だった動力船が1999年以降には次々と新造され、2017年では30隻を数えている。以下捕鯨と漁の変遷を年ごとに見てきたい。

2001年 - 動力船参加式プレダン捕鯨の導入

動力船の増加が捕鯨法にも画期的な変化を見せた。動力船の捕鯨への参加である。2001年4月29日のラマレラ慣習協議「トブ・ナマ・ファタ」(tobu nama fata)で“クジラを捕獲したプレダンを動力船が曳航して帰航した場合には、捕獲した部位のうち、「キレ」(kile)と呼ばれる胴部の一部(図3)を動力船の船主、乗組員に分配されること”が決定し、プレダン捕鯨への参加が正式に承認された(写真20)。これは、マッコウクジラを確認すると動力船はプレダンを曳航してクジラを追い、捕獲後もプレダンを曳航して帰るという方法で、私たちは《動力船参加式プレダン捕鯨》と呼称する(写真21)。動力船ではマッコウクジラ捕鯨はできない。転覆

時の船外機破損・紛失の危険性などが捕鯨に使用できない理由であるが、重大なことはラマレラ村の捕鯨慣習法に違反することである。

21世紀に入った2001年は動力化へ移行した年、また捕鯨に動力船参加が正式に承認されたラマレラ捕鯨史における画期年、「動力船元年」である。動力船が捕鯨に参加することで捕獲確率が高くなったためか、1月から6月まで9回の捕獲機会に16頭のクジラが捕獲された。1回の捕獲機会に複数のクジラを捕獲する可能性が増したこともあり、この年は35頭の豊漁になった。

2002年 - 動力プレダンの導入

翌2002年5月8日ラマレラ捕鯨史上画期的な出来事があった。プレダンの船尾に着脱式木杵を装着して船外機の搭載を可能としたプレダンの考案、すなわち《動力プレダン》の出現である(写真22)。プレダンJava Tenã号は船尾の木杵に15馬力の船外機を搭載して出漁し、浮上したクジラにいち早く追いつき、船外機を外して動力船に移したのちマッコウクジラを捕獲した。クジラ捕獲は28頭で豊漁になったが、これ以降、プレダンと動力船の2隻を所有するグループが2隻でペアを組んで捕鯨することにより、捕獲頭数に明らかな差が生じた。

2003年 - 動力プレダンの優位

2003年になって、Java Tenã号、Muko Tenã号そして新たに動力化したManula Beloloの3隻で全18頭のうち半数以上の10頭を捕獲し、独占状態に近いことが見て取れる。手漕ぎプレダンでの捕獲機会が極端に限定され、動力船の造船が加速されていく。また、漁期に捕獲頭数4頭と漁期にクジラが獲れない傾向が現れる。

2004年 - 動力船鉆漁の普及

2004年にはラマレラ捕鯨船史上初となる船外機搭載用の固定式木杵「スピ」(sepi)を備えたプレダンDemo Sapãが稼働している。動力船は7隻が新造され、船体総数はプレダンの20隻を上回る21隻に増加した。プレダンの捕鯨グループでは、プレダンと専属の動力船の2隻を所有するスタイルが普及してくる。

動力船鉆漁が普及してプレダンの出漁が激減した年で、プレダンは5月の数週で毎日の出漁を取りやめている。漁期にクジラが回遊してこない傾向が続く5月に3頭獲れただけで漁期は終了し、年間クジラ捕獲は14頭で不漁になった。この年はプレダン鉆漁から動力船鉆漁へ転換した年として、2001年について重要な年として記録される。

2005・2006年 - 歴史的な不漁

2005年はマッコウクジラの年間捕獲頭数わずか5頭という凶漁に見舞われた。そのほかに動力船鉆漁でシャ

子を3頭捕獲し、7月12日には動力船4隻で史上初となるザトウクジラを捕獲した。動力船は1隻が新造された。

2006年は1989年以来の深刻な凶漁年となった。1月から3月までの休漁期に4頭捕獲されただけ終わってしまう。4年間連続して漁期にクジラが回遊してこない異常な事態であり、捕鯨法の転換からの確立へ向かう移行期に起きた不漁時期である。動力船は2隻が新造された。

2007年 - 動力船参加式ブレダン捕鯨の普及と歴史的豊漁

2007年は前年まで2年続きの不漁による苦難から、カトリック教会神父に許可を得て、初めて日曜日操業を敢行して捕獲が実現した。漁明けの5月2日には、体長18メートルで頭部の白い白鯨、ラマレラ捕鯨史上最大の雄鯨を捕獲し、これ以降年間捕獲数は43頭という36年ぶりの歴史的な豊漁年となった(写真24, 25)。動力船は2隻が解体されて消滅した。

2008年 - バレオ捕鯨に移行

2008年は一度に複数のクジラがとれて34頭の豊漁になった。新たな傾向として、毎日の漁は動力船鉆漁に従事してブレダンは稼働させず、クジラを目視したときに出漁して捕鯨する《バレオ捕鯨》に移行してきた。稼働しているブレダンは約半数の8隻が船外機搭載可能な船体となった。動力船は3隻が新造された。

2009年 - 動力船流し網漁の導入

漁期に入る直前の4月に動力船 Roni 号と Kopo Lere 号によって大型の網が本格的に導入されて漁獲効率の大幅な向上が見られた。夜間網漁の技術革新が顕著になり、混獲による新たな漁獲資源も加わり、捕鯨・鉆漁と網漁の併存する新たな時代を迎えた。夜間操業の《動力船流し網漁》を主体として、昼は浜で網具の手入れや補修をしながら、クジラ目視してから出漁する《バレオ捕鯨》へと大きく変容する可能性が考えられる。ベテランのラマファ4人が引退して世代交代がすすんだ。動力船は2隻が新造され、船体は27隻を数える。マッコウクジラは5頭捕獲したのみで凶漁であった。

2010年 - バレオ捕鯨による多頭数捕獲

8回の捕獲機会に22頭のマッコウクジラを捕獲しているが、そのうち8月の僅か1週間で13頭という極端な偏りは、マッコウクジラ捕鯨の不確実さと難しさを象徴している。すでに動力船参加式のバレオ捕鯨が主流になり、少ない捕獲機会に多頭数捕獲という傾向が表れている。動力船網漁が本格化して、その動向しだいでは捕鯨文化の変化が加速されることが予測された。また、携帯電話の普及により、捕鯨の電話連絡を受けた山民が

直接村にクジラ肉を買い付けに来るようになった。

2011年 - ブレダンの鉆漁は衰退

5月に4隻が数日間操業したのみでブレダン鉆漁をおえてしまい、明らかな衰退がみられるようになった。いっぽうで5月から動力船網漁が普及し、5月から操業を開始して漁獲量が大幅に増加した。クジラ捕獲は14頭で不漁になった。

2012年 - 2月捕鯨で死亡事故

慣習協議で5月から7月までは鉆漁のみ、8月から動力船網漁が解禁して10月までで漁期が終了することが新たに決定した。2009年から昨年までの3年間は動力船網漁による漁獲高が増えすぎ、伝統漁である鉆漁が衰退してしまうことを危惧しての自主規制である。2月に1頭のクジラが捕獲されたが、捕鯨時にクジラの尾ヒレでの打撃による負傷が原因で若い鉆手が命を落としている。同様の事故による死者は1972年以来40年ぶりであり、記録の残る20世紀以降の捕鯨史で4人目という希有な事故である。死亡事故で操業が減ったことも影響してマッコウクジラは年間3頭という極端な凶漁の年となった。動力船1隻が解体され1隻が新造された。

2013年 - 捕鯨で脚切断事故・動力船消失事故

2月にクジラ4頭の捕獲があったが、漁師が足を鉆網に絡ませて負傷し、病院で足首を切断するという事故が起こった。8月にはシャチの捕獲で遭難事故が発生している。動力船1隻がシャチ9頭の群れに遭遇して1頭を捕獲した。その後1隻のみが夕方まで追尾し、捕獲機会を得て鉆を打ち込んだがシャチに曳かれて転覆した。漁師12名は海に投げ出され、動力船はシャチに曳かれたまま遠方に消え去った。僚船がいなかったため遭難した漁師は、日没時から夜間まで3-4時間かけて泳いで上陸し、全員無事に帰還した。動力船はその後の捜索にも関わらず消失した。船の遭難消失事故は1994年に起き、2隻のブレダンを失って以来の重大な事件である。前年の捕鯨時の死亡事故と本年の重傷事故について操業事故が2年連続し、捕鯨のみならず鉆漁の危険性とブレダン捕鯨技術の継承問題が再認識され、今後の大きな課題と考えられる。捕鯨事故には様々な要因があるが、若者が動力船漁を選択してブレダンでの漁に参加する機会が激減し、継承されてきた捕鯨技術や操船術の衰退が懸念される。クジラ捕獲は18頭であった。

2014年 - クジラが多頭数捕獲

ブレダンによる鉆漁は衰退し、操業日34日延べ82隻の操業で漁獲数はイトマキエイ類20匹に過ぎない。いっぽうで、動力船鉆漁はブレダンのようには気象や



図4 ウランドニ

海象に左右されないため操業期間が長く、5月～9月・12月～4月まで稼働し、小型鯨類は173頭、うちコビレゴンドウは39頭を捕獲している。網漁は8月解禁で11月初めまで操業して、ほぼ通年操業が普及してきた。

クジラ捕獲は5月から9月の漁期に、10回の捕鯨機会に28頭を捕獲し、そのうちの6回は1回の捕鯨機会に3頭以上を捕獲する多頭数捕獲であった。将来的にこのような捕鯨が特徴になると予測される。クジラ捕獲は31頭と6年ぶりの豊漁となった(写真27)。

2015年 - 動力船鉆漁と網漁による通年操業の確立

年間操業サイクルの変化としては、網漁が8月から11月末まで操業するようになった。従来の休漁期である12月から翌4月までも動力船鉆漁で操業している。動力船鉆漁では1月から3月の雨季にかけてコビレゴンドウが54頭の豊漁になり、4月末にはシャチが1日に4頭捕獲された。動力船は3隻が新造され、動力船鉆漁はさらに活況を呈しており、操業の長期化に加えて操業時間も早朝7時から16時までと長くなり、プレダン曳航の役割で捕鯨参加がすでに捕鯨法として確立されたことを含め、動力船鉆漁はラマレラ鉆漁の主流となっている。クジラ捕獲は7頭で凶漁になった。

2016年 - 漁期のプレダン鉆漁操業はなし

5月のプレダンによる漁は1隻が4日間、6月も2隻が2日間操業したのみで、ほぼ操業なしの状況であった。動力船鉆漁は1月から3月にコビレゴンドウが55頭と、ここ数年は雨季のゴンドウ漁は安定した漁獲がある。昨年に続き漁期前の3月末にシャチが1日に4頭捕獲された。動力船網漁は8月から10月末まで操業を終えている。クジラ捕獲は12頭で昨年に続き不漁となった。

2017年 - 漁期のプレダン鉆漁が復活

動力船鉆漁は1月から4月にコビレゴンドウが27頭と少ない漁獲となった。

5月からの漁期におけるプレダン鉆漁は、村民慣習協

議において2カ月は積極的に操業することが合意されて復活した。5月と6月には7～9隻がほぼ毎日操業した。マッコウクジラは漁期に回遊があり、5月に3回で9頭、6月に1回で5頭、7月に1回で5頭、計19頭を捕獲し、うち3回の多頭数捕獲で15頭捕獲している。

8. ウランドニ市場閉鎖事件

8-1. 概要

最後に、2014年8月16日の土曜日、くしくもクジラが5頭獲れた日を最後に閉鎖されてしまったウランドニ市場について述べたい。市場閉鎖は《ラマレラ捕鯨文化》にとって歴史的な事件といえるからである。

物々交換市が開かれるウランドニは、市場という意味のウラン(Wulan)と、ドニ・ヌサレラ(Doni Nusalela)とよばれる海岸の地名とを組み合わせるウランドニと呼ばれる。海辺のこの土地がラマレラと山民との物々交換の場として初めに開かれた伝統的な場所であり、市は400年以上の歴史を持つ。ラマレラ村民がクジラ肉を山民の産物と物々交換するための最も重要な伝統市であり、山民にとっても最も重要な場所となっている。

ラマレラ村の女性たちが物々交換を行う伝統市は、ウランドニの土曜市、そしてもう一つの定期市であるレバラの水曜市である(図4)。ラマレラからウランドニまで約6キロ、そこからレバラまでは約5キロの距離にある。ウランドニはラマレラとの関係で開かれた市の場であり、いっぽうのレバラはラマレラが歴史に登場する頃からすでに島の南岸で交易地として栄えていた南岸唯一のムスリム村である。島の南部地域はほぼカトリック教徒であるが、レバラでも物々交換市が開かれていることから明らかなように両者の関係は良好である(写真26)。市場閉鎖事件を述べる前に、ウランドニ市の重要性を物語るその伝承を見てみたい。

8-2. ウランドニの伝承

ドニ・ヌサレラ、のちのウランドニはラマレラの移住伝承に登場する。ラマレラ移住伝承は15～16世紀に始まり、スラウェシを出発したラマレラの祖先が、セラム島を経由し、レンバタ島にはじめて上陸するのがレバラであり、次の寄港地が市発祥の地ドニ・ヌサレラである。以下のような伝承が語られている。

「ラマレラの祖先はレバラを退去させられた後、今、市が開かれている海岸、ドニ・ヌサレラに立ち寄った。ここにはほとんどひとが居住していなかったため、彼らはそこに移り住んだ。その当時、ドニ・ヌサレラから少し離れた山間にあるヌアレラ(Nualera)村が、この地

域を支配していた。その長は友好的に彼らを迎え、食糧を分け与えた。そして、ラマレラの祖先は彼らが持つ技術とヌアレラの持つ政治権力を交換しようと提案した。彼らは、その村の近くに土器に適した土を見つけ、ヌアレラのひとに土器の作り方を教えた。その代わりにヌアレラのひとは鉄の鍛え方を彼らに教えた。その当時、ラマレラの祖先は銚を所有していたが、鉄製ではなく、スオウの木で作られた木製の銚を使用していた」

伝承には土器作りと鍛冶の技術の交換の話が登場するが、土器作りに関しては、その後ヌアレラ村が独占することになり、現在もレンバタ島での唯一の生産地となっている。銚を作る鍛冶の技術もラマレラの男性だけの特殊なものである。

この地での重要な出来事は、レバラ到着まで権力を持っていたタナクロファという氏族が失脚し、コロハマ氏族が指導権を奪ったことである。タナクロファはレバラ村で災いを起こし、レバラを追い出される原因をつくった。そのためタナクロファは権力をコロハマに譲り渡した。コロハマはドニ・ヌサレラに着くまで、自分の氏族の名前を明らかにしなかった。そこで、ヌアレラの長は「対等の地位」という意味をもつコロハマという氏族の名前を彼に与えた。

さらに、当時のこの周辺はフローレス島のララントウカの王の支配下にあり、ララントウカの王はこの地域をヌアレラの長に支配させていた。この時、ヌアレラの長はこの支配の権利もコロハマに移譲した。氏族名の呼称や領土の支配権の移譲、土器や鍛冶の製作技術の授受の交換がラマレラとヌアレラとの交換の始まりであるといわれている。しかし、なぜ領土の支配権の移譲までおこなわれたかは分からない。このコロハマたちが後にラマレラの地に移り住み、今のラマレラを築いたという村の起源伝承が歴史として語られている。

8-3. ウラントニ市の起源伝承

この伝承当時、まだウラントニの市場は開かれていない。ラマレラに残る市場開設起源伝承はまた別に存在し、その伝承は次のようである。

「ある日、ダトという名の男が指導者になり、ダトテナ号に乗り漁に出た。たまたまマッコウクジラに銚を打ち込み、それに曳かれてレンバク島の東にあるパンター島島の海岸まで流されていった。彼らは、その島のドウリの浜でクジラを捌き、一か月も留まり、市場を開いた。いまでもあるダト・バジェの市場は、この時から始まった。その頃、ラマレラでは彼らが死んだものと思ひ、オウム貝を死体に見立てて、海岸に埋葬した。その後、ダトと乗組員はダトテナ号に乗り、無事ドニ・ヌサレラま

でたどり着いた。もともと、ヌアレラ村のひととは友好関係にあったので、彼らは水をもらいに村に上がったが、誰も出てこない。村びとも彼らが死んだものと思っていたからだ。彼らはクジラの皮を持っていき、自分たちが本当に生きているのだと証明した。そして、村で彼らは自分たちがいない間に、ラマレラで起こったことを聞いた。

浜にいた一週間の間、山から下りてきたレウカ村のひとたちが彼らに食べ物を与えてくれた。お礼にクジラ肉を分け、ここで市を開くことを決めた。この交換が、今のウラントニの市の起源である。ダトはまた、ラマレラにもサカナを送り、自分と仲間は生きていて、ドニ・ヌサレラで待っていると伝えた。ラマレラの長老は葬儀を取り消す儀礼をおこない、はじめてダトたちは村に帰ることができた。この儀礼をせずに、彼らがラマレラに帰っていたら、彼らは死者の魂のように見なされ、取り扱われただろう」

この伝承は、今でも、新造船の儀礼の中に現れている。漁期前の4月に新造船の船おろし儀礼がおこなわれるが、そこでは必ず、クジラ肉、魚、塩をプレダンに積み、ウラントニまで航行していく。海岸には山から農作物を持ってきた山の民が待っている。そこで、サカナと農作物を交換し、プレダンはラマレラの浜へ戻っていく。ウラントニはこの起源伝承時から現在まで伝統市場として継続して使用されつづけた場所である。

8-4. 市場閉鎖の経緯

ラマレラと山民にとって重要な市のひらかれる、ウラントニ市場閉鎖に至る事件のあらまは以下のようなものである。ウラントニ郡は2003年に発足し、ラマレラA・B村も含む15村からなる。行政府がウラントニ村(693人, 6.91km²)に置かれ、村には廃村になった旧ヌアレラ村の人々が移転して居住し、ウラントニ市場は従来の場所で機能している。また、隣村パンタイハラパン(Pantaiharapan)村は零細漁民の旧ルキ(Luki)村が、郡発足で改名・改変され、新たな移住者により人口が増加し、島の南岸有数のムスリム漁村(787人, 9.43km²)に発展している。

以前より両村の境界問題があり、地方政府公共工事による境界標の設置が行われる。政府の地割と伝統的所有地との齟齬から諍いが続いていたが、防波堤工事が開始されてウラントニ市場周辺まで工事が進行した時点で紛争に発展し、8月17日独立記念日にウラントニ村の男性がパンタイハラパン村民に殺害される事件が起きた。郡公共施設の襲撃事件も発生して、生命の危険を感じたウラントニ村民は近隣の村に避難を余儀なくされた。こ

の事件により、翌土曜日のウランドニ市場の開催は中止となり、事実上市場は閉鎖された。

この事件当時私たちはラマレラ村に滞在しており、江上は事件の発端になった争いに遭遇している。江上は事件が起きた前日の8月16日、つまり市開催の最後になった土曜日にバスに乗って調査と買物のため市に向いた。午前11時頃、ウランドニとパンタイハラパンの若者が市場近くで小競り合いを起し、参加していたラマレラ女性たちは恐怖を覚えて急遽バスで引き返した。翌日曜日には、紛争からウランドニ側の一人が犠牲になり死亡し、その後、郡庁舎や教会、商店への投石などがあり、ウランドニ村民はラマレラ村を含めた近隣村の親族の家やカトリック教会・学校に避難した。

境界線を巡る争いが発端ではあるが、カトリック村とイスラム村との争いの様相を呈していた。他の島よりムスリム勢力が夜襲をかけるとの風評が広まり、特にウランドニ郡書記と村長がラマレラ出身者であることから村にも緊張が走り、男たちは山刀を手に徹夜で警備にあたった(写真28)。夜が明けてクジラの頭部解体の日には警察機動隊中隊100名が派遣され、数日間村の警備をした(写真29)。

ラマレラ村民と山民は事件の恐怖心から、土曜日の市開催日になってもウランドニ市へ行く者はいなく、物々交換市場は事実上閉鎖されてしまった。

8-5. 交換市のその後

2015年になってからはラマレラ村の東端に場所を移し、金曜日に変更され物々交換市が開催されている。道端の空き地を利用して、市場として整備はされていないが、物々交換というシステムは今まで通り継続している。日用品を扱う商人もトラックに商品を積載してレウォレバ町から来ているが、山民の参加者は限られていて明らかに規模は縮小されている(写真30)。

2017年現在、ラマレラの金曜日市は次第に規模が拡大し、かなりの賑わいを見せている。

しかしながらその賑わいは、かつてのウランドニ交換市とは趣を異にしている。どの地方でも一般的に見かける市場のように、町からの商人が大量の生活必需品や衣料品あるいは食料品を販売する店の割合が多くを占めている。物々交換は市場の一角で行われているが、農産物を持ち寄る山の民はクジラ肉などの物々交換ではなく、金銭で販売することを望む者が増えてきている。次第にクジラ肉だけでは食料が手に入り難くなり、現金収入の道を探す必要がすべての人にとっての課題となってきている。

将来的には、ウランドニ市が再開するのか、ウランド

ニ市が消滅してその歴史を閉じ、ラマレラ市が市場として整備されて恒久的に機能するのか、あるいはウランドニとラマレラの二箇所市が立つようになるのかは不透明である。私たちとしては平和解決してウランドニ市場が再開し、歴史のある元通りの交換市が継続できるように望んでいる。ラマレラをはじめ周辺地域の村々、すなわち《ラマレラ捕鯨文化》圏に属する人たちも、各々が対立せずに認め合い多様な人々が集まる調和のとれた交換市の復活を願っている。

おわりに

本稿ではインドネシアが新体制に代わった1999年から19年間の出来事を述べたが、私たちが最初に訪れた1993年から1998年までの6年間は、村では目立った変化がなかったように思う。1995年にようやく自動車が入ってきたことが「大事件」だったように、それ以前と同様の道路、電気、化石燃料、水道、電話などの時代が続いていた。不便で質素ではあるが、平和で平等な調和のとれた社会として完結していると感じた。21世紀になってからは、2002年の路線開通、2005年の電力供給、2007年の通信網といったインフラ整備がなされた。ことに2013年に村に通信基地局が開通してから通信の普及は目覚ましく、わずか数年の間にほぼすべての村人が携帯電話を所有し、SNSを利用するようになった。クジラの出現情報も漁に出た舟から直接連絡が入る時代になったのである。

漁では2009年の動力船網漁の導入、社会では2014年の伝統市場の閉鎖、2015年のラマレラ金曜日市の開始、2017年の井戸掘削による水源確保といった歴史を変える出来事がこの数年で起きているように、変化の可速度は増している。

ラマレラは20世紀末まで貨幣経済が浸透せず、人々はマッコウクジラという巨大な産物を得て、物々交換経済で暮らしてきた。村内交換での扶助システムにより各人にクジラ肉が行きわたり、それを原始貨幣として利用する社会が作り上げられていた。そのため、極端な格差社会が構築されなかったと考えられる。イトマキエイやイルカなどとは違い、マッコウクジラだけが村民全員に供給することができる資源である。

21世紀に入り盛んになった動力船による漁法は燃料費として現金確保が必須である。インフラの整備とともに情報のグローバル化が進み、それに伴って政府の振興策である観光産業がこれからのラマレラの有望産業になる可能すら否定できない(写真31)。

観光産業は貨幣経済を押し進める要因であり、現金収

入が一部の人間たちに集中することで経済格差が広がる可能性も考えられるだろう。観光化がもたらす村の変化は、あるいは以前とは比較できないほど劇的なものであるかもしれない。

しかしながら村はマッコウクジラを獲ることを止めることはないだろう。2007年に獲れた一頭の巨大な白鯨が、不漁による食糧難に2年間苦しんだ村の救世主になったように、クジラ一頭獲れることで村人全員が生きていけることを誰もが知っている(写真32)。ラマレラ社会が400年もの長きにわたり安定して継続してきた大きな要因は、クジラを獲り続けて分かち合ってきたからであり、その意味でマッコウクジラは資源であるだけでなく平等で公平な社会を象徴する生き物でもある。

四半世紀のラマレラ社会の変化と捕鯨の歴史を研究してきて、ラマレラ共同体にとって生存の根幹である山の民との共生関係を継続させるためにクジラを獲りつづけ、将来において変容を経ながらもラマレラ捕鯨とその文化が消滅することはないと確信している。

参考文献

Barnes, R. H.

1996 "Sea Hunters of Indonesia. Fishers and Weavers of Lamalera" Clarendon Press・Oxford

BPS: Badan Pusat Statistik Kabupaten LEMBATA

2009 "Lembata Dalam Angka 2009" Badan Pusat Statistik Kabupaten LEMBATA

"Wulandoni Dalam Angka 2009" Badan Pusat Statistik Kabupaten LEMBATA

2014 "Lembata Dalam Angka 2014" Badan Pusat Statistik Kabupaten LEMBATA

"Wulandoni Dalam Angka 2014" Badan Pusat Statistik Kabupaten LEMBATA

Egami Tomoko & Koutaro Kojima

2013 "Traditional Whaling Culture and Social Change in Lamalera, Indonesia: An Analysis of the Catch Record of Whaling 1994-2010" Anthropological Studies of Whaling Edited by Nobuhiro Kishigami, Hisashi Hamaguchi and James M. Savelle. SENRI ETHNOLOGICAL STUDIES 60: 155-176

江上幹幸

2000a 「インドネシア、ラマレラ村における生存捕鯨—その食文化と流通—」『社会文化研究』12(1): 91-123 沖縄国際大学

2000b 「インドネシア、ラマレラ村の経済システム—物々交換による共生社会—」『高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化』下: 325-341 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会

2004 「ラマレラ研究ノート—銛についての考察(1)」、東南アジア考古学事務局『東南アジア考古学研究報告 第2号 島嶼地域の諸相』: 45-62 鹿児島大学法文学部人文学科 比較考古研究室内

2007 「インドネシア・ラマレラ村の捕鯨と近代化」『文化遺産の世界』24号: 14-17 国際航業株式会社文化事業部

2014 「インドネシア、ラマレラのクジラをめぐる交換経済と食文化」池口明子・佐藤廉也編著『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第3巻 身体と生存の文化生態』: 83-113 海青社
江上幹幸・小島曠太郎

2010 「インドネシア、ラマレラ村 16年間の捕鯨記録と分析(Ⅰ) — 1994 ~ 2009 —」『社会文化研究』12(1): 1-32 沖縄国際大学 社会文化学会

2011 「インドネシア、ラマレラ村 16年間の捕鯨記録と分析(Ⅱ) — 2010年の捕獲記録と将来の展望 —」『社会文化研究』12(2): 65-94 沖縄国際大学 社会文化学会

2012 「インドネシア・ラマレラの伝統捕鯨文化と社会変化」岸上信啓編著『捕鯨の文化人類学』: 102-121 成山堂書店

2014 「インドネシア、ラマレラ捕鯨と漁の現在 — 2010年 ~ 2013年漁獲統計と分析」『総合学術研究紀要』17(2): 1-74 沖縄国際大学 総合学術学会

2016 「インドネシア、ラマレラ捕鯨と村の歴史 — 1994 ~ 2015 —」『インドネシアニューズレター』91: 55-86 日本インドネシア NGO ネットワーク (JANNI)

小島曠太郎・江上幹幸

1997 『クジラと少年の海』理論社

1999 『クジラと生きる』中公新書

小島曠太郎・えがみともこ

2001 『クジラがとれた日』ポプラ社

2002 『クジラがくれた力』ポプラ社

2004 『クジラにいどむ船』ポプラ社

写真1

ラマレラ B 村と船小屋の並ぶ浜



写真2

海明けのミサなどが行われる浜の礼拝所



写真3

木造帆船プレダンと鋸手（ラマファ）





写真4

週一回開催される物々交換市場



写真5

クジラ肉などを山村で物々交換する行商（プネタン）



写真6

行商（プネタン）で山道を歩く

写真7

物々交換における基準単位（モガ）



写真8

プレダン捕鯨—マッコウクジラ
に近づくプレダン



写真9

プレダン捕鯨—マッコウクジラ
に鉾を打つラマファ





写真 10

プレダン銛漁—イトマキエイに
銛を打つラマファ



写真 11

動力船銛漁—イルカなどの小型
鯨類を漁獲



写真 12

動力船銛漁—主要漁獲対象のイ
トマキエイ類

写真 13

動力船網漁—2-3人で操業する
夜間の流し網漁



写真 14

小舟網漁—トビウオなどを対象
とした昼間流し網漁



写真 15

A村とB村を繋ぐ伝統的な階段
「グリペ」の崩壊





写真 16

動力船銛漁—船外機を搭載して
少人数で出漁



写真 17

頭上運搬で山道を歩く行商は姿
を消した



写真 18

未明にトラックバスに乗り山村
へ行商し帰路も車を利用する

写真 19

通信基地局タワーが完成して情報化社会へ



写真 20

慣習協議「トブ・ナマ・ファタ」で動力船の捕鯨参加が正式承認



写真 21

動力船でプレダンを曳航する「動力船参加式プレダン捕鯨」





写真 22

船外機を搭載した動力プレダンの初漁



写真 23

道路が開通してトラックバスが村に入る



写真 24

浜に横たわるラマレラ捕鯨史上最大の巨大な白鯨

写真 25

白鯨の下顎に並んだ 48 本の歯



写真 26

ウランドニ市場最後の開催光景で、以後現在まで閉鎖



写真 27

捕鯨一回での多頭数捕獲が増加して 5 頭のクジラが浜に並ぶ





写真 28

男性たちは山刀を手に徹夜で村の警備にあたった



写真 29

警察機動隊中隊 100 名が村とウランドニ村を警備する



写真 30

ラマレラ村入口の道端を利用して物々交換市場を開催

写真 31

国内外旅行者が増え、ことに国外の団体観光客が増加している



写真 32

マッコウクジラー頭で村人すべてが食べていける



写真 33

巨大なクジラが獲れた日は村が一番幸せな日である



シップソンパンナーにおける伝統的土器製作の類型と移転

－ ミャンマー東部と中国雲南省、タイ北部の関係をめぐって －

徳澤 啓一*・秦 竹軒**・持田 直人**

1. はじめに

中国雲南省西双版纳傣族自治州（以下「西双版纳州」と略記する・第1図）では、『百夷伝』において「百夷人は土器を多用する」と記されているとおり、多くの伝統的土器製作（以下「土器製作」と略記する）が遺されていたもの（張 1959 など）、改革開放政策が進展することによって、ほとんどの村寨で土器製作が停止されてしまったという。

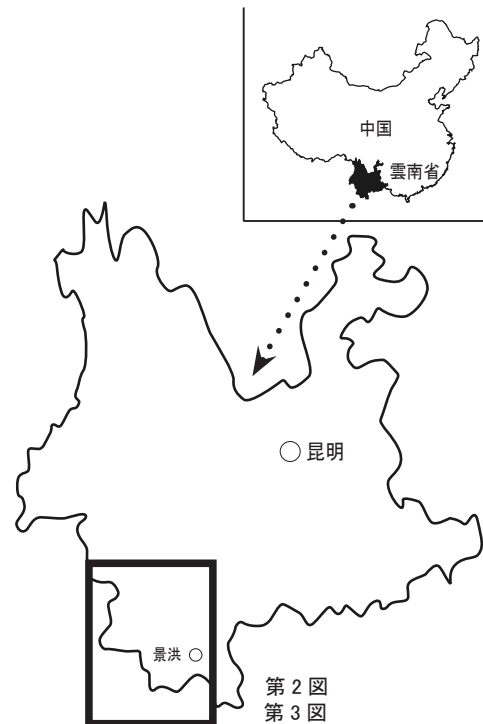
実際、2006年及び2007年、筆者は、景洪市近郊の曼斗寨及び曼閣寨、勐海県の曼扎寨及び曼朗寨の4カ村の現地調査を実施したものの（徳澤ほか 2006・2007、徳澤 2008）、西双版纳州では、これらの村寨を除いて、土器製作を停止した状態になっていた。

すなわち、1950年を遡って、シップソンパンナー時代の傣族の土器製作を明らかにするためには、主として、中華人民共和国の編入以降、中国人研究者が記載してきた現地調査の記録を紐解くことが不可欠となる。

ここでは、『考古学報』第2期（2003年）に掲載されている汪寧生著「雲南傣族制陶的民族考古学研究（雲南省における傣族の土器製作に関する民族考古学研究）」をもとに、シップソンパンナーにおける土器製作の内容と隣接するミャンマー東部やタイ北部の土器製作との関係を見通すことにしたい。

2. 土器製作の類型に関する汪論文の記載

汪論文を読解すると、前半は、シップソンパンナーにおける土器製作を4つに分類し、それぞれの類型に関して、素地製作、成形、乾燥、焼成等の製作技術を整理し、同一類型の村寨間の比較研究を行っている。後半は、シップソンパンナーにおける民族誌を引き合いに出しながら、製作技術及び生産様式に関する考古学的事象の解釈に繋がる民族誌的生態を導き出している。

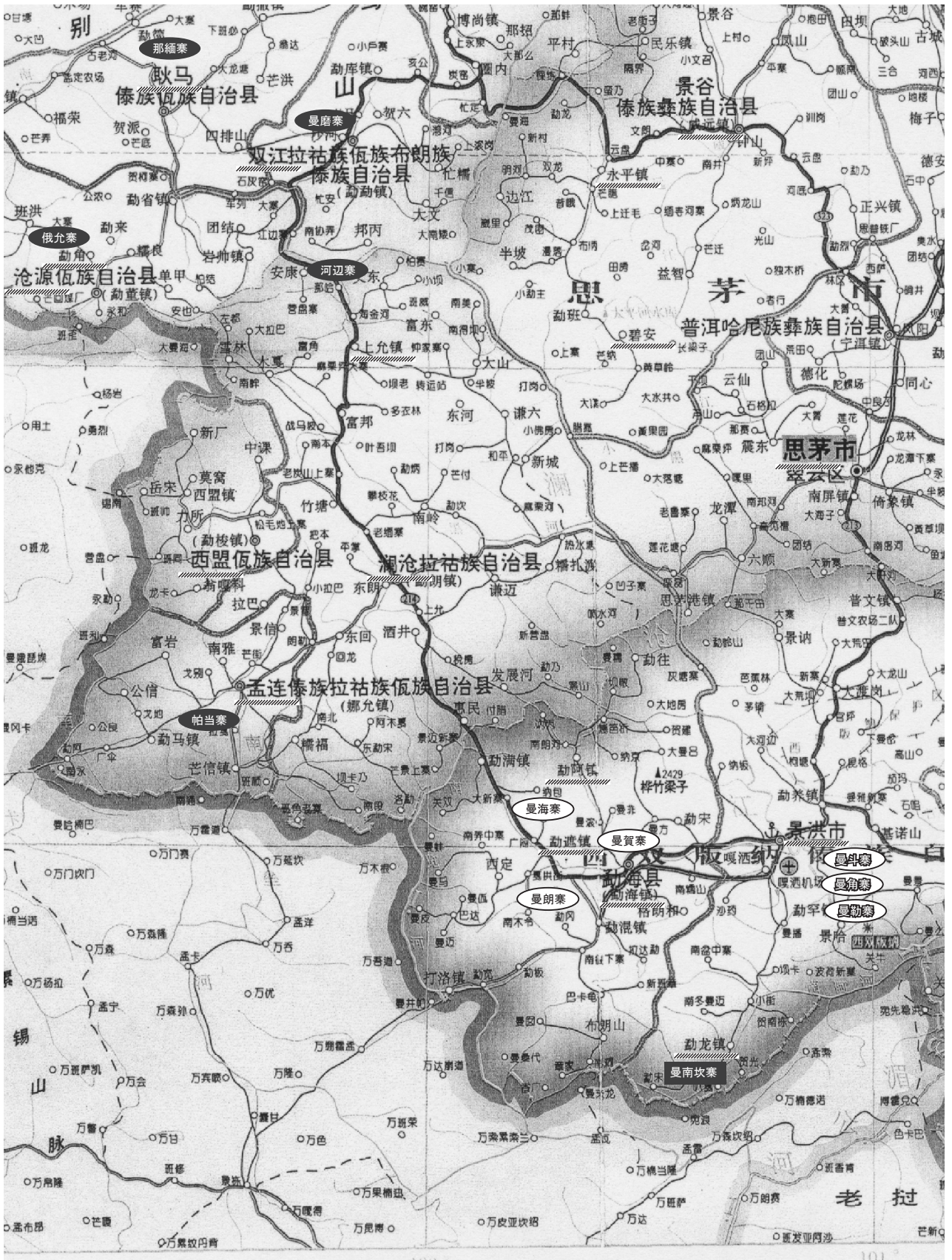


第1図 伝統的土器製作の村寨の位置
（徳澤・熊代 2011 抜粋一部改変）

また、汪によれば、雲南省の傣族に関して、1980年代初頭まで、少なくとも、30村寨で伝統的な土器製作を保持してきたという。このうち、汪は、1960年代から1980年代にかけて、12村寨を数回にわたって調査した。これらの村寨は、景洪県の曼勒寨（1964年5～6月、1965年4月）、曼徳寨（1965年4月、1982年2月）、曼角寨（1965年4月、1982年2月）、大勐龍の曼南坎寨（1982年2月）、勐海県の曼賀寨（1982年2月）、勐遮の曼海寨（1982年2月）、曼朗寨（1982年2月）、滄源県勐角の俄允寨（1965年1～2月から1982年2月まで）、双江県の曼磨寨（1982年1月）、耿馬県的那緬寨（1978年8月、1982年2月）、勐連

* 岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

** 岡山理科大学大学院総合情報研究科社会情報専攻修士課程在学中



第3图 西双版纳傣族自治州周边地域における傣族土器製作の分布 (1/2,000,000)

* 第3图は第2图の範囲に相当する。斜線/////は第2图と一致する地名。

(中華人民共和国省級行政单位系列图雲南省地图 中国地图出版社編 抜粋一部改編)

～40cm、高さ15cmであり、傣族の製作器種のうち、唯一の3つの脚をもつ器種である。昔の雲南省でも三足器は見られない。

2-1-5. 成形

丸底の甕の成形を例にとる。女性は、手練りした素地と製作道具を用意し、小さい椅子に腰かけて、棧板を膝の上に置く。棧板の上で手練りした球状の素地を円盤状になるまでタタキ、底部円盤とする。胴部の成形は、粘土紐積み上げ技法を用いる。泥条盤築法「粘土紐輪積み技法」は、主として、泥圈相接「粘土紐輪積み技法」[粘土紐を輪繋ぎし、1輪ずつ積み上げる技法]と長条盤旋「粘土紐巻き上げ技法」[長い粘土紐の巻き上げる技法]がある。曼賀寨では、後者の技法を用いる。1周目は、紐状に素地を揉み出し、右手で粘土紐をもち、左手で棧板を時計回りに回転させながら、粘土紐を底部円盤に押し付ける。同じ技法で、2周目を巻き上げ、2本目の粘土紐を内面側から斜めに繋げる。2、3周すると、円筒形状の原型が立ち上がる。最終周（成形体の口縁部に該当する）は、通常、厚みをもたせるために、もう1本の粘土紐を裏打ちする。原型が立ち上がると、左手で棧板を回転させ、右手で木篋を用いて器面を平滑に調整し、手指又は木篋で内面の巻き上げ痕を掻き消し、粘土紐間の結合を強める。濡れ布で口縁部をナゲ挽くことで、口縁部を平滑に成形し、原型を作出する。これを棧板に載せたまま1～2時間乾燥させ、半乾燥の状態で成形台に戻す。女性は、左手に当て具をもち、右手の叩き板でタタキながら、反時計回りで成形台を周回する。まず、無文の叩き板でタタキ、次に、胴部を締めるために横線文の叩き板でタタキを施す。口縁部は、長方形の木篋で軽くタタキを施す。さらに、胴部を膨らませるために、半円形の木篋で胴部の内側から押し出す。最後、平底を丸底にするため、膝の間に原型を挟んでタタキを施す。

焙烙の成形は、上記と同じであり、用いる粘土紐の数が少なく、皿形の体部に3本の太めの粘土紐を貼り付け、脚とするだけの違いである。

成形体ができると、日干しで乾燥、あるいは、軒下又は“干欄式「高床式」”家屋の1階で陰干しする。曇天又は雨天で急いで成形する場合、竹で組んだ棚の上に成形体を載せて火で焙る。成形体を乾燥させるための専用の設備はない。

2-1-6. 焼成

すべて露天で焼成する。専用の焼成場所はなく、製作者が所有する畑又は家屋の周辺の平坦な場所を整理して用いる。手間を省くために、複数世帯で焼成場所を共用することがある。乾燥した成形体が1回分の数量に達

すると焼成する。焼成はできるだけ雨天を避ける。また、風があると、火災を惹き起こす危険性があるので、焼成に向かない。

焼成は女性が担当する。まず、稲藁や薪を地面に敷いて、成形体を列状に配置する。1列あたり4～6個体、成形体の底部と口縁部をはめ合わせながら配列し、焙烙を丸底の甕の上に載せる。脚の折損を防ぐために正位で並べる。1回あたり20～30個の成形体を焼成できる。成形体の上を稲藁や草を被覆し、燃焼させて、灰が厚く累積するまで稲藁や草を投げ込む。そうすると、灰の内側の燃料が十分に燃焼せず、火勢が抑制され、灰の中を一定の温度に保てる。製作者は、適度な火勢となり、火災の危険がないと判断すると、その場を離れる。通常、夜間に焼成し、翌朝、焼成体を取り出す。

2-1-7. 第1類型の村寨間の比較

この類型には、滄源県の俄允寨、瀾滄県下允の河辺寨、双江県の曼磨寨、耿馬県的那緬寨（住民は早傣族の“傣那”と自称する）、勐連県の帕当寨（住民は西双版纳の傣族と隣りの“傣泐”と自称する）が属する。河辺寨は、かつて下允土司及び下允で一番大きな緬[シャンないしはタイ]様式寺院で土器製作していた。全46世帯（1982年の統計）のうち全世帯が製作している。他の4村寨は、一部の世帯しか製作していない。製作者の世帯は減少しつつある。俄允寨を例にすると、1965年1月から2月の調査時、21世帯のうち17世帯が製作していたが、1982年2月の調査時には、24世帯のうち9世帯に減少していた。各世帯では、女性が農業や家事を終えてから土器製作する。男性は、粘土の採掘、市場までの土器の運搬、叩き板の製作等の手伝いをする。製品は、家の近くの道路沿いで販売している。俄允寨では、勐角街、河辺寨では、川向こうの下允街、帕当寨では、孟連県の中心街、那緬寨では、耿馬県耿馬中心街で売り出す。顧客は、傣族以外に付近の佤族や拉祜族もいる。

原材料は、5つの村寨で用いる胎土は、主として、石英とカオリンからなる。各村寨の粘土を採掘する地点は決まっていない。砂を混和する比率は、一定でなく、粘土本来の含砂量によって決める。砂を全く混和しない場合もある。河辺寨の製作者は“手指にひっかからない滑らかな感触であれば大丈夫”と教えてくれた。5つの村寨ともに、木槽で粘土を碎細し、粘土を球状に丸める。

工具と設備は、5つの村寨ともに曼賀寨と同じであり、帕当寨は叩き板の文様がやや複雑であり、横線文のほか、横線文と豎文「縦線文」の組み合わせ文様、有斜文「斜線文」、菠夢文（方格文「格子文」の中に点がある）「パイナップル文」、花の文様の叩き板がある。製作者の世

帯は、さまざまな叩き板を所有しているが、横線文の使用頻度が高い。そのため、製品には、キャタピタ状のタタキ文様が多い。

器種は、5つの村寨ともに丸底の甕を製作している。これは、第1類型の主な製品といってよい。各村寨では、茶罐「湯沸かし釜」、釜、甕を製作する。釜は丸底の甕と類似している。釜は甕を入れるため、丸底の甕と比較すると、開口部が大きいという違いがある。甕には、筭「スノコ」がなく、底部に大きな丸い穴がある。蒸す時に竹のスノコが必要であり、これに対して、那緬寨の甕の底部には、4つの穴があり、2本の細い竹の棒を挿し入れて、十字形に交差させることで、蒸す時に竹のスノコを用いず、代わりに一枚布やヘチマの繊維を敷く。河辺寨も焙烙を製作するが、スノコがある。曼磨寨の焙烙と器形等が異なる。俄允寨では、1965年の調査と比較して、1982年の調査時には、新しい器種が増えていた。それは、漢族が使用する小風炉「コンロかストーブか七輪」であり、燃料は、木炭や練炭であり、暖をとる以外にその上で煮炊きをする。瀾滄県から新しく学んだという。ほかに、帕当寨では、提梁壺「手提げの付いた水瓶」を製作する。帕当寨と俄允寨では、器蓋「蓋」を製作し、摘みは、皿状であり、倒立させると、摘みが脚となり、盛り付けができる「ひっくり返すことで、蓋にも皿にもなる」。帕当寨の蓋の中心に突起状の摘みがあり、動物の意匠に見える。こうした傣族の装飾は、この例しかない。河辺寨には、昔から多くの器種がある。上述した器種以外に、土司やシャンないしはタイ様式の寺で用いる仏鉢、碗と瓢箪形の花瓶等を献納していた。鉢の口縁部に穴があり、紐を通して掛け提げることができる。

成形は、河辺寨と曼磨寨が同じであるものの、その他の4つの村寨が少し異なる。同じように、丸底の甕を例にする。原型を半乾燥の状態にして、成形台に戻すと、周回しながらタタキを施す必要がなく、膝の間に挟んでタタキを施せばよい。まず、胴部を締めるためにタタキを施し、その後、丸底になるように底部にタタキを施す。手持ちでタタキを施すと、原型が破損する恐れがあるので、技術的な難易度が少し高い。この他に、双江の曼磨寨では、粘土紐巻き上げ技法を用いる際、粘土紐間の結合を強めるために、粘土紐間にもう1条の粘土紐を裏打ちする。第2類型及び第3タイプの村寨では、この方法が粘土紐の巻き上げ時に見られるが、曼磨寨にその兆候が見られる。[すべての粘土紐の間に裏打ちをする第2, 3類型と違って、部分的に裏打ちをする]

焼成は、露天平地焼陶法「草木灰被覆の覆い型野焼き」[露天の平地で焼成する方法]である。曼磨寨だけは、

より多くの成形体を配置するため、平地に浅い穴（深さ0.3m、長辺3m×短辺2m）の掘り方を掘削し、1回で多くの成形体を焼成することができる。帕当寨では、成形体の上に稲藁を被覆し、その上に牛糞[牛糞を混ぜた泥漿ないしは乾燥させていない牛糞]を載せる。そうすると、火勢を抑制し、稲藁を投げ込む作業を省くことができる。こうした方法は、第2類型の“燃料密閉法「泥漿被覆の覆い型野焼き」”[焼成配置を密封する方法]の変遷とも受け取れる。焼成場所は、村寨の中の家の密度による。製作者の家の付近に空き地があると、焼成を確認するのに便利であり、家の付近で焼成する。村寨の中に空き地がないと、集約的に村寨の外で焼成する（那緬寨及び曼磨寨）。焼成の最大のリスクは、火災であり、焼成場所の決定に最も考慮することである。村寨の外で焼成する場合、焼成場所は、特定の製作者の所有地ではない。誰も使ってなければ、すべての製作者が焼成場所を使用できる。例えば、那緬寨の外には、焼成場所が3ヶ所あり、40世帯が共用している。1世帯の成形体が1回の焼成数に達していない場合、数世帯が一緒に焼成し、各製作者がそれぞれの焼成体を持ち帰ることもある。製作者は、自分の製品を識別できる。

2-2. 第2類型

第2類型は、3つの村寨が該当し、景洪県曼德寨（昔の調査で“曼斗”と表記されたこともある）を例示する。

2-2-1. 概況

曼德寨は、瀾滄江の東、景洪県の対岸に位置する。住民は水傣族である。1965年4月の調査時、全71世帯のうち13世帯が製作者であった。1982年2月の調査では、全120世帯に増加したものの、製作者は4世帯になっていた。景洪市は、西双版纳傣族自治州の州都であり、他地域と比較して、経済や社会の変化が早く、曼德寨の土器製作は、20世紀に入り、1980年代初頭から急速に消失した。ここでは1965年から1982年にかけての変化を記述する。

曼德寨の土器製作は、曼勒寨から伝播したという伝承があり、伝播は“大昔”と1940年前後という2つの説がある。製作者は、農業に従事しており、女性が農業以外の時間に土器製作する。男性は、粘土を運搬し、焼成のための燃料を用意する。製作道具（回転台や叩き板等）も男性が製作する。

成形体を乾燥させる専用の設備があり、小屋の中で焼成する。雨季でも土器製作を継続できる。日常的に成形し、販売する前日に焼成し、翌日売りに出す。1982年の調査時には、年配の女性だけになり、彼女らは、農業に従事せず、終日土器製作に従事していた。

2-2-2. 原料

粘土は、村寨の付近から採掘する。鑑定によると、胎土は、鉄分の多いカオリンである。粘土を採掘し、乾燥させ、粉碎し、莢雑物を濾過し、砂を混和せずに（釜等の製作時に砂を混ぜることがある）、そのまま水を回しながら混練し、球状にまとめる。栈板に載せ、濡れ布を被せて、準備する。粘土の粉碎は、穀類の粉碎と同じもの〔唐臼〕、粘土の細粒の選別は、糠を篩掛けと同じもの〔篩〕を用いる。ともに土器製作の道具ではない。

2-2-3. 工具と設備

転盤「回転台」木製であり、形状は逆台形であり、上面が大きく下面が小さい。上面径30～40cm、下面径20～30cm、高さ18～20cmを測る。下面の孔に竹筒を嵌め、竹筒を地面の木製の軸に挿して、旋回させる。製作者は、足の指でゆっくりと回し、速度は6～10周/分である。粘土紐積み上げから成形までの作業を回転台の上で行う。

木刮「木篋」長方形と半円形の2種類があり、形状と用途は、第1類型と同じである。

竹刀 刀子形であり、竹を切削したものであり、長さ20～22cmを測る。原型の器面や口縁部のケズリ等に用いる。

叩き板と当て具 形状と用途は、第1類型と同じである。ただし、横線文（彼女らは“行文”と呼ぶ）以外に、パイナップル文、棋格文（すなわち方格文「格子文」）、蛇文（すなわち波浪文「波状文」）、蓮文「蓮の花の文様」等の叩き面の文様の種類が多いことが異なる。横線文の使用頻度が高い。叩き板に“×”などの数学的な符号が刻まれたものもある。これは、叩き板の製作者又は使用者を表示する記号であり、他の製作者の叩き板と区別できるようにしている。

原型や成形体を乾燥させるための竹の棚 4本の竹の柱の上に竹の編竹又は木の板を載せる。成形途中の原型のタタキのための半乾燥、あるいは、成形体の乾燥に用いる。急遽焼成する場合、棚の下で火を燃やし、成形体を焙り乾かす。地面又は高床式家屋の1階に成形体を置いておいても自然に乾燥するため、この棚を全世界が所有しているわけではない。

焼成場所に関して、曼徳寨の製作者は、通常、いつも同じ場所で焼成する。地面に長方形（3～4m²）の浅い掘り方を掘削し、その上を草葺きの屋根を掛けるものもある。

2-2-4. 製作器種

器面及び胎土の中心部が赤色を呈する。器面に文様が施されるものもある。キャタピタ状のタタキ文様がより

多い。胎土の中心部が灰色を呈することがある。主として、以下の器種を製作している。

平底罐「平底の甕」口縁部が屈曲し、胴部が膨らみ、平底を呈する。胴部最大径40～42cm、器高28～30cmを測る。穀物の容器や水甕等のさまざまな用途がある。平底の甕は、曼徳寨の主な製作器種である。

丸底の甕 口縁部が屈曲し、胴部が膨らみ、丸底を呈する。胴部最大径40cm、器高25～30cmを測る。主として、煮炊用であり、下に竹製の輪台を敷いて、盛り付けや水の汲み置きにも使うことができる。製作数は、〔平底の甕〕より多い。上記の2種類の甕の大きさは非常に規格化されており、製作者は意識的にこの規格を守っていると見られる。

水壺 把手、蓋、注ぎ口からなる。胴部最大径20～25cm、器高20cmを測る。すでに製作されていない。アルミニウム製の薬缶が普及してから、こうした重くて割れやすい湯沸し用の薬缶は最早市場にはない。

湯沸かし釜 注ぎ口があり、胴部には、把手がある。器高15cmを測る。

灯「灯明皿」下面が大きく上面が小さい筒形状を呈する。上面が皿形となり油脂を入れる。下面径15cm、上面径10～12cm、器高35～36cmを呈する。1965年の調査では、製品を実見したが、製作の様子を見たことがない。

蓋 高台付きの皿と類似している。天地を返して口縁部の上に載せる。最大の蓋の口径は、40～50cmを測る。1982年から製作されていない。

2-2-5. 成形

平底の甕の成形を例にとる。製作者の女性は、回転台に対峙して座り、長さ両杵「身体尺で親指と人差し指の間隔が2つ分の長さ」程度の混練した素地を紐状にする（長さ25cm、直径4cm）。粘着を防ぐために、回転台に灰を撒いて、成形を開始する。少量の素地を取り出し、回転台の上に載せて、叩き板でタタキ、底部円盤を作出する。足の指で回転台を時計回りに旋回させ、左手で底部円盤の側縁を支えながら、右手で粘土紐を底部円盤に押し付け、1本の粘土紐で高さ6～7cmの粘土帯を輪積みする。同じように、2本目の粘土紐を繋げる。2本目の粘土紐を内面から斜めに繋げて、結合を強めるために、接合部に細い粘土紐を裏打ちする。合計4段の粘土紐を積み上げる。口縁部を厚く仕上げるために、もう1本の粘土紐を口縁部に裏打ちする。竹の刀で残余の素地を切削し、長方形の篋で口縁部をナデ押しながら外傾させる。左手で原型を支え、右手の半月形の篋（あるいは手指を用いる）を内面に入れて、粘土紐間の結合

を強めるために、粘土紐間の輪積み痕を掻き消すように、下から上にナデ上げ、円筒形状の原型を立ち上げる。左手で回転台を急旋回させて、右手で口縁部を濡れ布でナデ挽くことで口縁部を平滑に成形し、原型を作出した。

以上の工程は、すべて回転台上で完結する。続いて、原型を回転台から竹棚に移動し、半乾燥させ、再度、回転台上に戻し、胴部の下から上にタタキを施す。まず、無文の叩き板を使用し、次に、文様のある叩き板に変更する。タタキは、胴部を膨らませるため、当て具で内面から押し出す。方法は、第1類型と同じである。しかし、曼徳寨の製作者は、原型を周回せず、原型を手持ちすることなく、足の指で回転台を旋回させることで、両手で自由に原型をタタキを施すことができる。最終工程では、手で回転台を反時計周りに急旋回させ、濡れ布でナデ挽きくことで口縁部を平滑にする。口縁部は、[上から見ると]同心円文状の文様[ナデ挽いた際の濡れ布の痕跡]が残される。

他の器種の成形は、同じように、粘土紐を積み上げて(製品の大小は粘土紐の太細、長短で決まるように見える)、タタキを加える。方法は同じである。また、器種によって、圈足「摘み」(蓋の場合)、把手(茶缶の場合)、長流「注ぎ口」(水壺の場合)、圈足「高台」(蓋の場合)[蓋をひっくり返した場合]を作出し、原型に貼り付ける。摘みは、蓋に粘土紐を貼り付ける。把手は、丸い粘土紐を扁平な帯状にタタキ、注ぎ口は、1本の粘土紐に竹の棒を挿し回す。また、丸底の甕だけは、原型を膝の間に挟んでタタキ、平底を丸底にする。方法は第1類型と同じである。これだけは、回転台で作ることができない。

2-2-6. 焼成

焼成は、泥漿被覆型の覆い型野焼きを用いる。この方法は、「燃料灶「カマド」」又は「糞カマド」ともいう。焼成にあたり、浅い窪地を整理し、長い薪や竹で4辺を圍繞し、その中に樹皮、木片又は竹片、その上に稲藁を敷いて、成形体を配置する。配置方法は、まず、平底の甕、丸底の甕の底部と口縁部をはめ合わせながら配列し(最後尾の成形体は、口縁部を合わせ口にする)、3～4列を配置する。列間の隙間に小型器種を入れ、口縁部を下向き、ないしは、内向き[焼成配置の中央に向ける]にして、成形体の上と側面を稲藁で被覆し、成形体が見えなくなるまで、稲藁の表面に泥漿を塗り込み、「沙堆「泥の山」」を形成する。世界的に見ると、家畜の糞を泥漿に混ぜて、稲藁の上に塗り込む地域があり、「糞カマド」ともいわれる。1回あたり20～30個体を焼成する。

焼成は、経験豊かな年配の女性が主宰する。彼女は、

松脂を含んだ点け木を燃やし、「泥の山」の4隅から挿し入れ、口で吹いて、中の燃料を焚き付ける。燃料がすぐに燃え尽きないように、再び泥漿で4隅を閉塞する。また、内部の燃焼状態を保つために、指で小孔を穿ち、空気を入れる。点火後、製作者は、しばらく経過を観察し、泥の山の4辺に手をかざし、経験で火の加減を図る。火勢が強い部分は、泥漿で小孔を閉塞し、火勢が弱い部分は、小孔を開口し、順調と判断するとその場から離れる。通常、夕方に焼成し、翌朝取り出す。第1類型と同じである。

2-2-7. 第2類型の村寨間の比較

第2類型は、景洪の曼勒寨と曼角寨が属している。ともに県を中心から離れていない。住民は「傣泐」の水傣族と自称する。曼勒寨は、1964年と1965年の2回の調査時、全26世帯のうち25世帯が土器製作していた。曼角寨は、1965年の調査時、全70世帯、このうち1世帯しか土器製作していなかった。1982年、この1世帯(世帯主の名前は波香仔)は、伝統的な器種を製作しなくなり、彩釉瓦を製作するようになっていた。

曼勒寨は、西双版纳土司(「召片領(傣語でツァオペンディン)」)が居住していた宣慰街と近く、拱衛土司の10の村寨(「三老四練」と称する[詳細不明])の一つである。土器製作は、景洪坝子(中心街)がもっとも有名であり、住民は、土司の遠い親戚や家奴の後裔である。伝承によると、曼勒寨は、本来、舟の渡し場を管理していた、往来する客を接待するために土器を使っていた。土器は、土司から供給されていたが、土司は面倒になり、製作するように命じた。土器製作を開始すると、むしろ村寨の負担が増加した。すなわち、逆に土司に土器を上納しなければならなくなった。この伝承の事実関係を確認できないものの、1950年以前、曼勒寨は、毎年土司に日常用の土器を献納し、賚佛[傣語でタンブン(徳を積む日)]及び節日[仏教に関する休日]に土器を提供する義務があった。当然のことながら、曼徳寨や曼角寨と同じように、曼勒寨では、主として、販売するために製作していた。主として、景洪街及び戛洒街で販売し、景洪族[景洪に居住する傣泐のことか?]以外に、近くの山地に居住する基諸人、愛佤人[詳細不明]及び山達人[詳細不明]、空格人[詳細不明]等の少数民族の買い手があった。

曼勒寨、曼角寨の土器製作は、本来、女性の副業であったが、曼角寨では、1980年代、彩釉屋頂飾「彩釉瓦」を製作するようになると(土器製作と彩釉瓦の両方)、男性の終日の仕事となった。変化の原因を調査すると、1980年代初頭、傣族固有の小乗仏教の信仰が解禁され、

各村寨では、シャンないしはタイ様式寺院の新築や復興のブームとなった。シャンないしはタイ様式寺院の屋根には、さまざまな彩釉瓦が必要であり、その中には、屋根の中心に据える塔形の飾りと屋根の角に据える飾り（“象鼻式「象の鼻を象った形式」”や“斑鳩式「イカルを象った形式」”等数種類がある）もある。内地の古建築上の“鴟吻「鳥のくちばし」”と“兽吻「動物のくちばし」”に相当するが、完全な傣族の様式の飾りであった。彩釉瓦の製作技術に関しては、内地から伝播したという説、あるいは、傣族固有という説があり、曼角寨は、橄欖坝〔詳細不明〕から学んだという。製作器種は、供給が追い付かないほど人気があり、波香仔の世帯は、依然として、農業が主な収入源であったが、波香仔は、農業から離れて、終日彩釉瓦の製作に専従するようになった。奥さんは“農業より稼ぎがよいのでやってもらった”と説明してくれた。女性が従事しない理由を尋ねると“釉薬（彩釉を指している）の調整を学ばなければならないものの、鍋と同じような製作技術であり、私たちができないわけではない。私たちが男性のようにずっと座ったままだと、子供や家畜等はどうなるでしょう”と答えてくれた。こうした説明は、女性が〔家事の合間の〕暇な時間に従事する土器製作から男性の終日専従に変化する原因の研究に新たな解釈を提示してくれた。

原料は、曼勒寨、曼角寨ともに、曼徳寨と同じ粘土を使用している。かつて、3つの村寨は、瀾滄江東岸の曼徳寨、曼角寨の間の場所から粘土を採掘していた。この粘土は、含砂量が多く、砂を混和しなかった（曼勒寨は時々砂を混和するが通常の1/5しか入れない）。素地製作は、唐臼と竹の篩を用いる。曼角寨では、彩釉瓦の製作に変更してから、専用の木槌と木板を用いて、繊細な素地製作ができるようになった。

工具と設備は、曼勒寨の成形道具は、曼徳寨より1つ多い。そこは、篋文「波状文」とか划文「キザミ文」を施文する片端が鋸刃状の竹の工具である。成形体の焙り又は原型を半乾燥させる竹の棚が用いられ、焙り焼き用の竹の棚には、雨天用の草葺き屋根を被るものもある。雨天でも土器製作ができるように、土器製作の場所にも草葺きの屋根や高床式草屋がある。曼角寨では、彩釉瓦の製作に変更してから、動物を象る木の型〔版木型〕が多くなってきた。成形は、依然として、回転台等の道具を用い、この点では、過去と変わらない。

製作器種は、曼勒寨と曼角寨（1982年からの彩釉瓦の製作開始以前）とともに、平底の甕、丸底の甕、湯沸かし釜及び水壺が製作されていた。曼勒寨では、このほかに、土司のためにタンブン用の花瓶や碗鉢等を製作して

いた。これには“銀粉〔銀色の粉〕”（製作を実見したことはない）を塗ることがある。また、景洪の中心地にある各村寨に昔寨神〔伝統的な精霊〕（“披曼〔傣語でピーマイあるいはピー〕”）を祀る祠で使用するための、精霊に供献する小型器種（小さい缶、小さい瓶等）の多くは、曼勒寨で製作された。これらは、注文を請けてから製作する。

成形は、基本的な技法と工程は曼徳寨と同じである。曼角寨は、彩釉瓦の製作に変更してからも、同じように、粘土紐積み上げ技法を用いて、回転台上で原型を作出する。事前に、木の型で作出したさまざまな装飾を附加すればよい。釉薬の調整を実見していないものの、インタビューによると、“鉛巴〔鉛〕、赤砂糖に糯米を入れて、炒める”という。これを水で溶かして器表面に塗布する。強くない火で緑色、強い火で赤色というように、焼成時の火力に応じて、異なる色調が得られる。製作者は、火力を調整することでさまざまな仕上がりに焼成することができる。

焼成は、2つの村寨は曼徳寨と同じように覆い型野焼きを用いる。曼角寨の彩釉瓦は、窯で焼成する。窯は、レンガ積みであり、屋根はない、篋「火格子」はある。かつて傣族が焼成に用いた瓦窯は、すべて同じである（傣族は、1950年から傣様式の平瓦を製作している。その起源及び製作工程は、他の論文で紹介する）。

2-3. 第3類型

2つの村寨が該当し、曼朗寨を例示する。

2-3-1. 概況

曼朗寨は、勐海県勐遮鎮の南10kmに位置する。住民は、“傣泐”の水傣族を自称する。全56世帯のうち26世帯が土器製作に従事する。主として、女性が農業や家事以外の時間に土器製作する。男性は、粘土の採掘、造窯、製品の運搬等の力仕事のほかに、釉薬を調合し、成形体に鉛釉を施す。製品は、勐遮街の市場で売り出し、近隣の土器製作を行わない傣族以外、愛侶人が買い手である。曼朗寨の土器は、勐海全域で最も良質とされ。現地で“曼朗寨の‘磨’（陶器〔土器〕）は人々に愛される”といわれる。

2-3-2. 原料

鑑定によると、粘土は滑石〔?〕に属し、それはカオリン、粘土鉱物になるまでの中間産物であり、村寨の前で採掘することができる。専用の木槌と木板を用いて精細に素地製作する。粘土を粉碎し、水を回して、1/7の砂を混和する（砂を混ぜなくてもよい）。

2-3-3. 工具と設備

成形道具は、第2類型と同じであり、ただし、弓の

ような工具が加わる。割竹を曲げて糸を弦にしている。これで素地を切り取ったり、回転台から原型を切り離したりする。一部の製作者は、この工具を使用せずに、新たにナイロンの紐を代用している。成形体の乾燥は、第2種類のような専用の設備はない。

焼成は、村寨の外の坂に窯が分布している。坂の下に窯の焚き口を掘り出し、そこから2本の炎の道〔燃燒部を兼ねる〕を掘り抜き、2本の炎の道は、火格子のない焼成部に通じる。窯の天井はなく、焼成時、燃料で天井を被覆する。汪らの調査時、全村寨で5基の窯（窯口径1～1.5m）があった。横一列に配置され、村寨のすべての製作者が使用できる。付近に廃絶された窯も見られる。

2-3-4. 製作器種

素焼きの土器であり、器面にキャタピタ状のタタキ文様が施されることもある。第2種類と類似している。口縁部や内面の一部には、鉛釉が施されているものの、均等に施釉されていない。下記の製作器種がある。

平底の甕 器形や大きさ、そして、用途は、第2種類と同じである。

丸底の甕 いくつかの規格があり、規格度が高い。頻出するサイズは、胴部最大径35～37cm、器高26～28cmを測る。主として、釜や水の汲み置きに使用する。

釜と甌 第1種類（耿馬の那緬寨、双江の曼磨寨、瀾滄下允の河辺寨）と同じような器形であり、釜の口縁部が肥厚し、丸底状を呈する。甌には、スノコがなく、両側に柱状の把手がある。

手揚げの付いた水瓶 器形と大きさは、大体第2種類と同じであり、流通していた期間はきわめて短かった。調査時には、過去に製作された製品しかなく、調査時には、すでに製作されていない。

蓋 器形は、第3種類の曼勒寨と類似している。輪状の摘みであり、甌と組み合わせられる。

碗 器形は、瓷器の碗と類似している。小さな平底を呈する。口径10～15cmを測る。

小瓶 中国古代の酒器の尊と類似している。口径5～10cm、器高15～20cmを測る。シャンないしはタイ様式寺院で用いられる。調査時には、製作の様子を実見できなかった。

2-3-5. 成形

成形工程は、大体第2種類と同じである。素地から底部円盤を作出し、その後、原型の体部を立ち上げる。成形は、粘土紐を巻き上げる技法であり、輪繋ぎした粘土紐を1輪ずつ積み上げる技法ではない。2～3周させてから、手で回転台を急旋回させ、遠心力を利用して、

両手で粘土紐を提拉「挽き上げ」することで、円筒形状の原型を立ち上げる。小さな女の子（通常、製作者の娘又は孫娘）が隣で回転台を急旋回させることもある。そうすることで、製作者の手間を省くとともに、製作技術を教授する機会にもなる。手で回転台を急旋回させる時、速度は、毎秒3～5周である。小型器種の場合、粘土紐を輪状に積み重ねなくても、一気に上に伸ばして、成形にすることもある（汪は、シャンないしはタイ様式寺院で1つの瓶がこの方法で成形されたところを見たことがある）。これは、新しい製作技術の出現を意味している。成形体は、輪製「回転台を用いた挽き上げ技法」で成形することができる。

円筒形状の体部を立ち上げ、口縁部を成形し、原型を作出する。回転台から一時的に原型を移動し、半乾燥させ、再度回転台に載せて、叩き板でタタキを施す。方法は、第2種類と同じである。小型器種は、提拉成形〔以下「挽き上げ成形」と訳出〕するので、タタキを施さない。丸底を成形する場合、第1、第2種類と同じように、原型を膝の間において、丸底になるまでタタキを施す。摘み、注ぎ口、把手を作出し、原型に貼り付ける。方法は第2種類と同じである。

成形体が完成すると、釉を掛ける場合もある。釉薬は製作者が調整する。インタビューによると、釉薬の調合技術は外部から伝播したのではない（昔から保有していた技術という）。調合は、鉛を土器の缶に入れて、加熱して溶解させ、灰を入れて、完全に溶融させる。数名の製作者を訪問したところ、釉薬の調合は男性の仕事であったが、釉を掛ける作業は、依然、女性の仕事であった。彼女らであれば、製品を補強し、漏水を防ぎ、洗うに便利のように釉を掛けると話ししてくれた。また、釉は、口縁部及び内面にしか掛けていなかった。理由を聴取すると、彼女らは、“鉛の値段が高いので、全面に塗るともったいないでしょう。”と答えた。こうした粗製の方法で調合した釉を内面に掛けて、これに食品を入れると、健康を害することを知っているかと尋ねると“昔からそうしているから”と笑いながら答えてくれた。

2-3-6. 焼成

焼成にあたり、焼成部を清掃し、破損した焼成体や破片を焼成部に敷き詰める〔これを火格子の代わりにする〕。この上に成形体を配置する。開放型野焼きと同じように、口縁部と底部をはめ合わせ、4圈を配列し、小型器種を隙間に入れて、口縁部を下向きにすることで、成形体を半円形に配置する。燃料（木材、割竹）は事前に準備する。まず、焚き口から少量の燃料で“烘窯「窯を温める」”。最初から多量の燃料を入れると“器壁の

中心部まで火が通らない”という。ゆっくりと十分な燃料を入れて、火勢を上げる。同時に、成形体の上に指2本分の厚さの稲藁を掛けて、そこから炎が見えると、隙間を稲藁の束で塞ぐことで、火勢を抑制し、窯の中の炎を長時間持続させる。焼成の途中、1回、多めの割竹を入れることで、数分間火勢を強める。これによって、鉛釉が溶解し、成形体に融着するという。点火1時間後、燃料が燃え尽きるのを待たずに、焼成場所から離れる。翌日、冷めた焼成体を取り出す。窯は、村寨の外にあるが、盗難などは一度もない。

2-3-7. 第3類型の村寨間の比較

ほかにこの類型に属するのは曼海寨である。曼海寨は、勐遮の北5km先に位置し、住民は“傣泐”と自称する水傣族である。全33世帯のうち30世帯が土器製作する。このうち、20世帯が頻繁に土器製作する。女性の副業であり、男性は、粘土の採掘、燃料の調達、鉛釉の調整のほか、販売のため製品の運搬を担当する。

原料は、鑑定によると、カオリンと石英に属する。砂は、混和してもしなくてもよい。曼朗寨の素地製作は、木槌でタタキ、最後に足で踏み練る。

成形道具及び窯は、曼朗寨と全部同じである。製作器種は、曼朗寨の器種組成に加えて、斂口鉢（器形は仰韶文化で見られる彩陶鉢と同じ）と小口直唇缶〔詳細不明〕がある。これらは、シャンないしはタイ様式寺院で使用される。提梁状を呈する蓋の摘みは、曼朗寨で見たことがない。

成形は、粘土紐積み上げ技法のうち、粘土紐巻き上げ技法を用いるようであり、回転台を急旋回させ、遠心力を利用して、原型を挽き上げる。一部の大きな製作器種は、タタキを用いず、挽き上げるだけで成形することもある。この方法で蓋を成形するところを見た。小さな女の子が回転台の旋回を手伝うところをよく見かけた。とくに、重くて大きな器種を成形する際、どうしても人手が欠かせない、小さな女の子も楽しそうに手伝っていた。曼朗寨の女の子は、土器製作に興味があり、ほかの村寨のように、土器製作が老婦の仕事という認識〔偏見〕はない。

焼成に関して、曼海寨には、4基の窯がある。1列に並んで築窯されており、村寨のすべての製作者が自由に使うことができる。窯が占地する土地は、村寨の共有なので、誰でも築窯することができる。そして、操業していない窯は、誰でも使用できる。彼女らに誰かが築窯した窯をどうして誰でも使うことができるのかと聞くと“1つの窯で少なくとも3年間使うことができます。毎日焼成するわけではないので、自分が焼成しない時、誰

にも使わせないというように、私たちはそのように考えません”と答えた。また、誰がこれらの窯を築窯したのかと聞いたら、“わかりません。働き者の誰かが掘ったのでしょうか”と答えた。

2-4. 第4類型

第4類型は、曼洪県大勐竜に所在する曼南坎寨だけが該当する。

2-4-1. 概況

曼南坎寨は、大勐竜鎮の西4kmに位置する。近くの南坎河から名前が由来した。住民は水傣族（“傣泐”）と自称する。全80世帯のうち12世帯が土器製作に従事する。先述した3類型と異なり、曼南坎寨では、土器製作が男性専従の仕事となり、女性の製作者を聞かない。しかも、シャンないしはタイ様式の水瓶だけしか製作しない。

西双版纳の傣族（とくに辺境の近くにある）は、昔からこの水瓶を使用している。この水瓶は、元々ミャンマーから伝播した。1940年代、ミャンマー国境の小勐猛地区から“先刀”（“先”とは傣族村寨の統領の名前）〔“刀”が名前ではないか？〕という製作者によって、この水瓶の製作技術が伝播した。一部の製作者は、伝統的な土器製作から新しい水瓶の製作に変更した。新しい水瓶はとても需要があり、景洪等の遠隔地からも購入にきた。多くの収入を得るため、土器製作は、女性が有閑時の仕事から男性が終日専従する仕事になった。世帯の他の成員は、依然農業に従事する。この水瓶は、製作技術が複雑でないものの、終日專業度が高い仕事なので、女性より男性の方が向いている。また、男性は家事等がないので、連続して仕事をする事ができる。これまでのところ、大勐竜では、一部の村寨において、伝統的な土器製作を継続しているものの、曼南坎寨だけは、この新しい水瓶を製作している。

2-4-2. 原料

粘土は、村寨の近くから採掘する。鑑定によると、石英とカオリンに属する。粘土を採掘し、牛の皮（ビニールシートに変更した製作者もある）の上で木棒で碎き、水を回す。

2-4-3. 工具と設備

以下の種類がある。

回転台 木製であり、第2類型及び第3類型と比較すると、台面がきわめて小さく、上面径が12～15cmしかない。軸が床からきわめて高く、長い竹の軸受けに嵌める。各世帯では、数個から十数個を用意している。手で回し、回転速度が速く、毎秒2～3周する。成形の全工程で用いるだけでなく、原型作出後、この上で乾燥

させる。

木製の弧状のコテ 木製であり、片方が「凹状に」湾曲している。2～3種類がある。長さ10～15cm、幅3～4cmを測り、大きさや弧度が違う。瓶の頸部を作出する際、外面にコテを当てて、必要な彎曲度にあわせて作出する。

曲がった棒 木製であり、長さ20～25cmを測る。片端が異なる大きさや弧度になっている。瓶の頸部を作出する際、内面から押し出し、必要な彎曲度を作出する。

竹刀 竹片を削ったものであり、長さ30～35cmを測る。口縁部及び外面の縁辺部の残余の素地を削るために用いる。

竹の弓 割竹を曲げ、糸を引いて弦にする。曼朗寨と似ている。素地を切り取ったり、回転台から乾燥した成形体を切り離す。

じ筒 節を残した竹筒で製作する。片方の竹の節に小さな孔を穿ち、もう片方の竹の筒を入れる。外見上は、子供の水遊びのおもちゃに似ている。長さ30cmを測る。素地を竹筒に入れて、もう片方の竹の筒で押し出すと、孔から紐状の粘土が押し出される。これを貼り付け文様を付加する。

旋棒「ローラー状の回転施文具」竹又は木の棒の片側に牛骨に入れて、先端を丸くする。長さ2～3cm、径約1cmを測る。この（牛骨）の上に丸い孔又は縦の溝を刻む。土器の表面に押し転がすことで、押しピン文様及び柘文等の精細な文様を施文できる。

竹の板 長さ15cm、節が付いてある竹の一段、柘文製作用。

象豆 盃藤子という豆であり、俗称、象豆という。現地の人々はこれを“老鴉枕頭「カラスの枕」”と呼ぶ。器面に滑らかな光沢をもたせるために、成形体を乾燥させた後、この豆で全体を磨き上げる。

窯 煉瓦造りであり、円形を呈する。二つの隔梁と三つの斜めの火の道を作っている。[2層構造になっており、3方向に焚き口がある。]天井はない。雨天でも焼成できるように、窯の上に屋根がある。村寨には、窯1基しかない。窯の直径は132cm、深さ154cmを測り、すべての製作者が使用することができる。

2-4-4. 製作器種

シャンないしはタイ様式の水瓶の大きさはほぼ同じである。口縁部は小さく、長頸であり、胴部が膨らみ、鼓腹を呈する。平底に輪状の高台が付き、全体が瓢箪形を呈する。口径5～6cm、胴部最大径23～24cm、器高33～35cmを測る。こうした規格にするのは“並べやすい”ためだそう。水瓶の胴部に細長い文様を施し、

頸部に堆文、柘文、押しピン文などを施文する。器面は、黒色で光沢があり、胎土は、やや深い灰色を呈する。

シブソンパンナの気候は熱いので、担いてきた水を水筒に入れたら、飲みにくいし、暫く経つとすぐ熱くなるので、多くの傣族の人々は、この水瓶を保有している。井戸水を汲んできたなら、すぐに、この水瓶に入れ、室内に常備しておく。竹を絡ませて、直接井戸に入れて水を汲むという方法もある。ほかに、曼南坎寨では、シャンないしはタイ様式の花瓶を製作したことがある。買い手が少ないので、注文を請けた時にしか製作しない。

2-4-5. 成形

製作者は、回転台上に粘土紐を1周させて、水瓶の輪状の高台を作出する。[高台は成形後に貼り付けではないか?]水瓶の底部を作出するために、素地から底部円盤を作出し、この上に原型を立ち上げる。同じように、粘土紐巻き上げ技法を用いる。粘土紐を捻じ立てながら、3周巻き上げて、指で接合部の内面を下から上にナデ上げながら、粘土紐間の輪積み痕を掻き消しながら器壁を締める。その後、曲がった棒を内面からナデ押ししながら胴部を膨らませる。これまでの作業は、すべて回転台上で行う。回転台が停止すると、手で旋回させ、回転させ続ける。原型が載っている回転台を取り外し、両膝の間で固定し、竹の板を用いて、両手で胴部を上から下にケズリ、竹の節で一つ一つの柘文を施文すると、瓢箪形の下半部の原型が完成する。引き続き、回転台を旋回させて、粘土紐を1周巻き上げて、瓶の頸の下の膨らみを作出する。外面に木製の弧状の「凹型の」コテを当てて、曲がった棒を内面からナデ押ししながら作出する。じ筒を用いて、細紐状の粘土を押し出し、この部分「瓶の頸の下の膨らみ」と胴部の境に浮線文を貼り付ける。また、その「瓶の頸の下の膨らみ」の上に長い頸部を作出するために粘土を巻き上げ、曲がった棒を内面からナデ押し、長い頸部を作出してから細紐状の粘土を貼り付け、浮線文を作出する。回転台を回しながら、長い頸部にローラー状の回転施文具を押し転がすことで、押しピン文や柘文を施文する。それから、竹の刀で、口縁部等の残余の粘土を切削し、回転台に載せたまま、もう1本の竹柱に差し替えて乾燥させる。[竹の柵のような]成形体の乾燥のための専用の設備はない。成形体を乾燥させてから、竹の弓の弦で回転台から切り離す。最後に、成形体を懐に抱き、光沢を帯びるまで、器面を象豆でミガキ続ける。

成形は、2点注意しなければならない。1つ目は、タタキの工程がないことであり、粘土紐を巻き上げる際、捻じ立てることで締められる。また、瓶の口縁部がきわめて小さく、内面に当て具を入れられない。2つ目は、

第1表 傣族の土器製作の4類型の対照表

類型	第1類型	第2類型	第3類型	第4類型
村寨	曼賀寨、河辺寨、俄允寨、曼磨寨、帕当寨、那緬寨	曼德寨、曼勒寨、曼角寨	曼朗寨、曼海寨	曼南坎寨
製作者	女性、暇なときの仕事	女性、暇なときの仕事（1980年曼角寨の製作者は伝統的でない新しい製品を製作するようになり、その後、男性の専門的な仕事に移行した）	女性、暇なときの仕事	男性、専門的な仕事
製品の特徴	赤色の素焼きの土器、器面の叩き文様	赤色の素焼きの土器、器面の叩き文様	赤色の素焼きの土器、器面の叩き文様、口縁部及び内面の鉛釉	黒色処理の土器、器面の複雑な文様、ミガキ
成形	成形台、粘土紐巻き上げ技法、タタキ技法、膝に木の板を乗せる、粘土積み上げ→タタキ	回転盤、粘土紐積み上げ→タタキ	回転盤、粘土紐積み上げ→タタキ、回転盤を足指で回し、時々手で急回し、遠心力を利用し、小型器種を挽き上げ、大型器種の原型を作出する	小型回転盤を手で早く回し、粘土紐を積み上げる、成形時にタタキの工程はない
焼成	開放型野焼き [草木灰被覆の覆い型野焼き]	燃料密封法 [泥漿被覆の覆い型野焼き]	頂点なしの双火道をもつ堅穴の土窯 [双道式昇炎式窯]	頂点なしの3つの火道をもつ煉瓦窯 [複道式昇炎式窯]

すべての工程が回転台上で完結するにもかかわらず、また、手で旋回させる回転台の速度は、足で旋回させるより速いものの、遠心力を利用して原型を膨らませる成形に向いていないので、底部から口縁部まですべて粘土紐巻き上げ技法を用いる。第4類型は、他類型より文様が複雑で精緻であり、より高い技術といえるが、第3類型の一部で用いられた回転台を用いた挽き上げ技法は、第4類型で見られない。

2-4-6. 焼成

土器を焼く時間の制限はない、乾燥した成形体が焼成する数量に達すると焼成を準備する。焼成は、男性の仕事である。窯内部を片付け、火の道に破損した焼成体や破片を敷いて、水瓶を整然と配置する。下層の焚き口から点火し、ある程度焙ると、破片で天井を閉塞する。破片の上に泥漿を被覆し、焚き口を閉塞する。点火から閉塞まで一日かかるときもある。注意しないとイケないのは、閉塞にあたり、籾殻や谷の屑又は“費買究[詳細不明]”という葉（鑑定していない）を入れ、濃い煙を発生させることである。天井や焚き口を閉塞し、煙が外に漏れないようにすることが、黒色処理をするために重要である。気温が高い又は乾燥した時には、火勢のコントロールが難しい。窯の中は、火勢が強いと、煙が出難くなるので、焼成を禁忌している。

2-5. 4つの類型の比較

上述した4つの類型の土器製作の比較に関しては、第1表にまとめた。4つの類型は、2つの系統に分けることができる。第1類型から第3類型は、雲南省の西

南の傣族固有の土器製作である。成形（回転台の不使用から回転台の使用まで、回転台の足指での旋回から手での旋回まで）と焼成（開放型野焼きから覆い型野焼きまで、さらに、簡単な窯まで）という技術の段階が違ってもかわらず、[素焼きの]赤い土器を製作している。多くの製作器種（丸底の甕、茶缶など）は、3つの類型ともに共通している。器形と製作技法はほぼ同じである。文様は、タタキに伴うキャタピタ状のタタキ文様が残されている。器壁の硬さは大差なく、すべて少し水が染み出す性質をもつ。これは、焼成技術の違いがあるものの、焼成時の最高温度が近く、いずれも1,000℃に達してない。この3つの類型の製品は、考古学者に分類させると、迷いなく同じ土器系統に帰することになるだろう。第4類型は、別系統であり、表面を磨いた黒色の土器に複雑な文様を施し、上述した3つの類型の赤色の土器と明らかに異なる。

3. 第4類型の土器製作の系譜

以上のように、汪論文の一部を訳出することで、1960～1980年代の西双版纳州における土器製作のバリエーションを把握することができた。また、筆者らのこれまでの現地調査の記録と対照することで、20～40年間に生じた土器製作の変容を窺い知ることができると考えている。そのためには、汪と筆者らの調査を結び付ける必要があるものの、改革解放後、村寨の移転や名称の変更が行われ、調査対象の村寨を特定することがきわめて難しい状態にある。

2004年及び2005年に筆者らが現地調査を実施した曼扎寨は、第1類型に該当すると考えられるものの、汪の地名表に記載がない。同じ第1類型とされる曼賀寨に近い場所に所在すると考えられる。また、第2類型のうち、曼德寨、曼角寨は、それぞれ筆者らが調査した曼斗寨、曼閣寨に該当すると考えられる（徳澤ほか2004、徳澤2005）。ただし、曼德寨に関しては、第2類型と異なる土器製作の内容が記載されている文献もあることに注意する必要がある（朱1982）。また、第3類型に関しては、曼朗寨の土器製作を実見することができた。

しかしながら、筆者らの現地調査では、曼南坎寨の所在を確認することができず、第4類型に該当する村寨を見出すことができなかった。ただし、第4類型は、汪によって「緬式」、すなわち、シャンないしはタイの様式とされているとおり、かつてのシップソンパンナーの領域、すなわち、西双版纳州と国境を接するミャンマーやラオス、そして、タイの周縁において、第4類型が現存する可能性が残されている。

第4類型の土器製作は、小型の回転台を用いて、「粘土紐積み上げ→ノバシ」という成形技法が特徴であり、汪のいうとおりタタキが介在しない。また、冷水瓶ナム・トム（Nam Tom）に象徴されるとおり、製作器種を見ると、特徴的な造形と意匠が凝らされ、器面にミガキを施したのち、黒色処理、あるいは、赤色塗彩されることに特徴がある（図版1）。

こうした土器製作の一群に関しては、リーダム・レファート及びルイス・コートによって、「タイプE」の土器製作と位置付けられている（植崎ほか2000）。

レファートらは、1996年のフィールドワークにもとづいて、「タイプE」の土器製作は、1780年代、ミャンマー・シャン（Shan）州のチャイントン（Kentung）の製作者がタイ・チェンマイ（Chiang Mai）県のムアングーン（Muang Gun）に移住し、「タイプE」の土器製作が開始されたという。その後、20世紀半ば、ムアングーンの「移動製作者」がチェンライ（Chiang Rai）県の2つの村を訪れたことによって、「タイプE」の土器製作がタイ北部に拡散したと記載している（Lefferts and Cort 2012）。

汪、そして、リーダム・レファート及びルイス・コートらの調査によって、「タイプE」すなわち第4類型の土器製作は、1）1780年代、チャイントンからムアングーン、2）1940年代、小勐猛地区から曼南坎寨、3）20世紀半ば、ムアングーンからチェンライ県に移転したことが明らかにされている。

現在、チャイントン、曼南坎寨を別にして、ムアングー



図版1 製作器種 [Muang Gun] (1/3)

ナム・トム（口径5.0cm、胴部最大径18.0cm、底径9.2cm、器高27.8cm）12.8cm、器高22.0cm）



写真1 斜軸方向に小型の回転台が設置された状況
[Muang Gun]

ン及びチェンライ県の土器製作が現存しており、筆者らは、ムアングーンの調査を継続している。成形は、第4類型の「粘土紐積み上げ→ノバシ」技法に近いといえる。焼成は、煉瓦積み昇炎構造体をもつ窯であるものの、第4類型の記載にある「3つの火道をもつ」複道式昇炎式窯でない。ただし、この間、村寨や土器製作にさまざまな変容が生じているとおり、ムアングーンと第4類型の製作技術や生産様式の異同を明らかにすることが難しくなってきた。

また、ムアングーンの土器製作に関しては、「粘土紐積み上げ→ノバシ」技法に用いられる小型回転台の据え方がきわめて特徴的である（写真1）。製作者と相対し、小型回転台の軸を斜めに据え付けており、小型回転台が若干の回転角をもつことによって、回転の持続性が高められている。すなわち、ナム・トムの長頸で胴部が張り出すという低重心の器形に適応した回転台であると考えられる。また、張り出した胴部を中心に文様が施文されるとおり、製作者に対して、原型や成形体を尻上げ気味にすることで、成形や施文に相対しやすくなる。こうした斜めに据え付けられた小型回転台に習熟することで、最大形を胴部上半にもち、胴部最大径が30cmを越える大型の水甕モー・ナム（Mow Nam）を同じように小型斜軸回転台上で成形する製作者も見られる。

また、小型回転台を用いる成形は、第4類型に限らず、ミャンマー国境近くの雲南省徳宏傣族景頗族自治州潞西市芒市鎮芒巷寨で見ることができる（徳澤ほか2012）。ただし、芒巷寨では、小型回転台が正立しており、粘土円柱をノバシ、その後、叩き板を用いたタタキ成形が行われるとおり、第4類型やムアングーンとまったく異なる技法である。

本稿における筆者らの関心は、第4類型とムアングーンの製作技術及び生産様式の合一性である。「2. 土器製作の類型に関する汪論文の記載」を翻訳する限りでは、肝心の小型回転台の据え方が見えてこないのである。レファートらの記述も同様である。

筆者らは、ムアングーン及びチェンライ県の成形技法に関しては、小型回転台を斜めに据え付け、「粘土紐積み上げ→ノバシ」技法で成形することに特徴があることから、「小型斜軸回転台を用いた成形」と呼称している。第4類型の小型回転台の回転角を判別し、第4類型とムアングーン及びチェンライ県の土器製作の合一性を確認する作業が不可欠と考えている。

4. おわりに

今後、西双版纳州、シャン州、チェンライ県及びチェンマイ県の土器製作の異同を踏まえて、西南中国から東南アジア大陸部における「小型斜軸回転台を用いた成形」の展開を把握したいと考えている。そのためには、中緬国境を中心とする地域、すなわち、傣、シャン、タイの領域におけるフィールドワークを進めることが必要であり、また、これらの範疇にある土器製作を新たに見出すことも期待している。しかしながら、汪、レファートら、筆者らの調査から10～40年を経過している。この間、この地域の経済成長と同調し、土器製作の村寨において、経済成長・社会変容を遂げているとおり、土器製作が低調になり、亡失してしまったものも少なくないと考えられる。ムアングーンをはじめとする村寨のフィールドワークを可及的速やかに実施し、「小型斜軸回転台を用いた成形」の出自と系譜を明らかにしたい。

本稿の「2. 土器製作の類型に関する汪論文の記載」は、秦との2017年度の岡山理科大学大学院総合情報研究科社会情報専攻「東南アジア民族誌特論」の講義の一部を整理したものである。「3. 第4類型の土器製作の系譜」は、持田との2017年度の「特別研究」の講義の一部を整理したものであり、持田のムアングーンにおけるフィールドワークは、2016年度の岡山理科大学「岡理GAP」（長期学外学修プログラム）による資金援助を得て実施したものである。なお、本稿の文責は、徳澤にある。

主要参考文献

- 張季 1959 「西双版纳傣族的制陶技術」『考古』（第9期）488 - 490 頁
- 朱宝田 1982 「云南西双版纳傣族和西盟佤族原始制陶的起源和傳播」『雲南文物』（11期）67 - 69 頁
- 唐立 2000 「第1章製陶技術」『云南物質文化』（生活技術卷）云南教育出版社 1 - 70 頁
- 汪寧生 2003 「云南傣族制陶的民族考古学研究」『考古学報』（第2期）云南民族学院 241 - 260 頁
- 周達生 1979 「中国傣族の土器づくり - 雲南省西双版纳傣族自治州 - 」『季刊民族学』8 国立民族学博物館 74 - 79 頁
- 加藤久美子 2000 『盆地世界の国家論 - 雲南・シブソパンナ - のタイ族史 -』京都大学出版会
- 徳澤啓一・小林正史・長友朋子 2006 「西南中国における伝統的土器づくりの変容 - 中華人民共和国雲南省西双版纳傣族自治州的伝統的土器づくり村 -」『岡山理科大学紀要』第42号B（人文・社会科学）岡山理科大学 21 - 40 頁
- 徳澤啓一・劉芳・小林正史・長友朋子 2007 「关于中国伝統陶器制作的变化 - 中華人民共和国西双版纳傣族自治州的伝統陶器制作村 -」『社会科学系研究』第5号 社会分析研究会 11 - 22 頁
- 中村大介 2008 「民族事例における野焼きと窯の接点」『日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集』日本考古学協会2008年度実行委員会 1-2 頁
- 徳澤啓一・熊代 裕 2011 「王垂文著「雲南省における朴拉俗（彝族支系）の伝統的土器製作技術」『社会情報研究』第9号 地域分析研究会 85 - 114 頁
- Leedam Lefferts and Louise Allison Cort 2012 Thai Potters across Borders : Tracking Ceramic Technology in Southern Yunnan and Northern Thailand, Connecting Empires and States (Selected Papers from the 13th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists, Volume 2) , National University of Singapore: 362-374.
- 徳澤啓一・片山浩子・張雪 2012 「中国雲南省 - ミャンマ - 国境地域における伝統的土器製作 - 潞西芒巷寨及び福貢加車寨における中国領内の現地調査報告を中心として - 」『社会情報研究』第10号 地域分析研究会 153 - 168 頁
- 徳澤啓一・兪 蕙 2014 「中国人民解放军進駐以前の傣族の伝統的土器製作 - 西双版纳傣族自治州における製作者の移動と身分階層を中心として -」『社会情報研究』第13号 地域分析研究会 113 - 128 頁

フィリピン・マクタン島コルドヴァにおける 農産物の流通に関する調査報告

辻 貴志*

1. はじめに

1-1. 本稿の目的

フィリピン・マクタン島は、フィリピン中部ビサヤ地域のセブ州に位置する。マクタン島は、サンゴ礁域に恵まれ、漁撈が盛んに行われている。マクタン島を含むビサヤ地域では、その多島海という生態環境のもと、多様な漁撈技術が発展してきた (Umali 1950)。漁撈技術の発展は、内海だけでなく外洋でも漁撈を行える漁民の移動性を発達させた (関 2007)。海を基盤とするビサヤ漁民に関する研究は精力的に行われてきた (Ushijima and Zayas 1994, 1996, 2004, Zayas et al. 2014)。Ushijima と Zayas が中心となった論集には、ビサヤ漁民の漁撈だけでなく、文化、社会、経済、ジェンダーなど多様なアプローチからの論文が収録されている。中には、本稿が対象とするビサヤ地域の市場や商店舗を扱った論文も確認できる (Kawada 1994, Ogawa 1996, Kobayashi 2000)。

ここで本稿に関連する先行研究を概観しておきたい。Ogawa (1996) は、東サマル州のビクトリー島で多く確認できるサリサリ・ストア (Sari-Sari Store) という小規模な商店舗について、考現学の視点から物質 (商品) に着目した調査を行った。定点的観測により、すべての商品、仕入れ値、売り値、利益などがほぼ完全に記載されている。時間ごとの店の利用者と売買行動も綿密な観察記録が見られる。しかし、調査対象が1店舗のみであり、似たり寄ったりの傾向にあるとも言えるかも知れないが、ほかの店舗の個性や売買戦略について知ることができず全体像の把握には至っていない。

Kobayashi (2000) は、パナイ島北西部イビサン町の公設市場の鮮魚売りの生計の不安定さについて、漁民の水揚げに大きく頼らざるを得ない脆弱性に問題があるとし、鮮魚売りの生計の危機対応に関する調査を行った。本論文は、鮮魚の供給者と売り子の売買をめぐる相

互交渉、売り子と利用客のかけひきの際に用いられる呼び名に着目した会話分析を主に構成されている。鮮魚の売り子は商品の見せ方と客引きも大事だが、鮮魚の供給者やスキ (suki) との人間関係や天候など鮮魚の入手を左右する出来事も重要である。鮮魚売りは、鮮魚の売買について困難に陥ると、取引相手に懇願する程度のネガティブな戦略しかとれない状況にあることが明らかにされた。市場での鮮魚売りの人間関係の人間臭さは伝わるものの、鮮魚売りの商品や生活の背景が見えてこない。

Kawada (1994) は、セブ州バンタヤン島の公設市場におけるスキ関係に着目し、社会におけるスキの重要性について考察している。公設市場における売り子の社会経済状況が質問紙調査によって具体的に示されているほか、売買時の会話分析により商品には様々な人びとが関わっていることを明らかにしている。そして、スキ関係は公平でないが、市場で商品を売買するだけでなく、社会生活を営む上でも必要不可欠であると指摘している。本論文は、売り子は誰もがスキを持っているものだとすることを指摘し、売り子の社会経済状況と基盤の解明をする上で示唆に富む。しかし、市場全体の要点は押さえられているが、商品と売買のバラエティーについて記述が及んでいない。

Szanton (1971) は、パナイ島エスタンシアの鮮魚の卸売り業者と漁民の相互関係について詳細に分析している。卸売り業者は漁民が必要とする金品を貸し与えることで、市場価格より安い価格で漁民から鮮魚を有利に買い取ることができるなど、卸売り業者が漁民より優位な立場にあることを明らかにしている。卸売り業者は恒常的に鮮魚を入手する必要がある、漁民をつなぎとめるため、時には漁民の借金を帳消しにすることもあるが、自身が損をしない構造を構築している。本書はスキ関係のシステムをはじめ経済状況の解明に優れた民族誌であるが、市場の生態に関する記述に欠ける。

* 佐賀大学大学院農学研究科特定研究員・岡山理科大学非常勤講師

Spoehr (1980) は、ビサヤ地域の鮮魚卸売市場について記述している。鮮魚卸売市場はビサヤ地方の流通と漁撈の近代化と結びついているだけでなく、人のネットワークが織り混ざっている。鮮魚卸売市場に関する民族誌的資料が少ない中、本書の位置づけは重要である。しかし、市場の構造や商品に関する記述は少なく、もっぱらスキ関係など人間関係に焦点が当てられている。市場でのスキ関係は売買の損失を避け、経済的な不確実性に対応する手段であることが示されている。

Davis (1973) は、ルソン島マウンテン・プロビンス州のパギオ市の公設市場の機能について、交換の場、情報交換、購買力のない層に対する販売単位の縮小、信用貸し、中国人に対する団結、貧困層でも商売に参入可能、といった要素を挙げている。市場での商売は、政治的な力学に翻弄されることにも触れられている。市場での売買には、生産者、売り子、露天商、運搬業者、仲買人などが絡み、リスクを軽減するためにスキ関係が構築され、売買と人間関係が良い方向に進展するよう社会が構造化されていることが解明されている。本書は市場の機能、制度、スキ関係について焦点が当てられており、市場の基層を理解する上で貴重な資料であるが、市場のモノの多様性や人のにぎわいについて読み取ることができない。

以上、先行研究では、市場の生態に触れつつも、売買行動における人間関係が中心的な研究対象となっている。特に、スキ関係に見られる人びとの相互関係と、経済的な問題に対する対応に関心が向かっている。市場の全体像や活気を記述として表すことこそ、市場研究の重要課題であると著者は考える。また、Davis が報告した、市場はモノや情報の交換の場であるだけでなく、購買力のない層に対する販売単位の縮小、貧困層でも商売に参入可能という点などが、市場の社会的役割の大きな一部であると考えられる。特に、購買力のない層に対する販売単位の縮小について、フィリピン各地で普通に確認され、もちろん売り子の利益を損することはほとんどないのだが、底辺層の人びとの生計にとって役立つ対応として機能している。市場の構造は複合的であり、人・モノ・情報の交換の場として動態的側面が複雑であることから、体系的な研究は容易ではない。先行研究だけでなく、本稿においてもそれらの課題は十分に克服できていない。

本稿は、マクタン島のコルドヴァ公設市場の農産物売りに着目した予備的調査に基づく。公設市場について、上記の先行研究と重複する点が少ないが、農産物売りを対象にし、かつ農産物の不足と流通に焦点を当てている点で先行研究とは異なる。特に、農産物不足による

栄養的側面に関する記述および考察は先行研究には見られない。本稿の目的は、コルドヴァ公設市場の動態的側面、つまり人とモノの状態と動きを明らかにすることであり、その一端として農産物売りに着目した。農産物はマクタン島では生態的に自給が困難であり、他地域から運ばれてくる。農産物がどこからどのように運ばれてくるかという問題の解明が、本稿の第1の目的である。市場に農産物は並ぶものの、著者が調査の拠点とするスラム地区K集落の貧しい層の人びとなどにとって、値段が高く、入手しづらい。どのように彼らは農産物入手しているのか、あるいは農産物に代わるものを摂取しているのかについて明らかにすることが第2の目的である。K集落の人びとの食生活は、特別の機会を除き、農産物で満たされることはない。人びとは市場を利用するものの、農産物の購買行動は最低限に手控えられる。そのことを明らかにするための食事調査が第3の目的である。以上、市場での農産物と農産物売りに焦点を当てることで、農産物をめぐる市場の状況を記述し、市場に近接する地域の人びとの農産物との接点について社会経済状況、生態環境状況、栄養状況から解明する。

1-2. 調査地の概要

調査地であるコルドヴァは、マクタン島南部に位置する(図1)。コルドヴァは、採石、観光、サービス業(小規模な商店、乗り合い自転車、公設市場など)、沿岸域浅瀬と干潟での漁撈が主な生業である。特に、漁撈に従事する人口が多く、約35%の世帯が漁撈従事者を抱える(Municipality of Cordova 2014)。漁撈に関して、コルドヴァはウツボの産地として有名であり(辻2007a, Tsuji 2013)、毎年8月にはDinagat-Bakasi Festival(海・ウツボ祭り)が開催され地域の一大イベントとなっている(写真1)。コルドヴァは、マクタン島内のMactan Export Processing Zone (MEPZ)(以下、マクタン輸出加工特区)から約4kmの距離にあり、主に高卒以上の人びとは特区内の外資系工場に職を求め、最近(2012年)のコルドヴァの人口は53,322人であり、マクタン輸出加工特区の雇用者のベッドタウンとして年々人口が増加している(Municipality of Cordova 2014)。国内外の観光客の増加と商業の近代化も進んでいる。海辺の観光客向けレストランやリゾートホテルでは、韓国人をはじめ多くの観光客が確認できる。観光客向けレストランでは、2014年頃から、地元の漁民が漁獲するウツボや貝(クモガイ)がメニューに上るようになってきている(辻2015)。世界的大手コンビニエンス・ストアやフィリピンの有名大型スーパーも2014年から2015年にかけて営業を開始した。

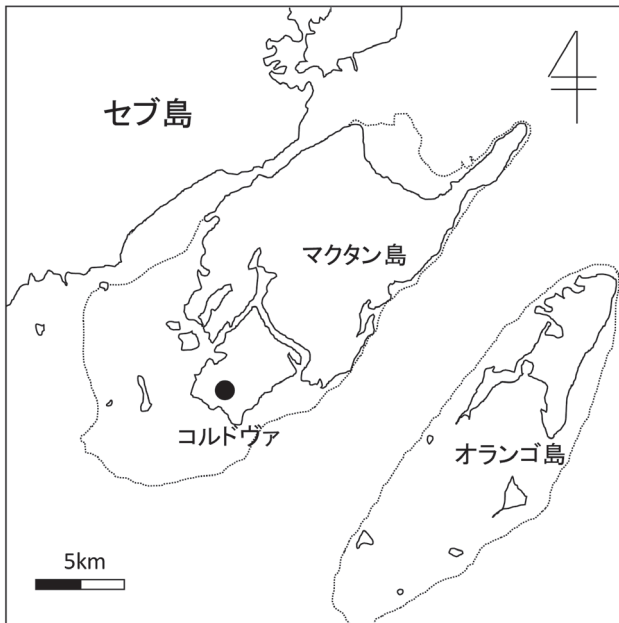


図1 調査地の位置
(Municipality of Cordova 2014 をもとに作成)

1-3. 調査の概要

本稿に関するフィールドワークは、1) 2014年9月6日から9月14日、2) 2015年3月17日から4月4日、3) 2015年7月31日から8月29日の3回にかけて実施した。本稿の内容は、主に3)の調査に依っている。調査地のコルドヴァでは、スラム地区とされるK集落(65世帯351人)の漁民世帯に滞在した。そこから公設市場へは徒歩で1分ほどの距離である。調査は、公設市場の様子の把握と記述、農産物の売買の状況、仕入れ値と売り値、仕入れの方法のほか、K集落の人びとの農産物の購買・摂取状況など人びとと農産物との関係性に着目し、参与観察、個体追跡、インタビューなど調査を行った。本稿で言うところの「農産物」とは、野菜、果物、穀類の総称とし、本文中で統一を試みたが、記述の都合、分けて取り上げている部分もあることを断っておきたい。魚介類と精肉類などほかの商品についてもデータを得たが、全体として議論するには不十分であり、別稿で取り上げることにしたい。公設市場の農産物の売り子が農産物を遠方に仕入れに行く際、乗り合いのジープニー(Jeepney)と呼ばれる乗り物に同乗し、仕入れルート GPS で記録し、人びとの行動を記録した。マクタン島はビサヤ(セブアノ)語圏であるが、調査はタガログ語で行った。1)と2)の調査は帯広畜産大学の平田昌弘氏と共同で行った。本稿の内容の一部に平田氏の取得したデータを引用したが、文責は一切著者にある。

2. コルドヴァの農産物不足をめぐる諸側面

2-1. 生態的側面

マクタン島は石灰岩土壌であり、農耕に適さない(写真2)。よって、農耕用のスイギュウが確認できない。米は石灰岩質のマクタン島では栽培されてこなかったと言われる。島内のバサックという地域では、1990年代あたりまで米が栽培されていたという。バサック(Basak)は湿地帯という地名であり、ビサヤ語およびタガログ語のbasa?「濡れた」に由来すると思われる。バサックはマクタン輸出加工特区の発展に伴う宅地造成のため、水田が消えたと推察できる。スペイン統治期の歴史資料からは、セブ州は農耕地が30%に過ぎず、土の質が悪く、穴ぼこだらけの石灰岩であったことが伺える(Fenner 1985)。また、米ではなく、乾燥に強いキビとトウモロコシが主要作物であったことが記録されている(Scott 1992)。考古学的資料からも、セブ州は海産資源への依存度が他地域に比べきわめて高かったことが推測されている(Galong 2013)。統計資料もまた、セブ州(21.1%)が、周辺の東ネグロス州(42.3%)、ボホール州(33.4%)、シキホール州(32.4%)より耕作可能面積が小さいことを示している(National Statistics Office 2004, 2006)。よって、マクタン島をはじめとするセブ州では生態環境的に農耕の余地が少ないと認識されている。コルドヴァでは一部の篤農家が見栄えの良い菜園を維持しているが、大多数は家の脇などでごく小規模な家庭菜園を営んでいる程度である。農産物は自給ベースでも、商業ベースでもコルドヴァで生産されることは、マクタン島の広域視察調査の結果からもほぼ無きに等しいと言える。

農産物は、セブ島では、フィリピン国内や外国産、そしてセブ島山地部から、セブ島最大の農産物市場であるカルボン市場などに集積される。そして、複数のネットワークを介して、コルドヴァに運ばれてくる。セブ島の農産物の産地として代表的な地域に島南部のマントロンゴン(Mantalongon)が挙げられる。マントロンゴンでは、山地部から120kgほどの農産物の入ったバスケットを背負って降りてくる勇壮な男たちの姿が見られる(写真3)。カルボン市場で売られている農産物の多くは、マントロンゴンなどセブ島山地部産である。カルボン市場で農産物を買う人びとは、農産物の産地の出身者が多く、彼らは産地から親族が輸送する農産物を市場で売る。カルボン市場で農産物を買う人びとはセブ市に居住し、産地とのネットワークが形成されている。直接現地から農産物を買りにくるといふ人も確認された。マントロンゴンをはじめ山地部は気候が冷涼であり、農産物の栽培

に適している。コルドヴァの海拔は 10 m 以下、気温は 18.3 ~ 35℃ (Municipality of Cordova 2014) であるのに対し、マンタロンゴンでは海拔 1,000 m、気温 15 ~ 18℃ほどである。マンタロンゴンの土壌もまた石灰岩土壌であり、表土はコルドヴァよりやや多い印象を受ける (写真 4)。農産物がよく実るのは、冷涼な気候、肥料、農耕技術などが関係していると考えられる。コルドヴァではこれらの要素が欠けている。

コルドヴァの公設市場で確認できる農産物は、主に遠方の山地部から時間と手間をかけてセブ島の中心地に運ばれてきたものを、公設市場の農産物の売り子が労力をかけて仕入れてくるものである。産地からの具体的な流通のプロセスや物価を比較できる資料はないが、流通の過程で農産物の値段が跳ね上がっているのは確かである。なお、役場の資料に「毎週金曜日と土曜日にセブ市山地部の野菜・果物の商人がコルドヴァに商品を売りにくる」(Municipality of Cordova 2014) という記述があるが、聞き取りと目視の結果、確認には至らなかった。スキなどの人間関係を介して農産物を外部から注文している可能性もあるが、調査では確認できなかった。

2-2. 社会的側面

農産物が欠如している生態環境への対応として、人びとはスペイン統治期あるいはそれ以前からあった、キャッサバ、トウモロコシ、タロ、ワサビノキ、バナナ、マンゴー、ココヤシ、グアバ、ジャカトウ、パンノキ、ゴレンシを利用している、と町役場の報告にある (Municipality of Cordova 2014)。K 集落内の自生・半栽培 (栽培種を含む) の植物をリストアップしてみたところ (表 1)、20 種類の植物を確認した。前出の町役場の報告には 11 種類の植物が挙げられているが、K 集落で確認できなかったのはトウモロコシとパンノキである。ほぼ町役場の記載どおりの植物が、基本作物として認識されているとみてよからう。もちろん、トウモロコシとパンノキはコルドヴァ内で普通に確認できる。K 集落内では、タマリンドが最も確認できたが、これは酸味のあるスープを作るのに必須である。次いで、ココヤシが多いが、こちらも調理用のココナツミルクを得るのに重要である。バナナは果物としてだけでなく、蒸したり揚げたりしたものを主食としても利用する。マンゴーも果物としてだけでなく、熟していないものは酸味のあるスープを作るのに用いられる。これらリストの上位の植物をはじめ身近な自生・半栽培の植物を、人びとは農産物の栄養的欠落を補うべく利用していると考えられる。なお、栽培の要素の強いトウガラシ、ナス、タマネギ、オクラも含まれている。本リストで興味深いのは、タロ

表 1 K 集落で確認された自生・反栽培植物 (著者作成)

	和名	学名	方名	地点数
1	タマリンド	<i>Tamarindus indica</i>	sampalok	6
2	ココヤシ	<i>Cocos nucifera</i>	niyog	4
3	バナナ (ガルダヴァ種)	<i>Musa sp.</i>	saging	3
4	マンゴー	<i>Mangifera indica</i>	mangga	3
5	グアバ	<i>Psidium guajava</i>	bayabas	2
6	トウガラシ	<i>Capsicum annuum</i>	sili	2
7	フトモモ科の一種	<i>Syzygium fischeri</i>	tambis	2
8	ミカン科	<i>Triphasia trifolia</i>	limonsito	1
9	パラミツ	<i>Artocarpus heterophyllus</i>	nangka	1
10	キャッサバ	<i>Manihot esculenta</i>	kamoteng kahoy	1
11	ジャカトウ	<i>Annona squamosa</i>	atis	1
12	タロ	<i>Colocasia esculenta</i>	gabi	1
13	ワサビノキ	<i>Moringa oleifera</i>	malunggay	1
14	オクラ	<i>Abelmoschus esculentus</i>	okra	1
15	ツルムラサキ	<i>Basella alba</i>	halobati	1
16	ナス	<i>Solanum melongena</i>	talon	1
17	パパイヤ	<i>Carica papaya</i>	papaya	1
18	タマネギ	<i>Allium cepa</i>	sibuyas	1
19	ゴレンシ	<i>Chrysophyllum cainito</i>	kaimito	1
20	サボジラ	<i>Manilkara zapota</i>	chikos	1

やツルムラサキといった人類の太平洋への拡散とともにあった古い植物に、人びとが今もなお依存していることである。植物にはスペインなどによる植民地経験も読み取ることができる。本稿で、重要な位置づけにあるのはワサビノキである。若い葉っぱを野菜として利用する。ホウレンソウの 4 倍近いビタミン C、タンパク質、カルシウム、鉄分に富む (Quisumbing 1978、吉田・菊池 2001)。ワサビノキは土壌の質の悪さや干ばつの影響をほとんど受けずに速く生育する (Brown 1921)。最近、日本でも健康食品として注目されている。ワサビノキは日常的に食卓に上る。特に、スープの具材となる (写真 5)。農産物の利用に乏しい人びとが繁くこの植物の葉っぱを利用することは、古くからその栄養的側面を見抜いてきたからであろう。人びとはワサビノキにこれほどの栄養があるとは語らないが、在来の慣習で利用していると考えられる。ワサビノキは自生 (インド北部原産) であり、地域によっては自由に採取しているが、K 集落では所有者がおり、断りを入れてから採取するか、代金を支払う。公設市場では、ワサビノキは 1 束 10 ペソほどで売られている (写真 6)。

2-3. 経済的側面

コルドヴァでは、40.7%の世帯が貧困層である。非雇用率は 38%である。推定の世帯年収 60,000 ペソ以下の世帯が 27%、60,000 ~ 120,000 ペソの世帯が 35%を占める。残りの 38%を 120,000 ペソ以上の世帯が占める。平均年収は 156,444 ペソであり、平均的な家族

表2 K集落の46世帯を対象とした世帯人数と世帯数

(簡易質問紙により著者作成)

世帯人数	世帯数	世帯人数合計
9	1 (2.2%)	9 (4.1%)
8	2 (4.3%)	16 (7.2%)
7	7 (15.2%)	49 (22.1%)
6	8 (17.4%)	48 (21.6%)
5	8 (17.4%)	40 (18.0%)
4	8 (17.4%)	32 (14.4%)
3	4 (8.7%)	12 (5.4%)
2	8 (17.4%)	16 (7.2%)
合計	46 (100%)	222 (100%)

人数6人がぎりぎりやりくりできる額である。69.6%の世帯が1日の生活費に余裕がない状況である。人口の36%を15歳以下が占める(Municipality of Cordova 2004)。

以上、コルドヴァでは貧困のため非雇用の状態に置かれている世帯や人びとは4割に達し、平均以下の年収で暮らしている世帯は6割に上る。生産年齢以下の人口が4割を占め、学費や養育費など家計を圧迫する要因になっている。生産年齢以下の人口が多いほど、家計への圧力は強まる。小学校と高等学校にしか進学しない割合は75%に上る(Municipality of Cordova 2010)。役場やマクタン輸出加工特区で働くことができるのは、高卒以上である。定職がない場合、1日350ペソ程度の日雇いなどの賃労働を取り入れて生活の危機をしのご。

K集落では、コルドヴァの中でも貧困層が多く集住している。水道、ガス、トイレが十分に普及しておらず、電気の代わりに灯油ランプを用いる世帯もある。生活用水は井戸水を利用している。調理の際の煮炊きには薪や炭を用いている。近年、安価なウォーター・サーバーやカセット・コンロが浸透しつつある。

K集落で実施した、世帯人数(n=46世帯)と生業形態(n=50世帯)に関する簡易質問紙調査の結果をここで挙げておきたい。まず、世帯人数(表2)についてだが、2~9人の範囲であった。世帯人数が4~7人の世帯が最も多く、次いで2人が多い結果となった。簡易質問紙調査で得られた総人数は222人であり、世帯人数4~7人の世帯の世帯人数合計が多い。世帯総人数(n=222人)を世帯数(n=46世帯)で割るとK集落の平均世帯人数は4.8人となり、コルドヴァの平均あるいはフィリピンの平均とされる6人より低い数値となった。統計によるフィリピンの平均世帯人数は4.6人である(National Statistics Office 2010)。コルドヴァの役場資料では平均6人と記されているが(Municipality of Cordova 2004)、平均世帯人数を同様に算出すると5.6人である。フィリピンではしばしば平均世帯人数は6

表3 K集落の男女別就業形態

(簡易質問紙により著者作成)

職種	男性	女性
漁撈	7 (16.7%)	0 (0.0%)
市場での魚・貝売り	0 (0.0%)	9 (17.6%)
無職	7 (16.7%)	1 (2.0%)
日雇い労働	5 (11.9%)	0 (0.0%)
主婦	0 (0.0%)	29 (56.9%)
トリシカッド・トライシクル	7 (16.7%)	0 (0.0%)
貝細工	2 (4.8%)	0 (0.0%)
商店売り子	0 (0.0%)	1 (2.0%)
ガードマン	1 (2.4%)	0 (0.0%)
教員	0 (0.0%)	1 (2.0%)
家政婦	0 (0.0%)	1 (2.0%)
修理工	2 (4.8%)	0 (0.0%)
配達業	1 (2.4%)	0 (0.0%)
製造業	9 (21.4%)	8 (15.7%)
海外出稼ぎ	0 (0.0%)	1 (2.0%)
船乗り	1 (2.4%)	0 (0.0%)
合計	42 (100%)	51 (100%)

人だと語られるが、バイアスがあることを確認しておきたい。つまり、K集落の世帯人数(4.8人)はフィリピンの平均(4.6人)よりは多いが、コルドヴァの平均(5.6人)よりは少ない。世帯人数が多いから貧困であるという言説は、確かにそのような傾向と側面はあるかと思われるが、厳密にはあてはまらないだろう。世帯外に扶養家族や親族がいる場合、双系制のフィリピン社会では扶助の対象となる。数字に現れない扶養者を調べた上で、人びとの経済的状态をとらえる必要がある。

K集落の生業形態(表3)について、男性は漁撈、無職、日雇い労働、トリシカッド(*triskad*)・トライシクル(*tricycle*)の運転手、製造業が主である。無職や日雇い労働でも、漁撈に出ることがあるので、単に無職や日雇いととらえることはできない。トリシカッド・トライシクル運転手は、これらの乗り物を購入する資本が必要である。雇われ運転手の場合は雇い主との社会関係が必要である。製造業はマクタン輸出加工特区で働くことであり、高卒以上の学歴が求められる。女性は、市場での魚・貝売り、主婦、製造業が主である。市場での魚・貝売りは、家族が漁獲した海産物を公設市場で売るが、自身も海に出て特に貝類を採捕する場合もある。主婦もまた、海に出ることがある。製造業は男性と同じ形態である。海外出稼ぎや船乗りは、学歴があり、高収入を得やすいホワイトカラーとみなされる傾向がある。

世帯人数と生業形態について、世帯人数が多いことと貧困であることは必ずしも結びつくものではないことが浮かび上がった。また、男性の無職・日雇い労働、女性が主婦であることが目立った。セブ州の最低法定賃金は月7,000ペソほどであり、日雇いだと350ペソ程度である。この数字は役場の推定より低く、実際の生活はよ

表4 K集落の1女性JMの2015年3月19日～21日の3日間における栄養摂取状況（平田昌弘未発表データ）

	エネルギー		タンパク質		脂質		炭水化物		灰分	
	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率
	kcal	(%)	g	(%)	g	(%)	g	(%)	g	(%)
1日当りの食料総摂取量	1320.9		38.9		25.1		232.2		6.6	
内、自給量 (自給率%)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
内、購入量 (市場依存率%)	1320.9	(100.0)	38.9	(100.0)	25.1	(100.0)	232.2	(100.0)	6.6	(100.0)
内、分配供給量 (分配依存率%)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
内、労働対価供給量 (労働対価依存率%)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
地域内供給量 (地域内供給率%)	46.5	(3.4)	5.9	(14.9)	1.9	(6.4)	2.2	(1.0)	0.7	(10.7)
地域外供給量 (地域外供給率%)	1274.4	(96.6)	33.1	(85.1)	23.2	(93.6)	230.0	(99.0)	6.0	(89.9)
魚介類依存量 (魚介類への依存率%)	87.9	(6.7)	12.7	(32.8)	4.0	(18.6)	1.9	(0.8)	1.1	(16.9)
肉類依存量 (肉類への依存率%)	30.7	(2.3)	1.3	(3.3)	2.5	(8.7)	0.6	(0.3)	0.2	(3.7)
乳製品依存量 (乳製品への依存率%)	7.9	(0.6)	0.5	(1.2)	0.3	(1.7)	0.7	(0.3)	0.0	(0.0)
砂糖依存量 (砂糖への依存率%)	12.5	(0.9)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	37.4	(16.1)	0.0	(0.0)
米類依存量 (米への依存率%)	614.4	(47.2)	10.5	(27.2)	1.6	(7.5)	133.1	(57.4)	0.7	(10.7)
豆類依存量 (豆への依存率%)	10.7	(0.9)	0.8	(2.0)	0.0	(0.3)	1.8	(0.8)	0.1	(1.8)
油類依存量 (油への依存率%)	49.0	(3.6)	0.3	(0.8)	5.7	(22.2)	0.3	(0.1)	0.1	(1.0)
塩分摂取量									1.9	

りきびしいことが推察される。日々の食料、嗜好品、子どもの小遣いや学費、光熱費、雑費など、実際に家族を養うには苦しい額である。K集落では、生活苦のため、違法漁業に従事したり、消費者金融に手を出したりしている人もいる。マクタン輸出加工特区で働く人たちは、11,000～27,000ペソの月収を得ているが、生活が豊かであるわけでない。稼いだお金は、家族や親族のために消費される。

以上、収入を多く得ても、生活の余裕にはつながりにくい経済構造にある。生産年齢以下の子どもや体の不自由な老人などを抱えると、食料が逼迫する。1日に3食を食べられないことや、穀類を食の基本としつつも、野菜、果物、魚介類、肉といった副食の購入がしづらいことが恒常化している。魚介類は何とか自給できるレベルであるが、そのほかは外部に依存しなければならない。本稿の主題である農産物をはじめ、経済的な問題が栄養問題としても具現化している。

2-4. 栄養的側面

K集落の住民は野菜をはじめ栄養不足の状態にある傾向が伺われる。住民の栄養について計量したのが表4と表5である。これらの表は集落内の2人の主婦JM(43歳)とRE(54歳)の栄養状態を示したものであ

る。JMのデータは2015年3月19日～21日の3日間、REのデータは2015年3月23日と27日の2日間に取得されたものである。栄養調査は常に個体に密着して、摂取した食物を記録することから、大勢の人数のデータを短期間に得ることは容易ではない。また、主婦を対象としているが、主婦が最も家屋に定着しており、観察が比較的しやすいことから調査の対象として選んだ。それでも、目を離れた時に買い食いなどをすることがあり、本稿のデータはこうした問題点を含むが、おおよその傾向をとらえたものである。

調査の結果、JMの平均摂取カロリーは1,320.9kcalという数値であった。フィリピン人にとって目標とされる2,000kcalを大きく下回っている。この背景として、彼女が8人の子どもを出産し、現在6人の子どもと孫1人の面倒を見ていること、漁を主に行う夫に定職がなく家計に回す稼ぎが十分でないこと、そして彼女自身が小食であることなどが要因として考えられる。一方、REの平均摂取カロリーは1677.7kcalであった。REの夫と息子は積極的に漁を行い、彼女はその漁獲を公設市場で売って生計を立てている。JMに比べ、夫の漁での定期的収入があること、労働力としての息子がいること(JMは長女と次女を持つが、共に結婚歴があり、長女

表5 K集落の1女性REの2015年3月23日と27日の2日間における栄養摂取状況（平田昌弘未発表データ）

	エネルギー		タンパク質		脂質		炭水化物		灰分	
	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率	摂取量	摂取比率
	kcal	(%)	g	(%)	g	(%)	g	(%)	g	(%)
1日当りの食料総摂取量	1677.7		57.3		35.0		290.2		9.9	
内、自給量 (自給率%)	178.9	(10.1)	27.0	(43.4)	9.0	(23.2)	0.2	(0.1)	1.7	(15.7)
内、購入量 (市場依存率%)	1498.8	(89.9)	30.4	(56.6)	26.0	(76.8)	290	(99.9)	8.2	(84.3)
内、分配供給量 (分配依存率%)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
内、労働対価供給量 (労働対価依存率%)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
地域内供給量 (地域内供給率%)	261.4	(14.7)	28.0	(45.2)	13.0	(32.5)	8.7	(3.2)	1.8	(17.9)
地域外供給量 (地域外供給率%)	1465.8	(88.0)	29.7	(55.2)	24.1	(71.7)	288.5	(99.4)	8.3	(86.1)
魚介類依存量 (魚介類への依存率%)	178.9	(10.1)	27.0	(43.4)	9.0	(23.2)	0.2	(0.1)	1.7	(15.7)
肉類依存量 (肉類への依存率%)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
乳製品依存量 (乳製品への依存率%)	27.3	(1.7)	1.3	(3.2)	1.0	(4.4)	3	(1.0)	0.0	(0.3)
砂糖依存量 (砂糖への依存率%)	60.0	(4.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	61.4	(21.7)	0.0	(0.0)
米類依存量 (米への依存率%)	677.0	(41.4)	9.0	(18.9)	1.3	(5.1)	153.2	(52.5)	0.6	(7.9)
豆類依存量 (豆への依存率%)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
油類依存量 (油への依存率%)	34.7	(1.9)	0.0	(0.0)	3.8	(7.6)	0.0	(0.0)	0.0	(0.0)
塩分摂取量									2.5	

は娘を実家に預けマニラに出稼ぎ、次女はラブラブ市で子育てをしつつ学業を続けている)、手のかかる幼い子どもがおらず公設市場で働けることなど、経済活動に従事できる家族状況にあると考えられる。

JMが摂取するカロリーの96.6%は地域外供給、つまり自分たちで生産したものやコルドヴァ内で入手できるものではなく、公設市場や食堂などでの購入をとおして摂取する。労働で得られる資源で生計を展開するのではなく、ほぼ購買による資源を消費することで済ませる栄養摂取構造である。十分な生業資源や収入があれば収支は成り立つが、家計が苦しいJMのような場合、貧困に拍車をかける。特に、毎日の食事のおかずは、調理するより、外部の食堂などで購入する方が楽で手間もかからない。JMは子どもの世話や大量の衣類の洗濯をはじめ、一日中家事に忙殺されている。実際、消費に家計は圧迫されており、親族のネットワークを駆使し、食物の融通をつけたり、借金をしたりする。JMの夫は高金利の貸金業者に借金をしている。このような家計事情がJMの低い摂取カロリーとして現れているのかも知れない。一方、REの場合、摂取カロリーの地域外供給率は88%である。こちらも高い数値であるが、魚介類の生産と販売が貢献していると推察できる。魚介類への依存率も、

RE(10.1%)がJM(6.7%)を上回っていることから若干支持できる。肉類の依存率は、JM(2.3%)、RE(0.0%)であるが、JMは食堂などで既製品のソーセージやフライドチキンを頻繁に購入するからであろう。肉類、特に家畜の肉は、誕生日や祭りなど、特別の機会に食される。乳製品は練乳を使った菓子やコーヒーミルクなどであり、嗜好品である。JMの依存率は0.6%、REは1.7%である。砂糖依存率は、主に嗜好品であるコーヒの飲用と関係する。JMの依存率は0.9%、REでは4.0%である。嗜好品の場合、経済的に余裕があれば依存率が高いと言えるかも知れない。しかし、ミクロなレベルにおいての現象の解釈に過ぎない。米への依存率は、JMは47.2%、REは41.4%とどちらも高い割合である。米は主食であり、おかずよりも優先される。JMの方がREより依存率が高いのは、幼児や育ち盛りの子どもを抱えているからであろう。JMは毎日のように、幼児や年少の子どもの口に米と若干のおかずを手で運んで食べさせていた。家計に余裕がない場合はトウモロコシが代用され、危機的な場合は米がない状態になる。マメ類依存率について、本稿は農産物一般を対象としているが、調査の関係上、マメ類に特化した項目となってしまった。後ほど、農産物の摂取について補足したい。マメ類につ

いては、JMは0.9%、REは0.0%であった。マメ類の摂取が低いことをREは示している。JMも同様の傾向にあるが、息子が公設市場の農産物売り部門の清掃を手伝ったことでただでもらってきたクズ野菜に含まれていたジュウロクササゲ、スープなどに調理されるリョクトウを摂取した数値である。油類依存率は、JMは3.6%、REは1.9%だった。両者の差について、調理法や健康意識の違いが反映していると仮定しておく。高血圧や糖尿病の人びとは少なくなく、これらの疾患はだんだん深刻視されてきているようである。それでも、油を用いた料理は、味つけだけでなく、食物を保存する上でも欠かせない。塩分摂取量は、JMは1.9%、REは2.5%だった。これも油類と同様、調理法の違いと言えるかも知れないが、健康意識の違いとは矛盾する。REの世帯の方がJMの世帯より年配なので、健康を意識するようなら塩分の使用は控えられてしかるべきである。油類や塩分はそこまで注意深く利用されていないと考える方が自然である。

栄養素については、フィリピン国内の比較可能な資料が手元にないが、便宜的に日本人の資料（香川編2014）と比較すると、タンパク質はJMが38.9g、REが57.3g摂取しており、2011年の日本人の平均67gを下回る。JMの数値は明らかに低く、REは日本人の数値により近い。脂質はJMが25.1g、REが31gであり、両者とも日本人の平均54gを大きく下回る。炭水化物は、JMが232.2g、REが290.2gであり、日本人の平均255gと大差ない。灰分については参照できる資料がなく、割愛した。2009年のフィリピンの1人1日あたりの摂取カロリー表（香川編2014）を参照した場合、魚介類への依存度の平均は70kcalであり、JMが84.8kcal、REが178.9kcalであり、共に平均を上回っている。このことは彼女らが漁家に属していることと大きく結びつくであろう。JMとREの間には2倍以上の差があるが、JMの夫が調査当時、漁撈より建築現場の賃労働に主に従事し、一方、REの夫と息子は漁撈に専心していたことが理由であると考えられる。肉類への依存度はJMが30.7kcal、REが0.0kcalであり、フィリピンの平均238kcalとは別次元の印象を受ける。一般的にフィリピン人は肉を好むが、肉がほとんど摂取されていない結果となった。乳製品では、平均18kcalに対し、JMは7.9kcal、REは27.3kcalと平均を挟んだ結果となった。砂糖の平均は224kcalであるが、JMは12.5kcal、REは60kcalであり共に不足している結果が出た。米類の平均は1,432kcalだが、JMは614.4kcal、REは677kcalであり、共に平均の半分以下の数値となった。

表6 K集落1世帯の2015年3月19日～20日における農産物摂取状況

(平田昌弘未発表データをもとに著者作成)

	2015年3月19日		2015年3月20日	
	摂取比率		摂取比率	
野菜	kcal	(%)	kcal	(%)
タマネギ	15	13	0	0
タマネギの葉	23	19	9	4
トマト	66	55	0	0
トウガラシ	16	13	0	0
リョクトウ(スープ)	0	0	160	69
ワサビノキ	0	0	64	27
合計	105	100	233	100

豆類の平均は17kcalであり、JMは10.7kcal、REは0.0kcalであり、積極的に摂取されていないようである。油類の平均は171kcalであるが、JMは49kcal、REは34.7kcalであり、両者とも平均を大きく下回った。

農産物の摂取状況に関して、2015年3月19日から20日の2日間におけるJM世帯のデータを報告する(表6)。重量のデータが欠損しているが、6種類の農産物が食卓に上るのが確認できた。タマネギとタマネギの葉は同一であると混乱を招くことがあるかも知れないが、両者とも品種の違うタマネギなので別種とした。リョクトウを除き、日常的にほぼ普通に摂取される農産物である。リョクトウはスープに調理された既製品である。3月19日は4種類、3月20日は3種類の農産物が食された。前者は105kcal、後者は233kcalであるが、この数字は家族全員分である。世帯構成員は、7人であり、40代の夫婦2人、15～17歳の男女2人、12～14歳の男女2人、1～2歳の女1人である。ここでは性差と年齢を考慮していないフィリピンの1人1日あたりの農産物エネルギー供給量76kcal（香川編2014）との比較を行う。2日間の農産物摂取量105kcalと233kcalの数値を世帯構成員7人で割ると、それぞれ15kcalと33.2kcalとなる。結果、フィリピンの平均値よりおよそ5分の1から2分の1の農産物摂取量であることが、ごく部分的ではあるが認められる。

以上、主に2人の女性の個体差と数日間の調査に基づいた結果である。個体史、家族史、社会史などの背景、調査の質的問題、分析手法など様々な課題が残るが、蓋然性は認められると思われる。農産物の摂取については、K集落の限られた事例であるが、フィリピンの平均より20～50%低い結果が出た。公設市場が近く、農産物にアクセスしやすい位置にいるにも関わらず、農産物が不足している。そこには、農産物が購入できない経済的事情のほか、農産物を分配してもらえない人間関係が希薄な社会的事情などが影響していると考えられる。

3. コルドヴァの公設市場と農産物のネットワーク

3-1. 公設市場の構造

コルドヴァの公設市場は、「中心地」を意味するバランガイ・ポブラシオン (Barangay Poblacion) に位置する。バランガイとは行政区を表し、コルドヴァには13のバランガイが確認できる。バランガイに包摂される下部の単位はシティオ (Sitio) であり、集落や村のイメージに近い。コルドヴァには66のシティオが存在する (Municipality of Cordova 2004、2010、2014)。K集落は市場に隣接して立地している。市場周辺には、ポブラシオン行政区役場のバランガイ・ホール、体育館、公園、教会、高校、コルドヴァ町役場などがある。また、客待ちするトリシカッドやトライシクルで市場の正面とその付近は混雑している (写真7)。市場は、売り子や店舗ごとの判断は異なるが、基本的に毎日開いている。定期市の存在は確認できていない。祭りなど活気のあるイベントがある時、他地域からの行商人が多く確認できる。公設市場を模式図化したのが図2である。市場の建物自体はAとBで示した空間であり、屋根で覆われる。Aは鮮魚、野菜、果物、精肉などを扱う生鮮部門である。基本的に縦に4列の1m四方ほどのブースが並び、ブースはタイル張り、電球と、売り子の名前と番号を示した看板が掛けられている。縦列の鮮魚のブースは2列28軒あり、看板には女性の名前26、男性の名前1、不明1が確認できるが、売り子は女性がほとんどであり、男性は見かけない。右側の1列目のブースでは、図では「魚」と示したが、ほとんどコルドヴァで獲られた魚介類が売られている。K集落の女性たちはこの列で夫や親族が漁獲した地場の魚介類を売る。魚介類は、コルドヴァの周辺離島やポホール島などからも親族やスキのネットワークを介して運ばれる。売り子の居住地はコルドヴァ内がほとんどだが、コルドヴァの離島 (ヒロトゥンガン島など) も含まれる。2列目の魚のブースでは、主にセブ本島のパシル市場 (Pasil Market) など外部から運ばれてくる魚が売られている。コルドヴァと境を接するラプラプ市 (Lapu-Lapu City) のババグ (Babag) の養殖池からも、収穫期にはサバヒー (bangus)、いわゆるミルクフィッシュが運ばれてくる。Aの空間には製氷機があり、魚介類はコルドヴァの公設市場からまた別の場所に運ばれて行くようである。

た看板が掛けられている。縦列の鮮魚のブースは2列28軒あり、看板には女性の名前26、男性の名前1、不明1が確認できるが、売り子は女性がほとんどであり、男性は見かけない。右側の1列目のブースでは、図では「魚」と示したが、ほとんどコルドヴァで獲られた魚介類が売られている。K集落の女性たちはこの列で夫や親族が漁獲した地場の魚介類を売る。魚介類は、コルドヴァの周辺離島やポホール島などからも親族やスキのネットワークを介して運ばれる。売り子の居住地はコルドヴァ内がほとんどだが、コルドヴァの離島 (ヒロトゥンガン島など) も含まれる。2列目の魚のブースでは、主にセブ本島のパシル市場 (Pasil Market) など外部から運ばれてくる魚が売られている。コルドヴァと境を接するラプラプ市 (Lapu-Lapu City) のババグ (Babag) の養殖池からも、収穫期にはサバヒー (bangus)、いわゆるミルクフィッシュが運ばれてくる。Aの空間には製氷機があり、魚介類はコルドヴァの公設市場からまた別の場所に運ばれて行くようである。

Aの空間の縦3列目と4列目では、主に野菜と果物が売られている (写真8)。図では、野菜と果物を「野菜」と一括した。野菜のみを扱う売り子、果物のみを扱う売り子、両方を扱う売り子の区別については、本稿では明

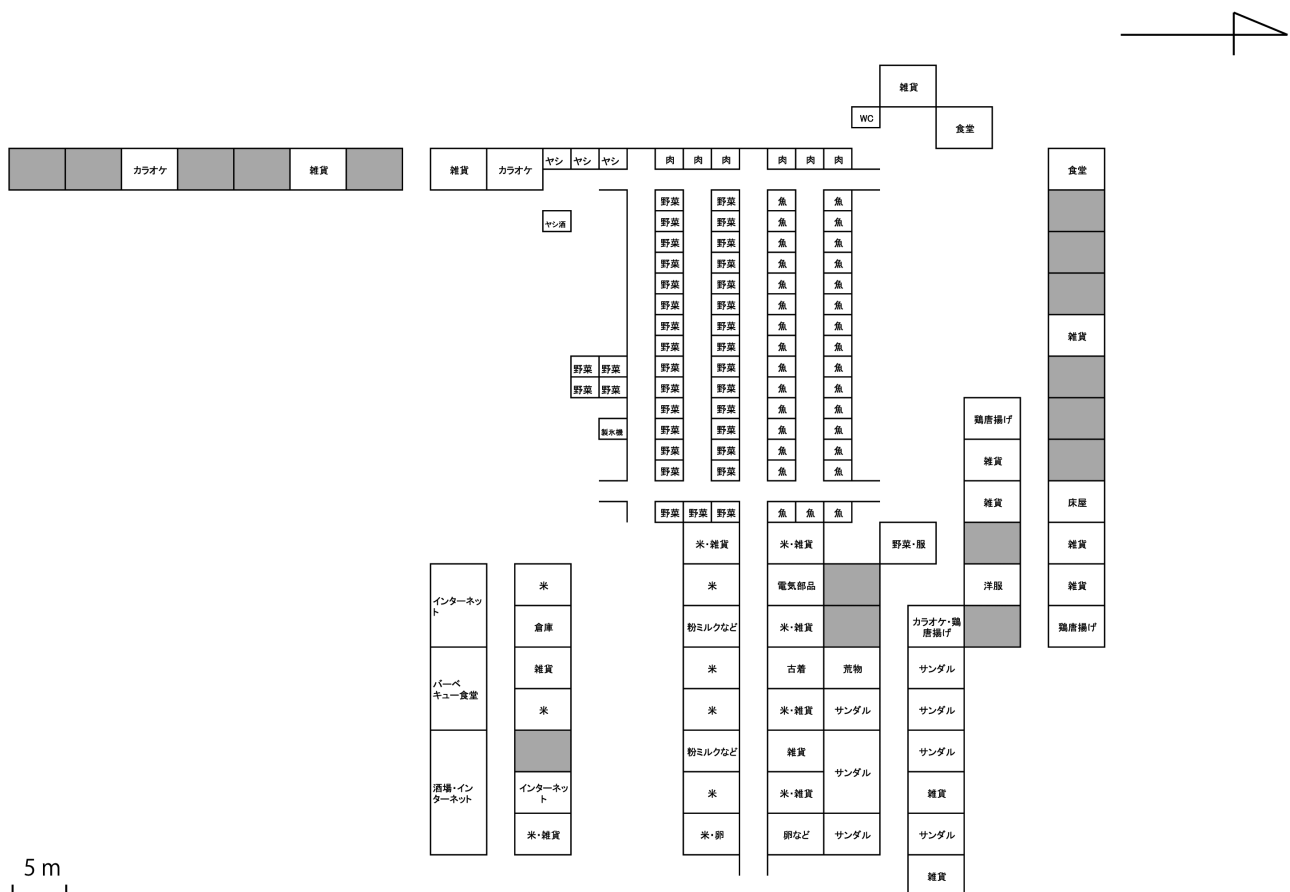


図2 コルドヴァ公設市場と周辺の模式図 (著者作成)

確にしきれていない。時によって扱う商品の項目に変化が見られるなどの要因があるが、今後、精度の高い観察と聞き取りで売り子の特性を明らかにする必要がある。ブースの看板には女性の名前 24、男性の名前 3、不明 1 が確認できた。1 人で 2 軒のブースを借りているケースが 1 件あった。売り子のほとんどは女性である。野菜売りの中には 4 列目の左に 4 軒確認できるよう、ブースと同じくらいの大きさの小型店舗を併用している者もいる。これらに名前や番号は確認できない。

A の空間上部には、「肉」と「ヤシ」を扱うブースがある。肉のブースには店の屋号と番号が確認できる。鶏肉と豚肉、ソーセージなどを扱っている。鶏肉はセブ本島の数業者（3 業者ほど）が、コルドヴァの鶏肉の流通を寡占している。豚肉は、セブ本島の養豚場から買いつける。牛肉はあまり市場には現れない。売り子の性差は女性と男性どちらも確認できた。ヤシを扱うブースでは、皮を向いたヤシの実（*butong*）が売られる。

ヤシの実カルボン市場（Carbon Market）周辺の露店で購入される。ブースにはヤシの実の中身の胚乳部分を削るグラインダーが設置されており、胚乳部分を粉にして客に渡す。粉に水を加えて絞るとココナツミルクができる。グラインダーを使った仕事は労力を要するので、売り子は男性である。ブースの名前や番号は確認できなかった。ヤシのブースの側には、「ヤシ酒」（*tuba?*）を扱うブースがある。ヤシ酒はボホール島から毎日運ばれてくる。売り子は女性である。そのほか、空間 A の下部には魚と野菜を扱う売り子がいるが、ブースはなく、テーブルの上に商品が並べられているだけであり、ブースのような名前や番号はない。空間 A の周辺には、各自持ち寄った魚や野菜を地べたで売る人もいる。ブースがある人から、地べたで売る人まで、市場使用料を支払う義務がある。役場の集金係の女性がレシートと引き換えに使用料を徴収していたが、ほとんどが 10～20 ペソであった。商いの規模や時間によって使用料は変わってくると思われる。中には、月ごとに支払っている売り子もおり、一概に判別しにくい。

B の空間では、「米」、「米・雑貨」、「サンダル」を商う店舗が目立つ。こちらはブースでなく店舗である。店舗には看板が立てられている。市場使用料は年ごとに徴収されるという。米については次章でも触れるが、「米」を商う店舗と「米・雑貨」を扱う店舗では米の入手経路が違う。前者は卸売り業者から、後者はカルボン市場やマクタン島の中心部にあるラプラプ市場から入手する。雑貨とは、油、しょう油、塩、味の素、酢、練乳など、調理に必要な調味料や缶詰などを指す。菓子や飲み物を

一般的に扱うサリサリ・ストアとはやや異なる。雑貨は、セブ本島のマンダウエ市（Mandaue City）内で入手するという売り子もいるが、全体像と具体性は現段階では不明である。サンダルは消耗品であることから、店舗がそろっていることが伺える。すり切れたサンダルは、切り刻んで袋詰めにして売られる。調理の際の着火剤として重宝されている。

A と B は、ブースと店舗という違いから、経済力の違いが推測される。A の空間の売り子は、商品の漁獲や頻繁な仕入れの観点から移動的であり、B の空間の売り子はより定定的であるとの見方もできる。

A と B 以外の市場周辺の店舗は、もとは市場の利用者を目当てに出現したのであろう。「食堂」は市場の利用者や、K 集落の人びとのような周辺住民の食に役立っている。最近では、「鳥の唐揚げ」ビジネスが盛況のようである。「カラオケ」もフィリピン人の娯楽には欠かせない。「雑貨」はサリサリ・ストアのことである。「サンダル」の店舗も市場同様、目立つ。「インターネット」は、インターネットの利用も可能だが、ほぼゲームセンター化している。「WC」はトイレだが、1 回 10 ペソ程度を使用料として支払う有料トイレである。

なお、図において、市場とその周辺店舗のうち灰色で示したものは常に閉まったままの状態であった。業態については不明である。

市場の利用時間と利用客数について記録したのが表 7 である。野菜、魚介類、精肉を扱う生鮮部門の空間のみを対象とし、穀類、雑貨を扱う部門はデータ取得上の混乱を避けるため対象外とした。5 時半から 19 時半までの 1 時間ごとに、市場の利用客の数をカウントした。5 時半から 19 時半までを対象時間帯としたが、24 時間観察した結果、利用客の行動時間帯とほぼ一致している。調査の都合上、8 月 18 日、19 日、22 日の 3 日間

表 7 コルドヴァ公設市場の利用者数の時間的推移

時間	8月18日(火)	8月19日(水)	8月22日(土)	(%)
5:30	-	-	6	1.2
6:30	-	-	14	2.8
7:30	-	-	17	3.4
8:30	-	17	-	3.4
9:30	-	11	-	2.2
10:30	-	19	-	3.8
11:30	-	7	-	1.4
12:30	-	5	-	1.0
13:30	-	4	-	0.8
14:30	-	29	-	5.8
15:30	-	38	-	7.6
16:30	-	97	-	19.4
17:30	160	-	-	32.0
18:30	70	-	-	14.0
19:30	6	-	-	1.2
				100

にデータが分かれてしまったが、おおよその傾向を見ることが出来る。利用客に抱えられていた乳飲み子については少なくないが本表ではカウントしていない。市場には5時半には利用客が現れはじめ、19時半には終息に向かう。利用客が最も多い時間帯は17時半で、160人(32.0%)を確認した。夕食の準備のための買い物客が多い。最小は13時半の4人(0.8%)であった。朝方の利用客数は、本表の8月19日(水)では目立って多くない。朝食や昼食の準備に通常ではより多くの利用客が確認できるが、この日は台風のため魚介類が市場に届くのが大幅に遅れたことが影響したことを指摘しておきたい。なお、調査では、売り子の数についてはカウントしなかった。各販売ブースに、基本的に1人が登録されているが、最少1人、スペースの都合、最大3人程度である。売り子が複数の場合、たいてい親子関係や親族関係にあり、休憩交代などの時間により人員の構成に変化も見られる。売り子同士の社会関係、さらには売り子と利用客の社会関係についての調査は今後の課題である。

3-2. 農産物の仕入れ

農産物や魚介類の仕入れは、深夜にセブ本島のカルボン市場周辺とパシル市場で行われる。カルボン市場周辺では主に農産物が、パシル市場では魚介類が買い求められる。コルドヴァでは、日中は、モーティカブが長距離輸送を担っており、大型のジープニーは確認できない。深夜になると、普段はマクタン島の中心地ラプラプ市内やセブ本島市内を走っているジープニーが現れる。ジープニーは23時から1時半の間に、最低3便あることを確認した。モーティカブも運行しているが、買い出しの帰りは荷物があることからジープニーが選択されると思われる。

著者は、2016年8月19日、3便のうち2便を運行するジープニーの1台に乗車し、乗客と乗員の動きを観察するとともに、市場との往復ルートをGPSで捕捉した(図3)。ジープニーの構成員は、運転手1人と荷夫2人であった。いずれも雇われており、1日2回の運行で、運転手の日当は300~400ペソ、荷夫はその半分である。オーナーはセブ市内で商店を営んでおり、夜はもう1台のジープニーの運転手として働く。モーティカブも1台所有する。カルボン市場周辺へのジープニーは23時と23時半に運行させている。コルドヴァからカルボン市場周辺までの運賃は片道25ペソである。23時半発のジープニーには11人の乗客がおり、いずれも女性であった。ジープニーは23時53分に出発した。途中、道路沿いで8人の乗客を拾った。8人のうち、

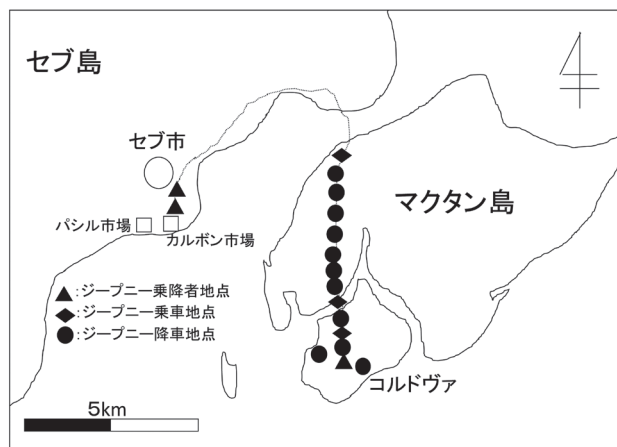


図3 コルドヴァからセブ本島への野菜の仕入れルート (著者作成)

6人は男女の組で、2人は女性だった。ラプラプ市の中心部を通過し、24時31分、カルボン市場周辺のある地点で4人が降車した。24時40分、カルボン市場周辺の繁華街の中でジープニーが停車した。コルドヴァから50分ほどの移動時間を要した。乗客たちはジープニーから降りると、それぞれ買い物に散って行った。ジープニーはこの場所で3時半まで乗客を待ち、乗客が購入した荷物を積んで、コルドヴァに引き返す。繁華街の路上には多くの露店が並び、大量かつ様々な農産物を売っている(写真9)。コルドヴァの公設市場の農産物売りの人びとは、カルボン「市場」ではなく、カルボン市場周辺の繁華街の「露店」で農産物を買う。露店の方が、カルボン市場より安値で買える。人びとは少しでも安い農産物を求めて、露店を物色する。露店で農産物を売る人びとは、カルボン市場で農産物を売る人びとはではないと言われる。繁華街の店舗の営業が終了すると、店の前に露店を出す。彼らが商う農産物は、セブ島山地部の、バリリ(Barili)、アルガオ(Argao)、ダラゲティ(Dalagute、マンタロンゴン)などから運ばれてくる。魚介類を買い物する人は、トリシカッドでパシル市場に向かう。繁華街から5分程度の距離であり、運賃は20ペソであった。復路、ジープニーの出発前になると車内は人で、屋根の荷物置きには荷物であふれ返った(写真10)。乗客は往路が18人であったが、復路は最低27人に増加した。往路以外の乗客も乗車した。乗客の半数は単独の女性であった。深夜であったが、数人の子どもも確認できた。3時半発のジープニーは3時22分に出発した。続いて、オーナーが運転するもう1台のジープニーも発車した。乗客はラプラプ市やコルドヴァの各地点でそれぞれ降車し、4時17分、ジープニーはコルドヴァの公設市場に到着した。荷物を降ろし、4時29分、ジープニーは役目を終えた。ジープニーが2台利用されたが、儲けを

上げることも去ることながら、治安が良くないとされる深夜のカルボン市場周辺の繁華街および道中の自己防衛のための隊列が組まれていると思われる。

仕入れを済ませた農産物売りの初老の女性乗客は、公設市場に戻るなり、休息も取らずに、すぐに農産物を加工し、販売を始めた。客足の少なくなる午前中頃に睡眠をとり、再び深夜には農産物の仕入れに向向くという。彼女は痴呆気味の父親と、隣に店を構える親族と農産物売りをしているが、意思決定は彼女が主に行っていた。農産物は、管理が重要であり、管理を蔑ろにしたり、運が悪かったりするとネズミの食害などによるリスクがある。食害された農産物は、切り売りして販売不能なほどダメージが大きい（写真 11）。農産物売りは、経済市場での農産物の市場価格の急落のほか、こうした農産物の価値が失われる損傷の危機に曝されている。

3-3. 農産物の値段

コルドヴァの公設市場では、少なくとも 30 軒の農産物売りがしのぎを削っている。農産物の値段は、仕入れの経費や儲けを含んでいるが、農産物売り間で淘汰され、特別に高い、安い値段設定はされていないと考えられる。深夜に安い農産物を仕入れる労苦を払うことで、少しでも安く仕入れ、利用客が競合者に流れないように適度な値段で売ることが慣習になっているようである。深夜に農産物を仕入れることは、もちろん日中の販売活動に支障が出るからであろうが、誰もがやりたがるほど楽な活動ではない。魚売りが深夜のパシル市場に仕入れに行くのも同様である。

公設市場に並ぶ農産物は、50 種類以上に及ぶ。後述する穀類に至っては、品種とブランド名が多様であり、69 種類を確認した。本調査では、農産物のすべてをリストアップすることはできなかったが、K 集落の住民が主に購入している野菜は、小型のトマト (*kamatis*)、紫色の小型のタマネギ (*bombay*)、ショウガ (*luya*)、ニンニク (*bawang*)、トウガラシ (*espada*) などである。これらの農産物は頻繁に購入され、料理に利用される。スープ (*tinowa*) や、酢と塩とニンニクで煮た魚 (*paksiw*) によく合わせられる。タマネギ、ショウガ、ニンニク、トウガラシはスパイスでもあると考えられる。これらの農産物は、安値かつ少ない量で購入可能である。ニンニクは 1 かけらから購入できる。どれも 1 ペソから 5 ペソの範囲で買える。彼らの食の外部依存率は高く、食事は作るより、外で購入した方が、手間や労力の観点からも安上がりである。近くの食堂や露店で売られている料理をビニール袋に入れて持ち帰るが、1 品あたり 5 ～ 20 ペソ程度である。これら外部で購入した料理の中に

も、上記の農産物が含まれている場合がほとんどである。つまり、K 集落だけでなく、より広い範囲でこれらの農産物が利用されている。これらの農産物は、民間的な薬効が認められている (Quisumbing 1978)。K 集落の住民は経済的に貧しいことから、これらの安くて便利な農産物を多用していると表面的には見受けられるが、健康に適した素材として選択し、永らく利用してきたのかも知れない。

農産物は量り売りか個数ごとで販売される。公設市場すべての農産物売りの農産物の品目と仕入れ価格および販売価格について記録することはできなかったが、ここでは野菜売り 1 人と果物売り 1 人のデータを取り扱いたい。

まず、野菜売りの女性 GP 氏 (59 歳) について取り上げる。彼女は公設市場に 2 つのブースと小店舗 1 店を持つ。父親と親族と協力しながら、野菜売りを行っている。頻繁に深夜のカルボン市場周辺の露店に野菜の買い出しに行き、その後早朝から野菜の販売に従事する。彼女の野菜仕入れの経費は、交通費と露店周辺でポーター (*kargador*) 料などであり、それに儲けが上乘せされる。彼女が扱っていた野菜は 24 種類を確認したが、仕入れ価格と販売価格が明確に確認できた野菜 15 種類を表 8 に挙げた。

仕入れ価格と販売価格の差、つまり儲けを聞き出すのは野菜売りと著者の間にある種の「いやらしさ」を創り出す。野菜の販売単位、1 日の儲けなど、著者の側で明らかにできていない点はあるが、市場の一般の利用者の目も意識されている。GP 氏は著者に「自分は人びとのために良心的価格で野菜を売っている」と述べたが、ほかの野菜売りたちも競争の原理でおおよそ GP 氏に近い価格で野菜を販売していた。GP 氏は kg 単位で野菜を

表 8 コルドヴァ公設市場の野菜売り女性 GP 氏の野菜の仕入れ価格と販売価格 (著者作成)

和名	方名	仕入れ価格 (ペソ)	仕入単位	販売価格 (ペソ)	販売単位
ハヤトウリ	<i>sayote</i>	2	kg	7 ~ 10	kg
サツマイモ (葉)	<i>kamoteng tops</i>	4	kg	10	束
タマネギ	<i>sibuyas</i>	35	kg	76	kg
オクラ	<i>okura</i>	10 ~ 15	kg	20	kg
ショウガ	<i>luya</i>	120	kg	150	kg
トウガラシ	<i>espada</i>	100	kg	2	個
カボチャ	<i>kalabasa</i>	15	kg	20	kg
ユウガオ	<i>kalabasang puti</i>	10	kg	15 ~ 20	kg
ニンニク	<i>bawang</i>	76	kg	100	kg
ダイコン	<i>labanos</i>	10	kg	20 ~ 25	kg
ウコン	<i>luyang dilaw</i>	40	kg	60 ~ 85	kg
トマト	<i>kamatis</i>	20	kg	42	kg
シトウガラシ	<i>sili</i>	120	kg	200	個
ネギ	<i>dahong sibuyas</i>	120	kg	150	束
ワサビノキ (葉)	<i>kalunggay</i>	10	kg	2	束

仕入れるが、そのまま儲けを上乗せして kg 単位で売ることがほとんどである。Kg 以下の場合は g 単位で、トウガラシなどの小さなものは個単位で販売する。サツマイモの葉やワサビノキの葉は kg 単位で仕入れ、目分量および感触で束に分けたものを売る。仕入れ価格に対し販売価格はおよそ 25～250% 増しであり、コルドヴァの公設市場では野菜の値段が決して安いものでないことが伺える。野菜売りにとっては、これくらいの値段設定をしないことにはくたびれもうけの商いとなり、利用客が何とか手の出る価格設定になる戦略も講じられているはずである。要は、いかに野菜を安く仕入れるかが野菜売りたちの生命線となっていると言えよう。そのために、深夜のカルボン市場周辺の露店行きのジープニーが配備されているのだろう。ジープニーのオーナーは「コルドヴァ公設市場での需要があるから、ビジネスとして悪くない状態だ」と著者に述べたが、野菜の販売と供給はコルドヴァにとって不可欠であり、そもそも野菜が生育しにくい生態環境であることを再確認しておきたい。

次に、果物売りの女性 SN 氏（55 歳）の事例を確認しておきたい（表 9）。SN 氏は果物を専門に扱う。果物もカルボン市場周辺の露店で仕入れが行われるが、SN 氏の仕入れの詳細については不明である。彼女は 8 種類の果物を商っているが、ほとんどを箱単位で仕入れ、kg 単位、個単位で販売する。箱の中の果物の重量については不明だが、パイナップル、アボカド、マンゴーの仕入れ価格と販売価格の差と同程度とすると 15～65% 増しと推測できる。

以上、野菜は流通のシステム上、高価となり、利用客の購入と摂取は最低限に控えられると考えられる。その結果、K 集落の人びとに見られるよう、小型の農産物かつ個単位で安く買えるものが調理に基本的な農産物として日常的に利用されるのであろう。もちろん、より高値の農産物を買える層の人びとの存在を捨象してはならない。しかし、公設市場は購買力のある人びとをより対象としているのではなく、K 集落の人びとのような貧しい

表 9 コルドヴァ公設市場の果物売り女性 SN 氏の果物の仕入れ価格と販売価格（著者作成）

和名	方名	仕入価格 (ペソ)	仕入 単位	販売価格 (ペソ)	販売 単位
パイナップル	<i>pinya</i>	15	個	25	個
アボカド	<i>abokado</i>	35	kg	50	kg
マンゴー	<i>mangga</i>	60	kg	70	kg
ランブータン	<i>lambutan</i>	600	箱	50	kg
マンゴスチン	<i>mangostin</i>	1,000	箱	50	kg
バナナ	<i>saging</i>	1,100	箱	45	kg
リンゴ	<i>mansanas</i>	1,400	箱	12	個
ミカン	<i>dalandan</i>	850	箱	15	個

層にも向けて解放された商取引の場であることを指摘しておきたい。

3-4. 穀類について

穀類は、市場の雑貨屋と米屋、そして市場周辺の米屋で売買されている（写真 12）。穀類はセブ本島をはじめフィリピン各地、そして外国産穀類も、セブ市内の加工工場や商社に集積される。そのネットワークについては現時点では不明であるが、卸売り業者が中に入り、市場や米屋に運ばれる。コルドヴァにも穀類の流通で財を成した卸売り業者が確認できる。コルドヴァの公設市場では、米屋は卸売業者から穀類を買い、雑貨屋はカルボン市場やラプラプ市場で仕入れる。

コルドヴァの公設市場では少なくとも 69 種類の穀類が売買されていることが判明した（表 10）。米類 65 種類、トウモロコシ 4 種類である。米は、4 種類におおよそ区分でき、1) *sinadomeng* (22 種類)、2) *denorado* (7 種類)、3) *pilit* (3 種類)、4) *ganador* (2 種類) であり、いずれの範疇に属するか不明なものが 34 種類確認できた。*Pilit* はもち米であるが、ほかの 3 の範疇が、品種名を指すのか、ブランド名を指すのかは不明である。これらの範疇はまた絶対的なものではなく、*sinadomeng* に含まれるべき種類が *denorado* に、*ganador* に含まれるべき種類が *sinadomeng* に包括されている事例もある。下位分類があるはずだが、同一の店舗で価格が異なる複数の *sinadomeng* や *denorado* が売られているのも確認した。本稿では明らかな齟齬があるものを除き、妥当と思われる範囲で掲載した。

米の名称は多彩である。本稿では名称の分析に深く立ち入らないが、産地、動植物名、希望などプラスの希望目標を記したもので様々である。産地については、ビサヤ地域では、ボホール、レイテ、オルモック産とされる米が確認できる。*Local Rice* という名称の米もあるが、どこを起点に *local* であるのか不明であり、セブ島産の米かどうか判断し兼ねる。そのほかの地域では、ミンダナオ島のサンボアンガ、ダバオ、ディゴス、そしてパラワン島、マニラの名のついた米が確認できた。*Mount Fuji* という日本をイメージさせる銘柄もあり、米の名づけと価値が一致するのかどうかあやしい。地名以外でも、ビールの *Asahi Premium* や、人気テレビ番組であった *Wowowe* と名づけられた米があるなど、流通と品質の背景がぼやかされている命名が目につく。公設市場で米を売る人びとは、米袋の表示どおり販売しているが、独自に目立つような売り文句を書き加えている店舗もある。

米の値段は安いもので 1kg あたり 32 ペソから購入できるが、味や匂いが良くないとの評価がある。平均

表 10 コルドヴァ公設市場で確認された穀類の名称と値段(著者作成)

	米の名称	雑貨屋の値段平均 (ペソ/kg)	米屋の値段平均 (ペソ/kg)
Sinandomeng	Amazon	-	38
	Best Farmer	-	36.5
	Cherry Brand	-	39
	Davao Rice	-	40
	Dragon Heart	38	40
	Friendship	41	40.2
	Ganador	50	-
	Liberty	-	32
	Lion Ivory	45.6	45
	Mt. Fuji	-	38.5
	New Horizon	-	44
	Plain Blue	36	35
	Premium Rice	37	44
	Rainbow Sky	38	-
	Rice Vally	-	38.5
	Sechin	-	37.6
	Sinandomeng 1	42	-
	Sinandomeng 2	40	-
	Sinandomeng 3	44	-
	White Rose	46	40.5
Wowowe	-	39.5	
Young Crow	44	-	
Denorado	Chief Choice	42	41
	Denorado 1	45	-
	Denorado 2	47	-
	Dona Conchita	42	42.6
	Excellent Manila	-	42
	Excellent Yellow	-	33
Wowowe	-	40.3	
Pilit	Pilit	51.5	50
	Pure Pilit 1	-	60
	Pure Pilit 2	50	-
Ganador	Ganador	49	48
	Ganador Broken	34.7	34
不明	Asahi Premium	-	37
	Bohol Rice	34	32.5
	Bouquet	-	41
	Bro Brand Premium	-	39
	Champion	46	38.2
	Classic Rice	33	-
	Digos Rice	-	43
	Empel's Choice	-	40
	Five Star	36	-
	Four Season	-	40.3
	Jam White	-	32
	Jegan Rice	35	-
	JRM	33	-
	Leyte Rice	38	43.2
	Local Rice	-	44.2
	Lotus	35	-
	Magic Star	-	42
	Mercy Rice	-	42
	Mindanao Rice	-	42.7
	Monkey King	-	40
	Ormoc Rice	-	43.2
	Pagasa	-	42
	Palawan Rice	-	36.5
	Plain White	-	32
	Pure Harvest	-	38.5
	RC Yellow	35	-
	RPG Ilo-Ilo Rice	34.6	34
Sun Rice	35	-	
White Crystal	38	-	
WMR	35	-	
Zamboanga Rice	-	41.5	
トウモロコシ	Mais	32	32
	Mais #14	31	32.3
	Mais #16	32.6	32.2
	Yellow Corn	-	26

的価格は 1kg あたり 40 ペソ程度である。sinadomeng、denorado、ganador に顕著な価格の違いは認められない。高いものは 1kg あたり 60 ペソに達するが、もち米である。米を買う余裕がない場合、安価なトウモロコシが購入される。政府配給米は毎週土曜日に 1kg あたり 28 ペソ程度で売られるが、原則 1 人 1 回 1kg しか購入できないという。

雑貨屋では、5～12 種類の米が売られているのを 7 店で確認した。平均では 7 種ほどの米が扱われている。一方で、米屋では 11～30 種類の米が 5 店で売られているのを確認した。平均して 20 種程度の米が販売されており、米屋の方が品揃えの良いたことが伺える。また、米屋では米袋が積まれており、量的にも雑貨屋をしのいでいる。米の値段については、雑貨屋も米屋も大きな違いは確認できない。儲けは米の種類や店舗の戦略により一様ではないが、1 袋 2,000 ペソで購入した場合、儲けは 150 ペソ程度であるという。コルドヴァ公設市場内とその周辺に米を売る店舗は 12 店舗ほどあり、競合関係にあることから 1 人勝ちするような儲けは期待できないようである。ただ、卸売業者はその邸構え、商態、人びとの話から盤石に利益を上げていることが伺われる。卸売業者の実態と公設市場で米を売る人びとの関係性だけでなく、フィリピン国内の米の流通構造の解明など今後の大きな課題である。

4. まとめと考察

以上、本稿ではセブ州マクタン島コルドヴァの農産物の流通の実態について報告してきた。本稿は公設市場の農産物売りの農産物の売買行動、市場での人とモノとの関係性について解明することを期した。しかし、実際には、農産物売りの人びとの全体性の把握と個々の生活誌、農産物の多様性と経済性、売買行動の人間関係といった根本的な情報について断片的な調査結果となっており、本稿では具体的に明らかにすることができなかった。ほかにも問題があるかと思われるが、今回の調査以降の重要課題が明確となった。以下、本稿のまとめを行い、結果について考察する。

コルドヴァでは公設市場に農産物が並ぶが、農産物の栽培が行われていない、貧しい地区の人びとは野菜をほとんど摂取できていない、という状態が本稿の問題意識である。コルドヴァは漁獲が盛んに行われているが、きわだった石灰岩土壌であり、農産物は生育しにくい。貧しい小規模漁民たちは、漁獲を魚介類以外の食料に交換することを望むが、大家族分の米、既製品のおかず、嗜好品、子どもの学費や小遣い、光熱費、そのほか

雑費などで1日の稼ぎが飛んでしまう。調査地であるK集落の人びとの家計経済の全体を示すことは本稿では叶わないが、統計資料(Municipality of Cordova 2004, National Statistics Office 2004)で示されたよう出費が収入を上回る傾向にあるのは確かである。彼らは安価な既製品のおかずを頻繁に購入するが、その中にごく少量の農産物が含まれている程度である。農産物を購入することもあるが、販売単位の小さいニンニク、ショウガ、トマト、タマネギ、トウガラシがほとんどである。たまに、市場の野菜部門の清掃を手伝い、野菜売りから野菜クズを入手する。本稿では、貧しい位置にいる人びとの農産物の購買と摂取が少ないことを強調したが、豊かな世帯でも同様の事例が確認できる可能性が否定できない。しかし、一般性より、問題点を記述することの方が重要であるとの立場から、本稿では農産物の購買と摂取が現実的に困難な貧しい層の人びとと農産物との関係に着目した。

農産物はまったく栽培されていないわけではない。家屋の脇で小さな家庭菜園で農産物を育てる者もいるが、日常的な食事や栄養には不十分である。人びとは農産物の代わりに、自生や半栽培の植物を利用する。タマリンド、ココヤシ、バナナをはじめ20種の植物を確認した。いずれも食用にされるものばかりである。人びとが頻繁に利用しているのはワサビノキの葉っぱである。ワサビノキは栄養価に富み、干ばつにも強い。人びとがワサビノキの栄養価について積極的に言及することはないが、古くからの在来知が作用しているのかも知れない。人びとは農産物の不足を、このような自生および半栽培の植物で補っていると考えられる。日常的に人びとが購入するニンニク、ショウガ、トマト、タマネギ、トウガラシといった農産物には薬効も認められている。

K集落の住民の平均世帯人数は4.8人であり、フィリピン全体平均の4.6人を上回る。就業形態は、漁撈、日雇い労働、公設市場での魚・貝売り、トリシカッド・トライシクル運転手、製造業が目立つ。漁撈で捕った魚や貝を市場で売るのが基本だが、状況に応じて日雇い労働に従事する。あるいは、無職となる。1日の法定最低賃金は約350ペソ(約月収7,000ペソ)だが、それ以下のケースもある。一方、製造業では、月収11,000~27,000ほどであるが、家族や親族を扶助するために用いられることから貧困から逃れられるわけではない。1日350ペソ程度の収入では、支出が収入を上回することは前述した。人びとの具体的な農産物の購買行動についてデータはないが、製造業に従事する成員がいる世帯でも農産物が十分に購入できない状況にある。そのような

世帯の成員が、野菜クズを得るため勤んで市場の清掃をしている。

K集落と公設市場の地理的距離はきわめて近い。しかし、人びとは農産物にアクセスしづらい。人びとの食行動を観察していると、よほどのことがない限り米は購入する。それに、魚介類や既製品のおかずが組み合わさる。農産物の摂取はごくわずかである。女性を対象にした栄養調査の結果、そもそも摂取カロリー自体が1日あたりの理想的指数2,000kcalを大きく下回る結果となった。農産物については、15~33kcal程度に過ぎず、ほとんど摂取できていないことが明白となった。漁村という環境上、魚介類の摂取は何とか足りているが、それ以外の栄養は不足している傾向にある。食物の地域外供給率は90%前後であり、魚介類以外は供給できていない。農産物は外部に依存しており、人びとが手近で気軽に利用できるものではない性質のものである。

公設市場は、鮮魚、野菜、果物、精肉の生鮮部門と、雑貨、穀類などの生活必需品部門に大きく分かれる。常に人ごみで活気があるのは前者である。市場にはブースや店舗が設けられ、役場から使用料が課せられる。専用の売り場を持たない売り子は、使用料を納め、地べたなどで商売をする。生鮮部門にはパシル市場やカルボン市場などセブ本島から運ばれた鮮魚、野菜、果物が並び、地場の海産物も一角を占めている。精肉もセブ本島から運ばれる。市場は毎日開かれており、夕食前の時間帯17時半頃に人びとが多く集う。市場の周辺は、市場の利用者を見込んだ食堂やカラオケなど人びとに必要とされる店舗が囲んでいる。市場では、g単位や個単位で商品が売買される。Davis(1973)が指摘したように、購買力のない者でも市場での売買に参入できるような仕組みが成立している。スキ関係についてはその存在について確認したが、スキ関係による人びとの結束や問題点などについての具体は解明できていない。

農産物の仕入れは、深夜に行われていることが明らかとなった。専用のジープニーで隊商を組み、人びとはセブ本島まで仕入れに出かける。農産物の仕入れは、人びとの語りからもカルボン市場で行われると思われたが、追跡調査の結果、カルボン市場周辺の繁華街の通りの脇に列をなす露店から仕入れることが判明した。こちらの方が、カルボン市場で仕入れるより安く、人びとは明け方まで農産物の仕入れに勤しむ。農産物の販売と同様、仕入れもほぼ女性の仕事であることがわかった。誰でも農産物売りができるのではなく、市場使用料、仕入れの交通費、農産物の仕入れ代金など資本がなくてはならない。GPS調査の結果、コルドヴァをはじめマクタン島の

農産物売りなどの人びとは、カルボン市場周辺の繁華街の露店に依存していることが伺われた。

農産物の値段は、産地から様々な段階を経て、多様な人びとを介して運ばれることから、値段は上乘せされる。コルドヴァに農産物が到着した頃には、農産物の値段が生産地の卸値を破格に上回っていることは確かであろう。コルドヴァでは、カルボン市場周辺の繁華街で仕入れた野菜や果物が25～250%増しの高値で売られていることが判明した。農産物売りは少しでも安い農産物を求めて、深夜の厳しい農産物の仕入れを行うが、それは少しでも他者に差をつけ利益を上げようとする戦略である。農産物売りが成立するのは、もちろん農産物に需要があるからであるが、K集落のような購買力の弱い人びとにも農産物を供給する責務が期待されていると考えられる。K集落の人びとにとって、農産物は調理の味つけになる程度の少量のものを除いて、購入するのが敬遠される傾向にあると思われる。むしろ穀類の基本的摂取に価値が置かれる。

穀類は、おかば、もち米、トウモロコシに分けられる。公設市場の非生鮮部門の店舗および市場周辺の店舗で売られている。公設市場では調味料などの雑貨と穀類を扱う店舗と穀類のみを扱う店舗が区別される。両者の違いは、穀類の仕入れ方の違いである。前者はカルボン市場（野菜売りと同様、市場周辺の繁華街の露店であるかも知れない）、時にはマクタン島の中心のラプラプ市場で仕入れるという。後者は、卸売り業者から米袋単位で直接仕入れる。両者の売り値には顕著な差は認められなかった。穀類は69種類のブランドを確認した。ブランド名は産地を表すものが確認できる一方、多くは恣意的と思える命名であった。

ここでコルドヴァにおける農産物の流通について、問題となっている農産物の不足と人びとの対応について若干の考察を行い、本稿を締めくくりたい。コルドヴァの土壌が石灰岩質で農産物の栽培に適していないことが、本地域で農産物が不足する大きな要因である。地域での農産物の不足は、公設市場の農産物売りの仕入れの努力によって埋め合わされている。問題は、農産物の値段が高値となり、誰もがアクセスできないところにある。特に、K集落の小規模漁民社会では、漁撈で得た産物で穀類を入手することはおおそ達成できているが、農産物の十分な獲得と摂取には至っていない。商品を生産する側と買い取る側は、パトロン＝クライアント関係やスキ関係によって結ばれ、経済力によって階層化されていることから、漁民は弱者の地位に置かれてきた（秋道2013）。よって、農産物売りと関係が構築できていない

場合や、関係が希薄な場合、農産物を安価に融通してもらうことが成り立ちにくいと考えられる。たいていの場合、信用貸して農産物を供与することで、両者のスキ関係は強化され、漁民は農産物売りに対し従属化していく。K集落の漁民世帯の構成員が、夜から深夜にかけ、公設市場の農産物売りの部門を清掃し、クズ野菜や小額の現金を受け取るのもスキ関係の反映であろう。ここでは漁撈と農業の間に互酬的な関係が成立していない。農産物売りを農業と結びつけるのは間違いで、彼らは資本を持った商人であると考えの方が現実的に即している。コルドヴァのような生態環境では、純粋な農民はそもそも存在しない。漁民と商人の間では互酬性が成り立ちにくく、スキ関係といった後者に有利なシステムが構築されていることは先行研究が明らかにしてきた問題である。よって、K集落の漁民が農産物にアクセスしづらいのは、農産物売りにとってスキ関係を築く対象とみなされておらず、資本を投下すべく便益がないと考えられているからであろうと考えられる。

農産物の流通は、農産物の乏しい所に農産物を運ぶことに、社会的かつ経済的な意味がある。コルドヴァでは農産物の需要は高く、農産物の流通をめぐる様々なアクターが存在する。農産物売りがその代表だが、カルボン市場周辺繁華街への農産物の仕入れに使うジープニー業者、繁華街の農産物の露天商が少なくともコルドヴァへの農産物供給に直接関わっている。さらに、生産地からカルボン市場周辺繁華街までの流通を含めると、相当の人のネットワークがかさんでいることが推測できる。農産物売りと露天商の間においてもスキ関係が構築されている可能性がある。コルドヴァの農産物売りが露天商から農産物を仕入れる場合、ほかの市場よりは安価であるかも知れないが、露天商とのスキ関係においては必ずしもそうとは限らないとも考えられる。農産物売りは、農産物不足の地コルドヴァにできる限り安く農産物をもたらそうとする反面、できる限り高く売ろうとする力学も働いている。農産物の仕入れは、重労働であり、身を削る側面もあり、運搬を除くと、女性が主に従事する。労働対価がある程度農産物の値段に反映されるのは自然である。農産物の値段は高いが、それは明らかに流通の複雑性と労働投下量の現れである。儲けを出すことが農産物売りには求められる。大きな値引きはスキ関係者に行われないと考えられる。世帯への農産物の流通の多寡は、世帯の経済レベルと関係することがほぼ明らかである。K集落では、料理の味つけに用いる小野菜、既製品のおかずに入った少量の農産物しか流通していない。集落の人びとはそれ以上の農産物のネットワークに乗れ

ずにいる。

以上、農産物の不足と流通の問題は、社会資源としてのネットワークの不全と大きく関係している。コルドヴァ公設市場の農産物売りは相当の労力をかけて農産物の仕入れを行う。それに対して、K集落の小規模漁民は農産物を十分に購入する経済的余裕がない。つまり、農産物売りにとって、好ましい客ではない。また、野菜クズ欲しさに、市場の清掃を引き受ける立場の低い人びとである。このような人びとを相手にすることは、農産物売り自らの戦略を成り立たなくし、危機に陥るかも知れない。農産物をツケで所望され、代金が回収できなくなり、農産物売りの生計だけでなく社会関係にも影響しかねない。物売りは計算高くなくてはならない。スキ制度はその一側面であろう。一方の漁民もまた、農産物の不足について、自生や半栽培の植物で補い対応している。彼らが利用する植物のほとんどに栄養価値と薬用価値がある。農産物が不足しているので仕方なくこれらの植物を利用しているとみなされるかも知れない。彼らの語りには現れないが、自生や半栽培の植物は古くから在来知に基づき利用されてきたと強く考えられる。農産物をそれほど摂取しなくても、K集落の人びとの中には健康な人もいる。地域や個体の状態によるが、農産物を購入・摂取できなくとも、ある程度人間は健康に生きていけるのではないかという問題も浮かび上がった。今後、これらの問題についても明らかにしつつ、コルドヴァ公設市場の農産物売りに焦点を当てた市場研究を行い、市場の構造と機能の全体像を解明することが本稿以降の課題である。

謝辞

本稿は、平成26年度科学研究費補助金基盤(A)「乳文化の視座からの牧畜論考—全地球的地域間比較による新しい牧畜論の創生」(代表者:平田昌弘)の成果の一部である。調査では、特に食事調査において、AMおよびJM夫妻から多大な協力を得た。公設市場の商人の方々や、他地域から野菜や魚介類を運搬するジープニー業の方々からも支援を得た。ただ、著者がマクタン島で調査を開始して以来、ずっと息子のように面倒を見てくださったホシムシ採集の名人Magdalena Aro氏が2015年7月31日からの調査の間近に亡くなられた。本稿をAro氏に捧げたい。

注

(1) スキ(*suki*)とは、パトロン=クライアント関係に近い人間関係の紐帯で、上位者は下位者に金銭などの庇護を行い、下位者

は金品などの無心をすることで結ばれている。結果、上位者は下位者に対し優位に立ち、下位者は上位者に従属的になる。関係の濃淡や強弱については当事者間の事情によるが、フィリピン各地で確認できる文化的かつ社会経済的事象である。

(2) 干潮時の干潟では、日常的な光景として、貝を中心とする食用魚介類を採捕する人びとでにぎわう(辻 2007b)。

(3) 1999年から2004年まではDinagat Festival、それ以降はBakasi Festivalと呼ばれてきた(辻 2007)。最近になり、再びDinagat Festivalという呼称が使われている。Dinagat—Bakasi Festivalは役場資料(Municipality of Cordova 2014)の記述に基づくが、混乱を避けるため列記されていると思われる。

(4) 魚類については、魚売りがパシル市場などに買い出しに行く以外に、午後にトラックで外部から魚が運ばれてくるのを確認した。おそらく、スキ関係で結びついた卸売り業者か仲買人によるものと推測される。

(5) ワサビノキの葉っぱを野菜として利用する慣行は、フィリピンのほか、マレーシアとインドで確認できる(Quisumbing 1978)。

(6) 調査当時の為替レートは、1ペソ=約2.7円であった。

(7) フィリピンでは、月収59,999ペソ以下の世帯の支出は収入を上回る赤字傾向であることが示されている(National Statistics Office 2014)。

(8) フィリピンには、日本の中学校に相当する教育制度がない。小学校の次が高等学校である。小学校は6年制、高等学校は4年制である。

(9) 世帯調査の方法によって世帯人数のデータの信頼性は変わってくるが、本稿では厳密な分析は行えず、利用できる資料の記述に委ねる。

(10) トリシカッドは自転車の側面に荷台をつけた乗り物で、トライシクルは250cc程度のバイクの側面に荷台をつけた乗り物である。トリシカッドは人力でガソリン代がかからないが、長距離の移動に適していない。トライシクルの移動範囲は、せいぜいマクタン島の中心ラプラブ市内までである。

(11) 政府の国家健康計画(National Health Plan)では、フィリピン国民のカロリー平均摂取量について、1995年の1,913 kcalから、2000年には2,000 kcalへの向上が目指された(Florencio 2004)。一方で、2009年のデータとして、2,580 kcalという大きく異なる数値も確認できる(香川編 2014)。

(12) K集落では洗濯機は普及しておらず、洗濯板を使った手洗いが一般的である。洗濯機は5,000ペソほどの安価なものが販売されており、近い将来、洗濯の様子は変化するかも知れない。

(13) 2015年8月、聖人(*San Roque*)を祀る祭り(*Fiesta*)がコルドヴァで行われた。祀る対象や行事には地域性が見られる。このような機会には、親族だけでなく近所の人びとも、豪華な料理でもてなさなくてはならない。そのような経済的余裕はJMの世帯には決していないが、それでも行うべきだと主張し、実姉から借金をした。

(14) 日本の一般的な消費者金融では出資法により29.2%が金利の上限であるが、本稿のケースの場合、月利20%で借金が行われていた。金利に直すと240%ほどに相当する。

(15) 家畜は、ブタ、ヤギ、ウシ、ニワトリが確認できるが、ニワトリ以外、ごく少数である。ニワトリはほとんど鬮鶏目的で飼養されており、食用ではないという。家畜飼養については、別稿で詳細を論じた(辻 2016)。

(16) 嗜好品でも、タバコや酒の場合、所得の低い層の方が支出に占める割合が高い(National Statistics Office 2014)。

- (17) マクロなレベルの食物への支出割合については National Statistics Office (2014) を参照願いたい。
- (18) 2005 年、タイからの米の輸入が滞り、米が手に入らない事態が生じた。コルドヴァの公設市場には深夜から大量の人びとが政府配給米を待ち大行列を作った。
- (19) 加工の際などに余った野菜クズは数種類まとめて袋詰めにして売られる。1 袋 10 ~ 20 ペソ程度。野菜の種類は一定ではないが、ハヤトウリ、カボチャ、キャベツ、オクラ、ナス、ジュウロクササゲなどが挙げられる。クズ野菜目当てに公設市場の清掃を手伝う人も少なくない。中には、専属状態の清掃人も 6 人程度おり、市場が閉じると清掃を開始し、夜中の 3 時頃まで警備の役を担う。お返しに野菜や 50 ペソ程度の現金をもらう。
- (20) 簡易的な血圧検査を実施した。明らかに自分は高血圧や糖尿病だと言う人びとの血圧は確かに高血圧であった。しかし、高血圧が野菜の不足だけによるものかは不確かであり、調味料、嗜好品、生活習慣などとの連関から調査されねばならない。高血圧や糖尿病の問題は K 集落のミクロな現象でなく、フィリピン全体におけるマクロな現象であることを確認しておきたい。
- (21) 軽トラックに乗客用の荷台をつけたモーティカブ (*multi cab*) やシャトル (*shuttle*) と呼ばれるバンなど、公共の自動車は市場に乗り入ることは規制されている。これらの乗り物は、町の主要な道路に専用のターミナルがある。
- (22) ここでの魚介類とは、魚類、貝類、カニなどの甲殻類、ナマコやウニなど棘皮類、テングサなど海藻類を指す。
- (23) コルドヴァでも、K 集落の近くで、地主が養豚場を営んでいるが、流通先については確認できていない。
- (24) 近年では、バンが、セブ市内の主要地域とコルドヴァを結んでいる。ジープニーは大型の荷物を運搬することが可能だが、モーティカブやバンでは人を運ぶことが優先される。
- (25) セブ州では、少なくとも 78 種の作物が栽培されている (National Statistics Office 2004, 2006)。
- (26) なぜ、深夜の露店の農産物が安いのかは明らかにできていない。市場ではなく露店で売ることによって経費を下げる、流通の過程で多重にかかる人件費を削減する、などの理由が考えられる。穿った見方として、鮮度が劣る農産物が値を下げて売られているのかも知れない。
- (27) セブ州の主要作物は、トウモロコシ、サトウキビ、マンゴー、バナナ、プランテンバナナ、キャベツ、サツマイモ、キャッサバ、ナスビ、リョクトウ、ピーナッツ、トマト、タバコである (Bureau of Agricultural Statistics 2013, Philippine Statistics Authority 2014)。
- (28) ニンニクは高血圧、タマネギは駆虫、健胃、強壮、下痢、コレラ、痛み、無月経、ショウガは健胃、興奮剤、トウガラシは腸チフス、水腫、痛風、消化不良、コレラなどに効用がある。トマトは、リン、ビタミン A・B・C を豊富に含む (Quisumbing 1978)。
- (29) 2015 年になり、コルドヴァの公設市場に公定の秤が設置された。商品の重量の多寡をめぐりいさかきが存在するのであろう。
- (30) 実際に目分量および感覚で農産物を束にして売っているのではなく、長年の農産物売りとしての経験が身体化し、精度の高い秤になっていると考えられる。あるいは、消費者が納得できる量の束を販売しているのかも知れない。
- (31) Abuyen (1994) によると *ganador* は「勝者」の意である。

参考文献

秋道智彌 2013 『海に生きる - 海人の人類学』東京大学出版会
 Abuyen, T. 1994. *Dikshionario Watay-Waray (Visaya) : English-*

- Tagalog*. 出版社不明。
- Brown, W. (eds.). 1921. *Minor Products of Philippine Forests, vol. 1*. Manila: Bureau of Printing.
- Bureau of Agricultural Statistics. 2013. *Major Crops Statistics of the Philippines 2008-2012 (Regional and Provincial)*. Quezon City: Bureau of Agricultural Statistics.
- Davis, W. 1973. *Social Relations on a Philippine Market-Self-Interest and Subjectivity*. Berkeley: University of California Press.
- Fenner, B. 1985. *Cebu under the Spanish Flag (1521-1896) : An Economic and Social History*. Cebu City: San Carlos Publications.
- Florencio, F. 2004. *Nutrition in the Philippines: The Past for its Template, Red for its Color*. Quezon City: The University of the Philippines Press.
- Garong, A. 2013. *Ancient Filipino Diet: Reconstructing Diet from Human Remains Evacuated in the Philippines*. Cebu City: University of San Carlos University.
- 香川芳子編 2014 『食品成分表 2014』女子栄養大学出版部
- Kawada, M. 1994. Public Market in Bantayan: Social Ties in Local Economic Activities. In Ushijima, I. and C. Zayas (eds.). 1994. *Fishers of the Visayas: Visayans Maritime Anthropological Studies*. Quezon City: UP Press, pp.203-231.
- Kobayashi, T. 2000. Selling Fish in the Market of Capiz. In Ushijima, I. and C. Zayas (eds.). 2000. *Bisayan Knowledge Movement & Identity: Visayan Maritime Anthropological Studies*. Quezon City: UP Press, pp.203-222.
- Municipality of Cordova. 2004. *Municipality of Cordova Comprehensive Municipal Profile: including Plans, Programs, and Accomplishments Province*. Cebu: Municipality of Cordova.
- Municipality of Cordova. 2010. *Municipality of Cordova, Cebu Province: Socio-Economic Profile*. Cebu: Municipality of Cordova.
- Municipality of Cordova. 2014. *Municipality of Cordova, Cebu Province: Ecological Profile*. Cebu: Municipality of Cordova.
- National Statistics Office. 2004. *2002 Census of Agriculture: Central Visayas, vol.1*. Manila: National Statistics Office.
- National Statistics Office. 2006. *2002 Census of Agriculture: Central Visayas, vol.2*. Manila: National Statistics Office.
- National Statistics Office. 2014. *2012 Family Income and Expenditure Survey*. Manila: National Statistics Office.
- Ogawa, T. 1996. The Kogengaku Approach to the Study of Sari-sari Stores in Victory Island, Eastern Samar. In Ushijima, I. and C. Zayas (eds.). 1996. *Binisaya nga Kinabuhi [Visayan Life]*. Quezon City: UP Press.
- Philippine Statistics Authority. 2014. *Major Crops Statistics of the Philippines 2009-2013 (Regional & Provincial)*. Quezon City: Philippine Statistics Authority.
- Quisumbing, E. 1978. *Medicinal Plants of the Philippines*. Caloocan City: Katha Publishing Co., INC.
- Scott, W. 1992. *Looking for the Prehispanic Filipino*. Quezon City: New Day Publishers.
- 関恒樹 2007 『海域世界の民族誌 - フィリピン島嶼部における移動・生業・アイデンティティ』世界思想社
- Spoehr, A. 1980. *Protein from The Sea: Technological Change in Philippine Capture Fisheries*. University of Pittsburgh.
- Szanton, D. 1971. *Estancia in Transition: Economic Growth in a Rural Philippine Community*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

- Tsuji, T. 2013. "The Technique and Ecology Surrounding Moray Fishing - A Case Study of Moray Trap Fishing on Mactan Island, Philippines-". Rintaro Ono, David Addison, Alex Morrison (eds.). *Prehistoric Marine Resource Use in the Indo-Pacific Region*. Australian National University Press, pp. 167-181.
- 辻貴志 2007a 「フィリピン・セブ州マクタン島におけるウツボ漁に関する調査ノート」『人間文化』第22号、141-151頁。
- 辻貴志 2007b 「フィリピン・マクタン島沿岸域におけるサルボとタツナミガイの採捕と利用」『日本熱帯生態学会ニューズレター』第68号、6-12頁。
- 辻貴志 2015 「フィリピン・セブ州マクタン島における潜水採貝漁の事例報」『社会情報研究』第14号、63-79頁。
- 辻貴志 2016 「フィリピン沿岸域の生業と生物資源利用における家畜と乳利用の実態」平田昌弘編『公開シンポジウムの記録 家畜化と乳利用 - その地域的特質をふまえて - 搾乳の開始をめぐる谷仮説を手がかりにして』2015年5月16日・17日公開シンポジウム事務局、125-137頁。
- Umali, A.F. 1950. *Guide to the Classification of Fishing Gear in the Philippines*. Washington: United States Government Printing Office.
- Ushijima, I. and C. Zayas (eds.). 1994. *Fishers of the Visayas: Visayans Maritime Anthropological Studies*. Quezon City: UP Press.
- Ushijima, I. and C. Zayas (eds.) 1996. *Binisaya nga Kinabuhi [Visayan Life]*. Quezon City: UP Press.
- Ushijima, I. and C. Zayas (eds.). 2000. *Bisayan Knowledge Movement & Identity: Visayan Maritime Anthropological Studies*. Quezon City: UP Press.
- 吉田よし子・菊池裕子 2001 『東南アジア市場図鑑 - 植物篇』弘文堂
- Zayas, C., Kawada, M. and L. de la Peña. (eds.). 2014. *Visayas and Beyond: Continuing Studies on Subsistence and Belief in the Islands*. Quezon City: UPCIS Publications.



写真 1

コルドヴァの海・ウツボ祭りの様子

(2015 年)



写真 2

農耕に適さないコルドヴァの石灰岩土壌

(2015 年)



写真 3

山地部（マンタロンゴン）から低地に野菜を運ぶ男性

(2015 年)

写真4

山地部（マンタロンゴン）の農
耕
(2015年)



写真5

ワサビノキの葉っぱを使った
スープ
(2015年)



写真6

コルドヴァ公設市場で売られる
ワサビノキの葉っぱ
(2014年・平田昌弘撮影)





写真7

コルドヴァの公設市場正面
(2015年)



写真8

コルドヴァ公設市場で野菜を売る男性
(2015年)



写真9

深夜のカルボン市場周辺の露天
で農産物売る人びと
(2015年)

写真 10

荷と人を積んだジープニー
(2015年)



写真 11

ネズミに食害されたナスビ
(2015年)



写真 12

コルドヴァ公設市場で売られる
穀類
(2015年)



編集委員

志野敏夫

山形真理子

徳澤啓一

アジア地域研究 第1号

発行者 岡山理科大学経営学部経営学科

発行年 2018年3月

発行所 岡山理科大学経営学部経営学科
〒700-0005 岡山市北区理大町 1-1
086-256-8451
<http://www.mgt.ous.ac.jp>

印刷所 富士印刷株式会社
〒700-8002 岡山市中区桑野 516-3
086-276-1331

Journal of Asia Regional Studies No. 1

March 2018

Articles

Reexamination of Salt and Iron in Ancient Southeast Asia

Eiji NITTA..... 1

Southward Expansion of Han Style Artifacts

: Viewed from Archaeological Research of the Tra Kieu Site in Central Vietnam

Mariko YAMAGATA.....11

Collection of Glass Ornaments Stored by the Museum of Vietnamese History, Ho Chi Minh City

Nguyễn Thị Hoài Hương, Yuko HIRANO, Keiichi TOKUSAWA21

Research Notes

25 Years Record of Whaling Culture in Lamalera, Indonesia

Tomoko EGAMI, Kotaro KOJIMA..... 35

Classification and Transfer of the Traditional Earthenware-making in Xishuangbanna

: Over Relationship between Eastern Myanmar and Yunnan Province in China and Northern Thailand

Keiichi TOKUSAWA, QIN Zhuxuan, Naoto MOCHIDA..... 61

Research Reports

A Research on the Distribution of Agricultural Products in Cordova, Mactan, the Philippines

Takashi TSUJI..... 77

*Department of Management, Faculty of Management,
Okayama University of Science*